

地域交流研究

2009年度

年報 第6号

目次

第6回地域交流研究フォーラム

始めの挨拶	杉本 光司	2
『山・里・町をつなぐフィールド・ミュージアム』		
Ⅰ. 山で学ぶ	坂田 有紀子、泉 桂子、白戸 溪子	4
Ⅱ. 里・町で学ぶ	西本 勝美、北垣 憲仁	16
Ⅲ. つなぐ・はぐくむ	高田 研、杉山 由貴乃・桜井 明子	24
『大学生や地域の方による展示・交流』		
『ミニコンサート&フィールド・ミュージアム・カフェ』		
終わりの挨拶	畑 潤	37

2009 (H21) 年度活動報告

Ⅰ. 2009年度の活動について (概況)		42
Ⅱ. 各部門の活動		43
Ⅱ-1. フィールド・ミュージアム部門		
Ⅱ-2. 発達援助部門		
Ⅱ-2-1. SAT事業		
Ⅱ-2-2. 地域教育相談室		
Ⅱ-2-3. 地域情報教育		
Ⅱ-3. 暮らしと仕事部門		
Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動		62
Ⅲ-1. 第6回地域交流研究フォーラムの開催		
Ⅲ-2. 各種講座の開催		
Ⅲ-3. 『地域交流センター通信』の発行		
Ⅳ. 地域貢献活動		70
Ⅳ-1. 山梨県地域教育フォーラム南都留集会		
Ⅳ-2. 都留市子ども教室事業		
Ⅳ-3. ボランティア広場		
Ⅴ. 地域交流研究教育プロジェクト		75
(付) 2009 (H21) 年度地域交流研究センター担当教員・運営委員		84

第6回 地域交流研究フォーラム

「ようこそフィールド・ミュージアムへ！」

- 自然と人をつなぐ、人と人をつなぐ、
生き生きとした
新しい地域社会の創造に向けて —

2010年2月20日（土）

都留文科大学

始めの挨拶

本学情報センター教授 杉本光司

司会： おはようございます。みなさま、本日はようこそお出で頂き、ありがとうございます。

ただ今、ご紹介にありましたように、本学の地域交流研究センター長を、今年度、昨年4月からさせて頂いております杉本と申します。このセンター活動には非常に深く関わっておられ、本日もこの後、報告をして頂きます、前センター長の西本



先生から引き継ぎましたが、私自身は、情報センター所属の教員として情報教育を担当しております。このセンターとの関わりは、発達援助部門の一つであります、地域情報教育という分野で、地域の小中学校の情報教育を通して参加させて頂いております。今年度からは、新しい仕組みで、市内の小中学校のホームページの作成・運営作業に学生も参加するプログラムをスタートさせました。また、昨日ですが、附属小学校と大学をインターネットの回線を利用して結び、児童文化研究部の学生と一緒に影絵指導の遠隔授業を実施しました。また、ここから非常に近い十日市場で生まれ育ったという事もあり、地域のために働けということで引き受けさせて頂きました。

さて当センターの年間最大の行事として受け継がれております、この「地域交流フォーラム」も、本日、ここに第6回目として開催することができたと、正直ホッとしております。

ここに参加のみなさまは、既にご存じのことと思いますが、地域交流研究センターは、平成15年度に開設され、都留文科大学と地域をつなぐ拠点として機能するという目的で開設されました。そして7年という時間が経過いたしました。この間、センターの活動としては3つの部門、(フィールド・ミュージアム部門、発達援助部門、暮らしと仕事部門)をそれぞれ確立し、展開しております。

お手元のこの案内パンフレットの主催の項目にもありますように、このフォーラムは、当地域交流研究センターと一緒に「H19年度文科省現代GP」と記載されております。このGPというのは、Good Practiceということで、全国の大学から特色ある取組みを、厳しい審査を通して選定し、文部科学省がその活動を支援するプログラムです。そのGPの一つとして、本学は、これ以外にも、当センターの発達援助部門の取組みを同じ平成19年度に決定され、それぞれ、3年目の最終年度を迎えております。そんな関係から、このフォーラムも、フィールド・ミュージアム部門を基盤としたGPの総括報告の一環という位置づけと、第6回地域交流フォーラムとの共同主催という形を取らせて頂いております。

そして本日のフォーラムのプログラムですが、午前の部は引き続き、この会場「山・里・町をつなぐフィールド・ミュージアム」というテーマでの三つの分野での報告があります。また、昼休みの時間、12:30分から14:00までは大学生や地域の方々による展示・交流が隣の2102教室を中心に開かれます。スタッフなども待機しており

ますので、ぜひ声をかけて頂き、交流して頂ければありがたいです。

そして更に今年度は、このGPの取組みプログラムの一つであり、これまでは地域に出かけて交流を深めてきました「フィールド・ミュージアム・カフェ」を14:00から16:30まで開くことになり、パンフレットでも紹介されております、亀工房のコンサートから始まり、「顔の見える社会の再構築を ― 今日もカフェで大家族！」のテーマのもとにオープンする事になっております。

最後に、このフィールド・ミュージアムがこれまで積み重ねてきた成果の一つとして、もう3週間後に迫っておりますが、3月13日から6月13日までの3ヶ月間、東京上野の国立科学博物館で開催されます、「大哺乳類展 ―陸の仲間たち―」における展示協力をすることになりました。ここでは、全体の監修者として、本学の名誉教授であり、また、初代地域交流研究センター長であります、今泉吉晴先生が携わっております。このような関係から、都留文科大学が、この「大哺乳類展」の協賛団体として参加する事になりました。この期間の想定入場者数18万人が、本学のフィールド・ミュージアムに関する展示を目にするわけです。これについては、後ほど、坂田先生からも紹介があると思いますが、このGP最終年度にふさわしい報告を出来る事、これまで地道に成果を積み重ねてこられた関係者の方々のご努力、そして本日この会場にお出で頂きました皆様を始め、力強く支えて下さいました多くの方々に対して深く感謝する次第でございます。

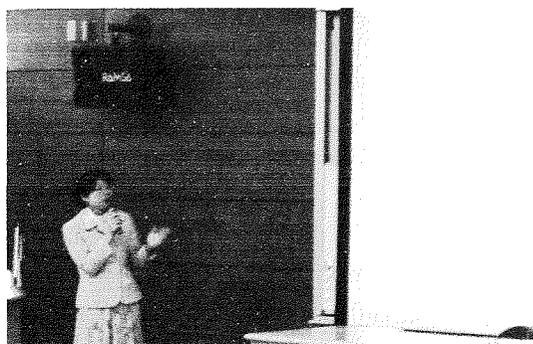
それでは、今日これから16時30分までの時間、まずは大いに楽しみ、大いに交流し、大いに声を発して頂き、そこから何か一つを感じていただければ幸いです。

それでは、第6回地域交流研究フォーラムの開催にあたっての始まりのご挨拶とさせていただきます。

I. 山で学ぶ：「ナデシコとカジカがいる川を子どもたちに残すために」

本学初等教育学科准教授 坂田 有紀子

司会： それでは、「山で学ぶ」、最初のご報告ですが、初等教育学科准教授の坂田さんから「ナデシコとカジカがいる川を子どもたちに残すために」をご報告いただきます。よろしくお願いいたします。



坂田： ちょっと補足説明をいいですか。

最初に、今は山で学ぶというテーマ

でやるのですけれども、3人、私、それからその後、泉さん、それから白戸さんの3人が続けて話させていただきます。その後、最後にまとめて意見交換、あるいは質問を受け付けたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

それでは、「カジカとカワラナデシコがいる川を子どもたちに残すために」という話です。皆さんの中でカワラナデシコとカジカがどんな生き物か知ってらっしゃる人……。もしや、ほとんど全員知ってらっしゃいますか。では、逆に知らない人がいたら手を挙げてください。……よかったです。では次のスライドが役に立ちます。

私も実は正直申しまして、3年ぐらい前まではカジカという魚がいるということを知りませんでした。ついでに申し上げますと、カジカガエルのことも知りませんでした。ところが、地域の方たちからお話を伺う中で、ああ、こういう生き物が地域にいて、だんだん少なくなってきたらということを知って、このままではいけないのではないかと思い、研究を始めるに至ったわけです。

まずカジカとカワラナデシコがどういう生き物か紹介させてください。カジカというのはこういうふう非常にかわいらしい、愛嬌のある顔をしている魚なんです、水のきれいな川の中流、あるいは上流域に棲む底生魚です。

一方、カワラナデシコは、これも同じように川原に特有の植物ですが、川原や日当たりのよい草地に生える多年生植物で、秋の七草として有名です。七種類、私は記憶力が悪いので、今あげることはできません。特徴としては大和撫子の語源になっている植物でもあり、昔から日本人には非常に親しまれてきて、いろいろな古典文学にも詠まれている植物であることは知っている方も多いと思います。

この二つの生き物は50年～30年ぐらい前、昔は都留にもたくさんいたそうです。ここにいらっしゃる理科の自然科学棟の事務の志村千代子さんから全部聞いた話ですけれども、あと地域の方たちからも同じような話をたくさん聞いたのですが、昔は川原がピンク色に染まるほどカワラナデシコがたくさん生えていて非常に美しい景色だったそうです。カジカもたくさんいて、子どもがモリで突いても簡単に取れるぐらいたくさんいて、バケツいっぱいって、ぜいたくなことにだし汁にして飲んだとか、唐揚げがとてもおいしいなどという話を聞きました。

ところが今は、私たちが唐揚げにしたいくても全然いなくて、そんなことをしたら世間様から怒られるというような状況で、本当に二つの生物が絶滅の危機にあるという状態

です。レッドデータブックという、どんな生き物がどれくらい危機的な状況なのかというのをリストアップした本があるんですが、そういう本では、カワラナデシコは日本全国5県で非常に危機的な状態であると言われてますし、カジカも予断を許さない要注目種というカテゴリーにリストアップされています。

こういう地域の生き物が危機的な状況にあるということを地域の方から聞いて、地域の公立大学として私たちができること、すべきことは何なんだろうと考えました。

それで、地域の生物層保全のための研究をやらないといけないだろう、それから保全のための基礎資料の整備も行わないといけない。それと、うちの大学は教員養成という特徴がありますので、学生さんたちが先生になったときに、生物の多様性の大切さとか、自然と人の関係について子どもたちと一緒に考えられるようになってほしいと思ひまして、2年ぐらい前から研究を始めています。

研究結果については、実際学生さんたちが外でデータをとってきて一生懸命、卒業研究としてやっていますので、学生たちの発表をぜひご覧いただければと思います。102教室の会場で12時半から2時まで学生がおりますので、ぜひ交流していただければと思います。

これは今年の学生たちです。私のほうも研究者の端くれですので、ちょっとだけイントロダクティブなところ、導入部分だけお話ししたいと思います。

こちらは、都留市を流れています、地域の方はご存じだと思いますが、菅野川とその支流の戸沢川と細野川の図です。1950年ぐらいまでは、ほぼ全域でカジカが見られたというお話を地域の方から伺いました。それをもとにこの地図を学生たちがつくっているわけです。

こちら、いまピンクで出たのが昨年度、学生たちがカジカの調査をしたものです。見つけたカジカが捕れた場所をプロットしてあります。これを見ていただくと、非常に生息域が限定されていることが分かります。近年カジカが少しずつ戻ってきているということはいろいろなところで言われていますが、でもきちっと調べてみると、やはり生息場所は限定されています。

昔はあの川全部にいたのに、どうして今は限られた場所にしかいないのか。それはなぜなのか。河川環境がどういうふうに変化したからなのか。どういう環境要因がきいているのかということをお学生たちが調べて、ポスターで発表していますので、ぜひご覧いただければと思います。

それからナデシコのほうも、昔は川原がピンク色になるほどいたのだけれど、いまは川原にはほとんどいません。それはなぜなのか。その原因はまだよく分かりません。こちらはカワラナデシコが本来生育するような石がたくさんある川原です。カワラナデシコは石がごろごろとした石川原にいるといわれています。川は洪水が起こったりしてかく乱があるわけですが、そういうかく乱頻度の低下によって、外来種が定着したり、ほかの競争的な雑草が定着して、植物群落が進んできた。そういうのを専門的には遷移というのですが、そういう群落が発達することによって、カワラナデシコが生えられなくなってきているということなのではないかと、いま考えています。

こちらが現在の川原の一般的な景色です。こういうふうには雑草が生い茂って、カワラナデシコが生育するのに必要な環境でなくなっているということが原因なのではないかと思ひます。

だんだん少なくなってきているのですが、都留市の中では、ここは川原の生育地としては非常に貴重で、大群落はたぶんここだけだと思います。鹿留川の自生地と今年度は学生たちがまずカワラナデシコの生き物としての特徴、生態を明らかにするということをお目的に、どれぐらいここにいるのか、ちゃんと生長とか種子生産ができているのか、

また生長とか種子生産に影響を与えるのはいったいどういう環境要因なのかということ調べています。この結果もポスターの発表がありますので、そちらをご覧ください。

また、この研究や教育活動は地域の方々と一緒にやっている側面があります。どういふことをこの2年間に行ってきたかをご報告したいと思います。

まず、2008年7月に都留市の広報にカワラナデシコの情報提供の呼びかけをしましたところ、地域の方から12件の情報をいただきました。その情報をもとにカワラナデシコの生息マップみたいなものを今後つくっていきたいと考えています。

また広報を見た市民の方が「鹿留川の川づくり検討会」という協議会で発言をしてくださって、その声を県の担当者の方が拾って私に連絡をくれて、鹿留川のナデシコの自生地の保全活動というものが本格的に動くようになりました。市民の方たちがそうやって声をあげてくれることで行政と大学が動き出すということが実際にこの活動でありました。

次、菅野川の三吉地域協働のまちづくり協議会主催の講演会にも呼んでいただきました。今日もそのときの委員長のゴトウさんがいらしてくださっていますけれども、学生たちがカジカとカワラナデシコの研究結果を発表することができました。そこでも非常に有意義な意見交換ができましたし、今でも三吉の地区のまちづくり協議会の方と連絡をしながら活動を続けていきたいと考えています。

鹿留川のほうで保全活動を行うようになったということですが、こちらの鹿留川の川づくり検討会にも参加させていただいて、カワラナデシコの保全のための河川管理手法や住民との協働のための方法や自然に親しむ川づくりのための具体案などを県の担当者の方と相談しながら、住民の人たちに提案をして進めていっている最中です。

この中で一つやりたいと考えているのは、地域の学校との協働事業です。学校の中でのカリキュラムに入れられるかどうか分かりませんが、例えばカワラナデシコの種子を私たちが提供して、学校の子どもたち、地域の子どもたちにカワラナデシコの里親になってもらって、大きくなったら、川原に移植するというものです。

移植をすることで、自分が育てたものなので愛着も湧きますし、自分が育てたものがどうなっているか川に見に行こうと思うかも知れません。それだけではなくて、川に行くことで、いろいろな川の環境に目がいったりするかもしれません。そういうことを通して次の世代の子どもたちに川の生態系や生物の多様性について学んでもらえるのではないかと考えています。

最後に、学生たちがこの研究を通してどういうふうに変化したか、お話ししたいと思います。見てみると、学生たちは2年間の間にすごく大きく変化しています。

最初はあまり興味がないのですが、毎回川に行ったりしている中で、地域の自然や生き物に気づく、知るということが最初のステップです。そういうことを繰り返すと、地域の自然に親しみと愛着が湧いてきて、生き物が好きになります。

そうすると、守りたいと思うようになるようです。詳しいことは要旨集に書いてあるので、そちらをあとで読んでいただければ、より実感できるかと思います。

こうして生き物が好きになると、その生き物の周りの環境やほかの生き物との関係が気になり、だんだん学生たちの視点とか興味が広がっていくということがあります。

そうすると、知識だけではなくて、視点とか視野の広がりというものがあります。最初はカジカとナデシコだけを見ていたんですが、だんだん興味や関心が広がっていつて、保全をすることの意味は何なのだろうと考えるようになるようです。

最終的には、生き物を保全するためには、対象の生き物を守るだけではなくて、その生き物の周りの環境、それからその環境を取り巻く環境全体を適切な状態に残さないといけないのだと気が付くようになります。

そういったことは私たちの世代だけではなくて、将来世代、将来にまで多様な自然と

資源の利用可能性を残すということにつながるということです。それに気づいている学生の感性というのはすごいな、と思いました。

先ほど言ったことをまとめますと、カジカとカワラナデシコがいる川を子どもたちに残すということは、何もこの生き物を守るだけにとどまらず、将来世代にまで多様な自然と資源を残すことです。そのために何をすべきかということですが、二つあげてみました。

もちろん生き物を守るには専門的な知識や技術が必要ですが、私たち市民が最初に考えないといけないのはこの二つかと思います。昔の知恵・技、自然と共存していた昔の知恵と技をもう一回再評価して、そういうものを現代的に受け継ぎながら、新しい自然と共生した文化をつくっていく。これが私たち市民がやるべきことなのではないかこの研究をとおして考えた次第です。以上です。ありがとうございました。(拍手)

司 会： ありがとうございました。とても力が入った報告でした。それでは次に、社会学科講師の泉さんから「荒廃したアカマツ林はよみがえるのか」というテーマで報告をしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

I. 山で学ぶ：「荒廃したアカマツ林はよみがえるのか？」

本学社会科学科講師 泉 桂子

泉：皆さん、こんにちは。社会科学科環境コミュニティ創造専攻の泉と申します。よろしく申し上げます。今日はこの題名で、大学のすぐ近くの山で私どもが取り組んでおります森の調査とその再生に向けたささやかな取り組みをご紹介します。

都留文科大学は皆さんご存じのとおり文科系の単科大学で、そういうところで私のような者が職をいただいて森林とか林業というのを教えるのはどういうことなのかということ、このごろ考えるようになりました。

環境コミュニティ創造専攻という新しいコースができたのは2007年からですけれども、こういった動きは全国的に見られまして、文科系でも環境という名前がついたコースは数多く見られます。ひるがえって、では自分が今まで受けてきた教育は何だったのかということを見ると、農学部の林学というところは要するに国有林管理の技術者を配置するというのが最初の目的でした。いま100年ぐらいたって何が起きているかというと、林業が産業として成り立たない、では大学で学んでどうするのかという学びの空洞化がこの農学部でも指摘されるようになってきております。

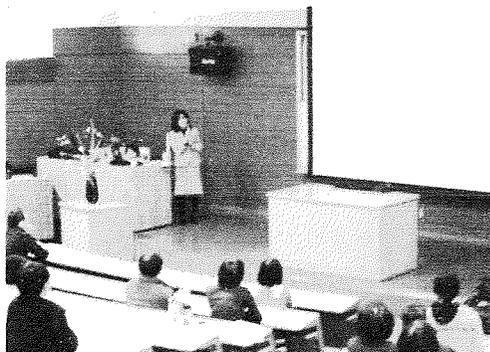
では、文科系で環境、林業とは何なのかということをも今日的に考えてみると、費用負担とその裏表として、市民参加ということが2000年代に盛んに言われるようになってきています。皆さんのお財布から森づくり県民税とか森林環境税というのが取られているということはご存じでしょうか。

山梨県でもいま議論が始まっておりますけれども、税金として森林専門に使う目的税を近々取られるようになるし、すでに日本の20ぐらいの府県でそういった試みが始まっております。だれもみんな森林に無関係とはいえないという段階に入りつつあるわけです。

私が現場で学生さんと接してみると、やはり自然科学的な知識は坂田先生のところの学生さんに比べれば非常に手薄だし、農学部林学科というところは必ず演習林を設けなければならないという規定がございます。そういうところで私は教育を受けてきたんですけども、学生一人当たり約1000万円の費用がかかっているとされておりまして。費用も人材もないなかで、どうやって森に触れ合う機会を確保するかということを感じております。

私どもが都留市さんからお借りしている道路(どうじ)の森ですけれども、このように森林所有者は都留市、間に山梨県の方に入っていていただいて、私どもが実習させてもらっています。私たちはフィールドを借りたい。山梨県というのは非常に恵まれておりまして、農学部がある大学はないんですけども——近々できるという噂がありますけれども——県庁の職員さんで林業職の人が非常に多い。全国的にみても非常に手厚いんです。

県有林専門の業者さんもうらっしゃるわけですが、非常に多忙で、携帯電話はつながらないし、仕事をお願いしようとしても、この3月と4月しかお願いできないわけですね。そういったことで、予算が使えないという制約もございます。



いまの林層はこんな感じで、放置されたアカマツ林です。1 haぐらいで大学の近くの山ですが、良く言うと今はやりの針広混交林という自然がいっぱい山、悪く言うと、ほったらかしでどうしようもない穀潰しの山ということになります。

授業での活用状況ですけれども、いま1年生の必修授業と3年生のゼミの授業で活用しております。1年生の授業では、私どもの環コミの1年生というのは毎年60人ぐらい入ってくるんですけれども、入りたての春の時期にバスに乗せて都留の町じゅうを歩くということを目玉にしております。20人ぐらいのグループに分けていろいろなところを歩きますけれども、森にも来ていただこうということで、森でも3回活動を行っております。

先ほど申し上げたように、演習林というものではありませんから、非常に課題も多いです。まず20人いても、20人全部をくまなく目が届くわけではありませんから、必ず遊んでいる人がいるわけですね。座りこんで私語をしている人が必ずいる。往々にして女子のことが多いんですけど、そういった課題もあります。

あとケガです。今の学生さんはほとんどカマやナタなどを手にしたことはありませんから、どうしても、一人で指導しているとケガをする人が出たりして、大変です。

これが実習の様子ですが、作業をしていないで話を聞いているところです。森林の中は非常に気持ちが良い。奥のほうにお年を召した方がいらっしゃいますが、この方はほとんどボランティアで月に一回この森へ来てくださってお話をしてくださる道志村の元教育長さんです。教育長さんをなさる前は、自分の人生をほとんど山に捧げた。いわゆる木を切る山ではなくて、水を生み出す水源林というのを長年管理して来られた方で、そういった方がほとんどボランティアで協力してくださっております。

いまゼミには12人ぐらいの学生さんがいます。どんな木が生えているのか、どんな山なのか、ちゃんと記録して調べてみようということをやっています。非常に手間はかかるのですが、得るところが少ないというか、なかなかデータが取れず四苦八苦しております。

夏休みが一番暑い時期に4日間連続で朝の9時から夕方暗くなる6時ぐらいまでやるんですけれども、ほったらかしの山ですので、まず山に入るまでに1日ぐらいかかってしまうわけです。カマとナタを持って自分たちが入る道をつくるというところで1日ぐらい終わります。コンパスとか木を測る道具を担いでいって測るのですが、3年生の皆さんは非常に優秀で、10分教えると何でもすぐやっけてしまいます。若いというのはいいことだなと本当に思います。すぐできるように、2年生の後期ぐらいから林学の実習に相当するようなことを練習していきました。

これは林内の様子ですけれど、夏になると本当に歩けないですね。人間が手入れを放棄した山というのはこんなにひどくなってしまうのかということをもっと体感するわけです。

まとめです。いま林学の学びの空洞化が起こっているということを申し上げましたけれど、林業などは産業として成り立たないから食っていけないわけですね。そういう中で、私どもの分野の大御所のコノヒラという先生は、「自然を愛して豊かな人間性を持つ人材を育てよ」とおっしゃいました。その一つの答えが環コミにあるのではないかと考えます。これから高田先生や関係の学生さんの話もありますので、聞いていただければと思います。

いま自分が感じているのは、図書館の裏のネタイリ山というところですが、まだ天然林か人工林かも分からないですし、山の管理に今非常に困っております。何かお知恵やあるいはそのネタイリ山の利用のことで何かお話をしてくださる方がいらっしゃいましたら、ぜひ助けていただきたいということです。よろしく願いいたします。以上で発

表を終わります。

司 会： ありがとうございました。それでは引き続き、本学地域社会研究専攻の大学院1年の白戸さんから「ベネッセと考えた森と子どもたちの正しい関係」という題でご報告いただきます。よろしくお願ひします。

I. 山で学ぶ：「ベネッセと考えた森と子どもたちの正しい関係」

本学大学院1年生 白戸 溪子

白戸： こんにちは。はじめまして。いま社会学科の地域社会研究専攻で大学院1年の白戸溪子といます。今年の4月で都留に住んで丸々5年たちます。私は大学は比較文化学科を卒業したんですけど、なぜ比較文化学科から社会学科に移って、都留でまだ勉強したいと思ったのか。ベネッセさんとこの大学で一緒に行ったこのキャンプが大きなきっかけとなりました。これが一番の理由なので、そこで何が起きたかということ、今回お話しさせていただきたいと思います。



Grow Wild Campというテーマで2年間活動が行われました。この要旨にも書いてあるのですが、このGrow Wildという言葉コンセプトにして2年間、指導者の方に指導していただきながら、学生がキャンプを企画して運営するというすべての流れに関わらせていただくという貴重な体験をしました。このGrow Wildというコンセプトについては12ページに書いてあります。今泉先生が訳されたヘンリー・デイビッド・ソローという方の『ウォールデン・森の生活』という本の、彼の生活の中からでてきたGrow Wildというコンセプトを基に企画が進みました。

まず、このキャンプがどういうふうに進んでいったかということからお話ししていきたいと思います。

まず最初は、スタッフの募集が大学に掲示されたんですけど、学生は最初、子どもとかかわりたい、子どもと野外で活動したいという思いを持って、学科も学年もバラバラのメンバーで、こういうふうな説明会があって、集合しました。

その中ではお互い全く知らない人同士。交流も進むのですが、これは今年の説明会なので、1年目が終わって2年目がスタートするときなので、1年かかわった学生が新しいメンバーを勧誘しているところです。「キャンプってどんなだったのか」という話もちろんするのですが、「なんであなたはこのキャンプに来たのか」と質問攻めにした。逆に、初めて来た学生は「いったいGrow Wild Campって何をやってるんですか。Wildって言うと、毛むくじゃらの男の人が森で魚をつついて食べているようなイメージしかないのだけれど、そんなので一年間何してきたの」という話だったり、「一番楽しかったことは何だったの」という、「とにかくGrow Wild Campは楽しいから来て、来て」と勧誘しているときの写真です。この説明会からスタートしていきます。

これは私たち学生のスタッフの研究の場面です。子どもとどうやってかわろうかということ、常に考えながら研修は進みました。研修といっても、さっきのようにテーブルと椅子と紙とペンでという研修も行われるんですけど、このときはムササビの観察会をしながらでした。みんな上を見上げているのはムササビがちょうど上を通っていて、このときはムササビが木に捕まるのを失敗したのか、ポタッとムササビが落ちた瞬間、「あれ、いまムササビが落ちた、あれ、いなくなったぞ」というときの写真です。

もう一枚は、手を出している男の子がいるのですが、これはムササビのうんちを拾っ

て、どんな匂いがするか、いつごろしたのか、どこでしているのか、何を食べているのだろうという話をしているところです。実際に子どもとかかわるときのこと、参加者側の立場、そして大人としてかかわる場合の立場の、両方の立場のことを考え、繰り返しながら、研修が進みました。

これは季節が変わって、秋から冬にかけての森です。森がどんな秋と冬を迎えているのかを実際に見に行きます。

こちら側の寝袋で寝ている写真は、子どもと野外で一泊、寝袋だけで泊まるという体験をするので、それに向けて学生も自分たちで何回も何回も森に行つて、実際にこういうことを繰り返していました。

これもそうです。子どもと泥田んぼに入るときのために、思い切り大学生も泥田んぼでバレーボールをしたんです。

下はほうとう作りです。保育園の子どもたちに来てもらったときに、保育園の子とほうとうをつくるというプログラムを組みました。保育園の子だったら、どんなほうとうをつくるんだろうということを考えながら、子ども役と大人役でここでも研修をしました。

これは二泊三日のプログラムを組みます。実際当日は二泊三日だけですけども、みんなでわいわいご飯をつくって食べたり、そのあとおしゃべりをしてお茶を飲んだりということ、生活の流れの中でお互いのスタッフ同士の交流も進んで、この人はこういう思いを持っているのだとか、ちょっと苦手なことにトライしようとしているのかな、とかいろいろなことを、この生活を通して学生同士の研修が進みました。

これは重要な場面で、実際にベネッセ・コーポレーションの会社に行ったときのものです。実際に参加されるお子さんと、そのご両親とが参加して行われる事前の親子学習会という場所に私たち学生も連れて行っていただいで、こういうふう準備を進めていきました。

そして当日に入ります。当日はどんなふうに行われていたのかと言うと、これは2年分なので、いろんな場面が出てきます。ここの詳しい内容は報告書があるので、興味がある方はぜひご覧ください。

こうして子どもと一緒に思い切り遊びます。

これは冬のキャンプだったのですが、地元の宝の方に先生をお願いして、お正月準備のキャンプをしたときの写真です。

これは当日ですが、何をやっているのかよく分からない写真だと思えます。穴を見つけました。これは動物の足跡。ここに本当に動物がいるのか。テンがいるのかというのを調査しています。

これは、みんなで藪の中を思い切り歩いて歩いて、という時間を過ごしたときの写真です。

これはよく見ると分かるのですが、雨がザーザー降っている中、森を歩いています。雨が降ったら普通は中で何か絵を描いたり、ゲームしたりするのですが、雨の中でもこうやってカッパを来て、雨の中の森を探検していくというプログラムをずっと行っていました。

これは冬です。落ち葉が落ちているなかで、冬、どんなふう森が春を待っているのか、動物がどんなふう春を待っているのかというのを行ったときの写真です。

このときも中と外の両方で活動しました。これは何か見つけてきたものを中で観察して触ったり壊してみたり、本を持ってきて比べてみたりという作業を中で行つて、発見があったので外に出て、というのを毎日毎日繰り返していました。

これは葉っぱに入って、葉っぱの中は本当に温かいのか、動物ってこうやって寝てるんじゃないの、というのを実際に子どもも私たちも一緒に思い切り体験しているところ

です。

これがキャンプの最後の大きな場面です。「ムリネモサミット」ということで、キャンプで二泊三日過ごした中で、どんな発見があったのか、冬の森はどんな森だったのか、夏の森はどんな森だったのかというのを、各班で発表しているんですけど、日記を読むような発表ではなく、「すごい匂いがしたんです」とか、「どうしてこの匂いがしていたかと言うと、今朝していたうんちだからです」というように、学校でする発表とはまったく違う発表を子どもたちは二泊三日で感じてきたことを教えてくれました。

このようにして研修があつて、親子学習会があつて、当日、本当に子どもが来て、さらにフィールドに入って二泊三日を過ごして、最後はこういうふうに表示して終わるといふごく長い流れの中に、何層にも何層にも重なった学びがありました。

どんなことかと言うと、これは私の言葉で言うので、たぶん大学生、一人ひとり参加者によって言葉は違うと思います。私の言葉で言わせてもらおうと、ここにも少し書いてありますが、毎日毎日森に入っていたり、学生同士でどうやって子どもとかかわろうかという話をしたり、本当に森の中で落ちていた葉っぱを眺めたり、何かクルミの食べた跡を見て、子どもたちとの会話を通して、Grow Wildという言葉が、体の感覚として自分のものになっていくということでした。

そういう学びがどんどん広がって行って、その広がり方はノートを蓄積していくというのとはまったく違う広がり方です。何て言えばいいかずっと考えていたんですが、パウムクーヘンをつくるときって、どんどん生地を重ねてぐるぐるつながって焼いて広がっていきじゃないですか。あれがどんどんひろがっていく感じです。

ぶつぶつ切れている学びではなくて、すべてが森の中でもつながっているし、自分の中でもつながっている。そういうふうに関係して自分は地球の上に立って生きているんだなというのを感じることができました。そういうことはこのキャンプをするまでは何となく外の話で、地球温暖化と言われても、何ができるかな、ぐらいだったんですけども、このGrow Wildという言葉が自分の体の中に入っていきということを通して、自分は地球に立っているんだなということ、みんなそれぞれがそれぞれの感覚でゲットした2年間だったのかなあとと思います。

その私たちとかかわった子どもも、森に入ると、教える・教えられるという大人と子どもの関係ではなくて、いっしょに拾ったものを触ってみたり、匂いを嗅いでみたりということをしました。一緒に学ぶという関係から、Grow Wildということは、子どもたちにも伝えられたのかと思います。

私たちの活動が進んでいく中で、うちの大学のキャンプ長である高田研先生と、今日来ていらっしゃるんですが、加藤大吾さんという方で環境教育の仕事バリバリされている方、あとは都留市の市役所の佐藤洋さんという、皆さん「番長」と言えばご存じかもしれないのですが、この3人の方に実際指導していただいて、準備と当日までお世話になりました。

この3人を指導者として3人を集結させた私たちの指導の体制をつくってくださった方がベネッセのムラヤマヒデユキさんという方で、私たちのキャンプを2年間ずっと支えてくださっている方です。この方がいたからこそ、Grow Wildというキャンプができたと思います。もし私たち学生だけでキャンプをやりたい、となったら、まずお金もないし、私たちがやりたいといつても、お子さんを二泊三日も森の中で預けるといったときに全然信頼感もないという中で、私たちだけだと、たくさんたくさんやらなければいけないことがあって、Grow Wildという伝えたいコンセプトがあつても、なかなか実行に移せなかったと思うんです。そこの面をすべてムラヤマさんというベネッセの方がいたことで、この学びの場をすべて私たちがGrow Wildというコンセプトを子ど

もに伝えることに集中できました。その環境を整えてくださったのが、このベネッセのムラヤマさんと指導者の高田先生と、加藤さん、佐藤さんという方、この4人の方に支えられて、この2年間がありました。

このベネッセさんと協同事業だったということで、実は去年東京で開かれたエコプロダクツというイベントがあるんですけど、そこにも出展するという貴重な体験をさせていただきました。

やはりこのエコプロダクツでも、大学生がやりたいといっても、とてもお金がかかるし、できたとしても、こんな1畳、2畳のスペースがあるかないかというところですよ。一生懸命活動するんですけど、ベネッセさんがブースを私たちに提供してくださいました。ここでは、展示と、佐藤さん(番長)が「森の事件簿」というプログラムを私たちと一緒にやってくださいました。これは都留から持っていった落ち葉が東京で舞い上がっているところですね。

この段ボールに落ち葉がたくさんつまっていて、骨が出てきたり、うんちが出てきたりという中で、子どもと、「これはどうして骨になってしまったのか」と、すごくきれいなブースで落ち葉を引っかき回しながらやりました。

最後に、私のことを話したいんです。第1回目のGrow Wild Campのときに、保育園の年長さんのお泊まり保育を私たち学生が受け入れるということをする機会がありました。この写真は女の子が左にカップを持っています。この日は朝はザーザー降りの雨で、雨の中、二人でカップを着て外に出ていったんですけど、このようにお昼に戻ろうとしたら天気がよくなってきて、暑くなってカップを脱いだんです。

そうしたら、この子はポイとカップを捨ててしまって、私に「持って」と言うんです。私は自分で脱いだものは自分で持ってほしいなと思う。でもなかなか持ってくれない。私は大学生で保育士でもなんでもないし、ただの大学4年生だし、子どもとそんなにかかわったこともないのに、この子に伝えてもいいのかすごく悩んだんですけど、この子との関係のことを考えて、やっぱりここでは言おう、という決意をして、言いました。そうしたらけんかになってしまいました。そして別れてしまったんですよ。それで見えないところで待っていたら、女の子がカップを拾って、戻ってきて、仲直りしているところの写真です。このときに、私は「少し言い過ぎた。ごめんね」というところで、女の子が「うん、いいよ」と言って、仲直りしてくれたときの写真です。

この子と過ごした一泊二日の二日間の時間は、私はこれを毎日して過ごしたい、と思うぐらい幸せな時間で、これを仕事にしたいな、と思った瞬間がこの時です。

これがきっかけとなって、社会学科に行って環境教育を勉強しようと思って、いま森の幼稚園ということを研究しているんです。森で毎日保育活動をする、簡単に言うとそうなんですけど、毎日毎日登園して、外で過ごして帰る。雨が降っても外で遊んで帰るというのを毎日毎日する、野外で保育をするというような幼稚園を自分で実践したいなと思っていま研究しています。

私は、勉強はきらいなのですが、それでもやりたい！ と思ったのがこのGrow WildのCampでした。

最後に、これは今回の冬の最後の写真です。いまの学生スタッフがたくさん写っています。春からはGrow Wild Campという名前から、Grow Wild Lifeというふうになり、ちょっと最後が変わったんですけど、このGrow Wildというコンセプトをもとに、都留市内でまだ活動を続けていきます。今回スライドでお見せしたキャンプであったり、そのほかにも、日帰りの体験活動であったり、宝村のネイチャーセンターの博物館業務であったり、たくさんキャンプだけではない活動を、このコンセプトをもとにどんどん広げていきたいということで、このGrow Wild Lifeという活動がまた春から始まります

ので、皆さんどうぞよろしくお願ひします。以上です。ありがとうございます。(拍手)

司 会： どうもありがとうございました。さすが大学院生のプレゼンテーションという感じで、バウムクーヘンの話なども感心しましたが、プレゼンテーションというよりコンテンツ、中身がきつといいんでしょうね、という感想を持ちました。

さて、すでに11時を回っておりまして、第一セッションの質問時間がすでに過ぎております。あとで質問を取りますので、ここでは、お一人だけ、ぜひ聞きたいという方があれば、お一人様受けたいと思いますがいかがですか。なかなか最初は出にくいですね。それでは、最後のセッションに回すということで、第二セッションに入りたいと思います。

二つ目は、里・町で学ぶということで最初、初等教育学科の西本さんに「農の原体験を求めて——大学農園整備事業——」ということで、よろしくお願ひします。

Ⅱ. 里・町で学ぶ：「農の原体験を求めて ー大学農園整備事業ー」

本学初等教育学科教授 西本勝美

西本： 初等教育学科の西本です。私は画面の資料を用意しておりませんので、冊子のほうを見てください。14ページから16ページにかけてのところです。

最初に坂田さんから説明がありましたように、環境教育GPの三つの柱のうちの「農に学ぶ」というところで、「大学農園整備事業」というのをつくって担当していました。その成果報告という趣旨です。実は大学農園整備事業は三つ活



動をやっています、今からご紹介するたんぼクラブというのと、それとは別に上戸沢の農園と、文大前の駅の近くにある田原農園と名付けている取り組みがあるのですが、それらについては今年のこのフォーラムでも少し紹介しましたので省略させていただいて、中心的な事業であったたんぼクラブについてお話しします。

たんぼクラブというのは、もともとは都留市職員の紹介、勧誘から始まって、去年が4年目、今年度2009年度が5年目になるという取り組みです。昨年度の4年目と今年度の2年間、2008年度と2009年度を環境教育GPの活動の一環に位置づけていただいて、予算もつけていただいて、これまでの取り組みをさらに発展させるということでやってきました。

田んぼはウエルシアという最近できたドラッグストアのちょうど真向かいにありまして、大学からすぐのところ。広さは約6畝です。基本的にはできる限りの手作業で、すべての作業を学生メンバーと教員有志の数名のメンバーとでやっていくというかたちです。町中のすぐ近くにも別の田んぼがあります。それから育苗については大原の育苗センターでお願いしています。そういう関係上、まったくの無農薬というわけにはいなくて、種籾の消毒だけはやっています。田んぼに植えてからは、まったく農薬は使っていません。栽培中無農薬ということですね。肥料のほうも、米太郎という有機質肥料の有名なものを使っていて、ぎりぎりの低農薬米ということになるかと思います。

最初は、都留市の農業委員会さんに全面的に依存するかたちでやっていたんですけども、環境教育GPに位置づけられた2008年度から自立して、技術指導というかたちで時折、都留市の農業リーダーや富士・東部農務事務所の方にご指導いただくというかたちでやっています。

今日の報告では、関わった学生が何を得たのかということについて、少し突っ込んで考えてみたいということで、活動そのものについては紹介を終わります。

14ページの下の方から、学生たちの感想からという項目があります。そこをご覧ください。三つほどのポイントを考えました。

最初のポイントが(1)というところで「初体験と全過程への関わり」というタイトルをつけましたが、学生の感想は太字になったところ。す

「私にとって初めての米作りでした。一人暮らしを始め、自分で米をといて炊くようになったことで、米に対する関心が高まっていたのと、一部分の工程を抜粋して行うの

ではなく、最初から最後まで自分達の手で行うという点もやりがいがありそうだなと思い、参加しました」というふうに書いています。

それから②では、「小学生の頃、一度田植えをしたことはあったけど、草取りや、水見は、全部農家の方にまかせっきりでした。今回、たんぼクラブで活動したことは楽しかった、の一言では片づけられないし、本当に貴重な経験だと思っています。どんな作業も慣れるまで時間がかかったし、慣れてくると、その作業の辛さにお手上げ状態でした」という感想があります。

というわけで、学生はこの2年間、それぞれ20名程度ずつ関わっているんですけども、ほとんどの学生が米作りをするということは初体験だということだということからのスタートです。そしてやったとしても、よく小学校などでやられているように、田植えと稲刈りだけというようなイベント的な関わり方があると思うんですね。

田植えに行くと、すでにどういうわけか苗がいっぱい出来上がっていて、それを植える。そしてそのあとずっと行かないで、秋に行くと、見事に実っていて、それを刈り取ってお手伝いをするというのはあると思うんです。

そうではなくて、それだと小学生のそういう体験と変わりませんので、教員メンバーのほうで、15ページのほうへ移っていただいて、最初からできるだけ全過程にたずさわるということをやってもらおうと考えていました。それは、農業という営みをそれなりのリアリティーにおいて認識して疑似体験するためには欠かせない観点だと考えていたからです。その内実についてはあとでも触れます。

ただそういう教員側の意図を、あらかじめそれだからやりたいというふう考えていた学生もいるということが分かりました。

次の(2)「農業という労働の本質に触れる」という大上段なことを書いていますが、ここを少し詳しく説明したいと思うんです。まず学生の感想を見ますと、③の学生、「私は今までやったことがなかったので、たんぼクラブで米作りをしたことはとても貴重な体験になりました。実際に体験してみると、種を播く作業、苗を植える作業、草取りをする作業、水量の調節などやらなければならない作業が多くあることを学びました。中でも一番大切だと思ったのは日々の水管理です。」

それから④「米を通して学んだことがたくさんあった。種籾を播くことから始まり、田植え、稲刈り、脱穀と過程を進めてきて、どの行程も大きな労力を必要とし、大変だった。水見も体験して、苦労を知るとともに、その重要性がわかった。」

⑤「一日でもほうっておくと、土が乾いて地割れを起こしたり、かといって水を入れっぱなしにすると、水温が下がって藻がたくさん生えてしまいます。米を作るということは、ほぼ毎日稲と付き合っていかなければならない、とても手がかかることなのだと感じました。」

⑥「今回たんぼクラブの活動に参加し、改めて農業の大変さや収穫までにかかる時間の長さを実感しました。」

このように、学生に感想を書いていただきますと、米作りということに関わる行程の多さやそれぞれの行程の重要性や、それぞれの行程が非常に労苦をとともうものであるという、それからタイムスパンですね。最初から最後までタイムスパンの長さ、そういうことに気づいたということに集中しています。

とりわけ水見を学生にしっかりやってもらったということがやはり学生にとっては強い印象があったようです。夏休み中に週一回、曜日で当番を決めて、朝と夕方、朝入れて、一定の所までになると止める。そして夕方もう一回、減った分を入れて止めるというのをやってもらったわけですね。もちろん時期によって、この時期はどれぐらい入れるのだということは伝えていたわけですが。そういうかたちで夏休み中もほぼやってもら

ったということで、一人ひとりに課せられた責任の重さということが当然あります。その作業がなかなか難しいし、時間がかかりますし、その間どこかへ出かけていってしまうということもできないわけですね。そういう作業を、学生たちはおそらくは最初想像していなかった負担だと感じたと思うんです。

その負担の中から学生の感想にあったように、ほぼ毎日稲と付き合っていかなければならない、そういう農業という労働が自分の生活を大きく制約してくるということ。言い換えれば、逆に言うと、農業にかかわっていることが生活をかたちつくるものなのだというところへの気づきを促したと思われまます。

週一回でも責任をもって続ければ、それを長期にわたって毎日続けることの労働としての本質は想像の及ぶところとなるだろうと思うんですね。

こここのところに関わって、少し。ここに書いていないことですが、今日は紹介しませんが、上戸沢農園というもう一つ別の事業のほうでは、徹底した有機農業を過去6年ぐらいやってきています。しかも有機でやるというだけではなくて、例えば、上戸沢農園のほうでは小麦を少し植えているんですけども、その小麦の脱穀は足踏み式脱穀機というのでやって、それから蕎麦もやっています。蕎麦とか小麦の最終的な精製には唐箕を使っています。昔ながらの唐箕ですね。

そういう手仕事、人力にすごくこだわってやっているんですね。このたんぼクラブも、田植えも稲刈りも全量を手植え、手刈りでやっています。そういう人力にこだわっているということがどういう意味をもっているのかということを考えます。というのは、おそらく子どもたちや大学生に農業体験をやらせたいと考える人たちというのは、できれば無農薬で、できれば手仕事を多くして、人力でというふうに考えると思うんです。

直感的にはそのほうがいいに決まっているという気はするんですけど、なぜなのかというふうに問いつめられると、なかなか答えるのが難しいことだと思うんですね。

そのことについて僕もずっと学生とこういう農業をやってきて考えていたんですけども、少し見えてきたことがあります。それはどういうことかと言うと、私は農業に関心をもち始めてから、日本各地の棚田というものに非常に惹かれまして、いくつかに見に行ったりもするわけですね。

棚田というのは、いま見直されていて、棚田百選とか、そういうのが全国で選ばれたりしています。まず写真とか映像で見ると非常に美しいということが言えますけれども、そばへ寄って実際に上まで登ってみると、全然違いますよね。まず美しく見えるのはちゃんと手入れして稲が植わっていて、雑草もきれいに刈ってあるから美しいわけですね。

しかもそこをずっと登っていくと、よくぞこんなところにたんぼを作ったなど。一枚の面積も極めて小さいものもあるわけですね。本当に50〜60本しか稲が植わらないような、そんな小さい棚田がずうっと山の上まで積み上げられている。

そういうのを見ていて私が率直に感じるのは「執念」という言葉でした。というのは、何代にもわたって先人たちが何とかして生活を成り立たせようとしてきた。まさにそういう執念を感じるわけです。それで、結局、そういうものを見て感じるものというのは、簡単な言葉で言ったら、人間のすばらしさということになるんですけども、何か人間の労働というもの元々持っていた本質みたいなものをまざまざと感じさせてくれる。ここまですて生活を成り立たせようとしてきたのかという。そのことの感動と、人間というもの、自分もとてもすぐにはできないけれども、こういうことを自分もすることが不可能ではないのだな、ということへの気づきといいますかね。こういうことが今言われている生きる力を育むということを考えると、どうしても必要なことなのではないかと感じます。

やはりこれは手でやってみないとわからないわけですし、機械でザーッと要領よくや

るということを経験させてもらっても、その先にかつてのそういう生活をどうにかして成り立たせようとしてきた人間の執念みたいなものは想像することができないと思うんですね。

それはやはり手で、少しでも、ほんの100分の1でも1000分の1でもやってみると、その延長上にあれがあるということは想像の及ぶ範囲にあるんじゃないかというふうに思うわけですね。子どもたちが農業体験をやるときに全過程に関わる、あるいはできるだけ人力でやる、ということは、そういう人間の営みというものを実感していく。そしてそういう事が自分にも不可能ではないのだということに気づいていく。ここのところにこそ一番大きな意味があるのではないかと最近感じています。

司 会： ありがとうございます。西本さんは演説がうまくて、棚田の話などつい聞き惚れてしまいました。

それでは次に、地域交流センターの北垣講師から「私たちの小さな博物館—ほんものと出会う旅のはじまり—」ということでご報告いただきます。よろしくお願いします。

Ⅱ. 里・町で学ぶ：「私たちの小さな博物館 —ほんものとお出会う旅のはじまり—」

本学地域交流研究センター非常勤講師 北 垣 憲 仁

北 垣： 皆さん、こんにちは。地域交流センターのフィールド・ミュージアム部門で非常勤として働いております北垣と申します。今日は環境教育GP、その中の一環として位置づけられた富士急沿線のフィールド・ミュージアムの取り組みについて皆さんにご報告したいと思います。私の体験も含めてご報告したいと思っております。



これが富士急行線の新しくできました都留文科大前駅です。実は富士急行線を生きた博物館にしようという構想は2003年に都留文科大に地域交流センターというものができまして、そこにフィールド・ミュージアム部門というものが位置づけられる以前から、実は構想されていました。

富士急行線は皆さんご存じだと思いますが、都留、西桂、そして富士吉田、谷間を縫って26キロの区間を18駅が結ぶという非常にコンパクトなローカル線です。駅の間を歩いても行けますし、また谷間を縫っていますので、人の暮らしにも近い。また森にも近いという特徴を持っています。そういった特徴を生かして、どうにか人々が、あるいは私たちが地域を見直すきっかけになればいいのではないかという夢のような構想を抱いてきました。しかし、非常に歩みはゆっくりとしていまして、企業との連携というのは、私たちは慣れていませんし、どのようなきっかけでいったい事を進めていいのかということもまったく分からずにいました。

経緯ですが、簡単にご説明すると、2004年に駅ができました。その際に、その駅舎の中の一部、ほんの一部を展示スペースとしてお借りできないかということをお話ししまして、そのスペースを使わせていただくことになりました。そこで、学生たちと地域の自然やあるいは文化といったものを手作りの展示で、毎月一回ごと、展示替えをするというようなちょっと歩みのゆっくりしたささやかな試みを続けてきました。

2006年に富士急行さんが電車祭りというのを河口湖駅でやりました。その際に、担当の方から、都留文科大前駅でずっと展示してきたパネルをぜひ貸してほしいと言われてまして、そこで出展することになりました。富士急行さんとの出会い、交流の一步が始まったのがここだったように思います。

それから、あとで学生が説明すると思いますが、交流センターのフィールド・ミュージアム部門の機関誌であります『フィールド・ノート』というのがあります。今日皆さんのお手元にも一冊入っていると思いますが、その『フィールド・ノート』の記事に私たちがぜひ富士急の特集をしようということで、学生と一緒に富士急沿線の特集を組みました。このときには、富士急の方々から10名ほどいらっしゃいまして、学生といっしょに交流もしました。そしていろんな情報も教えていただきました。本格的な交流が始まったのがこのときだったように思います。

そして2008年に推進協議会というものを開催しまして、駅舎をまずは改装しよう。フィールド・ミュージアムの情報発信の基地にしようということが一つ。それから駅を起点とした観察会をぜひ開きましようということを決めました。

待合室の展示活動ですが、待合室はこうになりました。以前はちょっと無機質だったのですが、全面木製にして改装していただきました。そしてそこに今度は全面フィールド・ミュージアムのいろいろな情報、あるいは身近な自然や文化といったものを手作りの展示で皆さんにお伝えするということを始めました。

実はこの駅舎はまだきれいに保たれていますが、ここには奈良さんという女性の方が改札にいらっしやいまして、実に丁寧の対応してくださっています。また愛着をもってくださって、いろいろなことを私たちにアドバイスしていただけます。駅舎に常に改札員がいるということで、奈良さん一つ重要な、博物館で言うところと学芸員に相当する方だなあと思っております。

そこで学生がいったいどういうことを感じてきたかということですが、一つはこういう感想があります。「こういう展示制作を通して、普通に暮らしているだけでは分からないであろう都留の自然のすばらしさを改めて知ることができた」ということですね。この大学は地方からいろいろな学生がやってきます。ですから都留のことをあまり知らない、しかし展示活動を通して都留の自然、身近な自然のすばらしさを知るようになっていきます。

あるいは、「それぞれの植物がもつ独特のリズムが視界の中に飛び込んできます。今まで道や建物や遠くの山は見えていたけれど、実は手の届く範囲の自然までは見ていなかったんだとハッとしました。自然はいつでも話しかけてきます。その声に耳を傾けるおもしろさを知りました」とあります。

この学生は、プランターで植物を世話をしてきたんですけども、「これまで遠くばかり見ていたけれど、じつは手元の自然にも非常に息吹というものが感じられる、そしてまた魅力が感じられる」と語っています。

次に駅を起点とした観察会の開催ですが、これは今年度、3回実施しました。これから観察会を続けていくうえで、どういう課題があるか、またどういふふうに進めていけばいいのかということを検討するための観察会です。1回は4月に行いました。「春の森を歩く」というタイトルです。そして2回目は7月に行いました。今度は「夏の森を歩こう」というタイトルです。市民の方々にも参加していただいて、一緒に山を歩くという経験をしました。

そうした経験を踏まえて、今度は富士急さんと一緒にムササビの観察を駅から歩いてやろうという企画を立てました。これには市内の方々、それから県外の方々、遠くは東京の方々も参加されました。学生がスタッフとなって長い研修のうえに、まだ一回もムササビを見たことがないという学生もいました。たくさんいました。そうした学生も長い観察を経て、観察会を実施するという経験を一緒にしました。

あるが学生がこういうふうにごうってくれました。「ムササビをきっかけにして土や木、山、空を改めて見る機会が増えました。そしてそこには人間以外の動物が何万と住んでいることを思い出させてくれ、環境問題や動物の暮らしやすい本来の森の姿を考えるようになりました」とあります。

つまり身近な、本当にどこにでもいるムササビという生きたものを目の当たりにすることで、それを取り巻くいろいろなものに目を向けられるようになった。そしてまたそれが地域を知る一つの視点にもなっているというふうにごうっています。

私は実は学生とごういった観察会に参加しまして、私自身が最初にムササビにごうったときの感動ごうものを、いま私自身が忘れかけているごうことに気づきました。あ

んなに喜んでくれるのに、私自身はあまり喜びを感じない。最初の感動を忘れていた自分に気づきました。交流センターのフィールド・ミュージアム部門では、オープン・アーカイブといいまして、地域のいろいろな生きた情報、記憶とか、あるいは映像資料といったものを集めて、それを活用するという取り組みを始めたばかりですけれども、私はそういった経験がありましたので、もう一度ここでこれまで集めた資料を撮り直して、じっくりと身近なものを見つめ直してみようということをやってみました。その結果を紹介します。

この中に動物が写っているのですが、見えますでしょうか。反応があるとうれしいんですけど、ここに小さな生き物がいますね。ちょうど皆さんの手のひらぐらいのサイズですので、ちょうど指ぐらいの大きさだと思います。日本で一番小さなモグラの仲間ですね。これ毛並みがすごくきれいですね。

これはヒメネズミといいます。この森にたくさん住んでいます。しっぽが長いのが特徴です。

これはこの裏山を歩いていて初めて見たのですが、こういったものがたくさん落ちていました。じつはツリバナといって夏に実をつける、その小さな実なんですけれども、動物が来たのが分かりますかね。立ち上がって、いま取りましたけれども、私はこれはここに住んで初めて出会いました。びっくりしました。

これはモグラです。モグラの仲間ですが、川に住んでいて魚を捕ります。目は見えません。きれいな川に棲んでいますので、まだ都留の水はきれいなところがたくさんあるという証拠でもありますね。これ映像をお見せしますが、一瞬ですので、よく見てください。分からないかもしれません。

ここに魚がちょうどいます。これは夜の映像です。目が見えないんですけど、本当に一撃で獲物を捕る技を身につけています。

ここにも動物が写っていますが、分かりますか。これはリスですね。下にクルミがなっているのが分かると思います。四つ分のクルミというのは体の半分ぐらいあるんですけども、それを持っていく。私はこれを感動して見ていたんですが、隣をちょうど散歩する人が通りかかりました。「ずうっとここを散歩しているけれど、初めて見た。リスがいること自体気づかなかった」とおっしゃっていました。それで一緒にずうっと感動を分かち合った経験をしました。

学生の反応にもありましたが、当たり前に見えるものこそ、実は大切なものがあるということに、私はこの取り組みの中で改めて気づかされました。また経験することができました。いまお見せした映像はすべて生き物の本質的な部分です。生き生きした部分ですね。言い換えると動物らしさが表れている部分です。当たり前と思っているもの、あるいは身近にあるもの、そういったものの中に大切なものがあるということ、改めて気づかされました。

そういう意味から言うと、この取り組みはたしかに歩みを進めた一歩というよりも、むしろスタートラインにようやく立つことができたというふうにとまることができるのではないかと考えております。

今日の話の最後になりますが、この取り組みに関しては皆さんにいろいろお世話になりました。教員、市民の皆さん、参加してくださった学生の皆さんに多くの力を借りました。これからもいろいろと協力していただくこともあるかと思いますが、ぜひそのときはよろしく願いいたします。今日はどうもありがとうございました。(拍手)

司 会： ありがとうございます。非常に盛りだくさんで、幸せな気分になりました。これで

第二セッションの発表は終わりなのですが、すでに11時35分ということで、質問の時間が11時20分の予定だったのに、もう過ぎております。例によって、お一方だけ、ぜひご質問したいという方がいらしたら、いかがですか。よろしいですか。それでは、それも最後のセッションに回すということで、進めさせていただきたいと思います。

それでは、三つ目のセッション「つなぐ・はぐくむ」ということで、社会学科環境コミュニティ創造専攻の教授ですが、高田さんからお願いしたいと思います。「『カフェ』を交差する空間の意匠」です。

Ⅲ. つなぐ・はぐくむ：『カフェ』交差する空間の意匠

本学社会科学科教授 高田 研

高田：実は昨日の夜、徹夜で皆さんのお食事を作っていましたね。朝までモツ煮込みを岡崎出身の二人の学生が皆さんに作っておりましたので、ぜひお召し上がりください。バタバタしてまして申し訳ございません。

今泉先生からいただきました宿題のフィールド・ミュージアムをなんとかかたちにしていってこれというので、この3年間、奔走してきました。先ほど白戸のほうで紹介してくれましたキャンプとこれともう一つ、校内に小さな小屋を造るという三つのプロジェクトを回していましたが、ほとんど3年間そればかりやっていた。私の3年間の今日は卒業式のような気がしています。

カフェってなんだろうかといって、皆さんから非常に不思議がられまして、カフェって、僕も最初は知らなかったんです。僕が知ったのは東京の代官山ってありますね。あそこで若い連中が100人も200人も、僕は行ったことがないので分からないんですが、集まってカフェというのをやっているという情報。どんなことをやっているのと言ったら、環境問題を議論しているというんですね。「どんな場所なの」って言ったら、なんかアーティストも居て、音楽も聞いたり、ちょっとお酒も飲んだりしながら、みんなで、これぐらいの空間で、お話をする場所なんだというんですね。

僕、ずっと日本の環境教育の最初のころからかかわって、いろんなイベントをやってきて、フォーラムもたくさんやってきて、いろんなムーブメントをつくってきたんですけど、どうも、大きな集会には最近かげりが出てきました。でも、違うものをたぶん若者たちは求めているのかな、と思ったところで、そういうふうな動きが始まったんですね。それがBeGood Caféという動きで、全国に広がりまして、いまや地方都市でそれが開かれて、若者たちの手によって運営されているということです。僕はこれだな、と思ひまして、もっと小さなささやかな、小さな都留という地域の中で地域版をつくってみようというのがもともとのそもそもの思いです。

やりながら皆さんに分かっていただけたらいいかなということで開いたんです。決めたことは三つぐらいです。何をやるかということにつきましては、集まっていたいただいた皆さんでご議論してつくりながらやっていったということですね。これで決まったわけではないんですが、こんなことでやっていこうということで決まりました。

このチラシは、現在は富良野の富良野塾の最後の学生に合格しまして演劇を勉強している学生ですが、それが休学してやっているのですが、その学生が最初に描いてくれたポスターです。すばらしいですね。「今夜は大家族、歌って語って、みんなでごはん」これも彼女が考えたコピーです。みんなでそういう空間を作っていきたいという彼女の願いみたいところですね。

最初にやりましたのが、これです。学生はいろいろなところで古い民家をお借りして安いお金で提供していただいて、そこで共同で住んでいるというパターンが多いんです



けれども、その一つを会場にして小形山で開きました。1回目は小形山で残っている、大学を卒業してではなくて、小形山で生まれて、町に出ないで小形山で生活しようということに決めた若者がなぜ私はここに住んでいるのかということテーマにしながらお話をしましたね。

もう一人、佐藤くんが司会をしてくれています。佐藤さんもこの大学を出て、東京にも行かず、故郷（くに）にも帰らず、この都留にお住まいになって頑張っておられるということで、ちょうど共通する話で、たくさんの方に来ていただきました。

ゲストも毎回お呼びしています。これは清里から歌手の方をお呼びして歌とトークショーをやりました。

二回目は法能カフェといまして、今日も来ていただいていますけれども、うちの学校にお勤めの方々も協力していただいて、学生が下宿しているところを会場にして、古い民家でさせていただきました。

今泉先生が真ん中にいらっしゃいますね。このときけっこう激論になりました。学生が地域を回っていろいろな写真を撮ってきてそれを持ってきて、これは何だ、あれは何だというのを村の人たちと一緒に話をするのがだいたいテーマなんです。このときはイノシシの猟をされて吊してあったところに、これは何だという話で、今泉先生とこの猟をされた方で激論になりました。バトルでおもしろかったですよ。「このごろイノシシがたくさん増えて、もう、ぼくら困ってるんですよ」と。だからと自慢げにしゃべられたら、今泉先生が「インドではね、牛といっしょにね、暮らしてるんですよ。そういう哲学や生き方も大事なんじゃないですか」とおっしゃって、そこから大議論になって、学生は嘖然として二人の議論を聞いているんですね。おもしろかったですね。

このときは怪しい取り合わせで津軽三味線とソプラノの歌手と一緒に演奏するというコンサートをやりました。

十日市場カフェで、今日来ていただいています議員さん、お名前は言わないでおきますが、有名な議員さんもお手伝いにいらしていました。近所のお母さん方に協力していただき、料理を作っていたりして開催しました。

フィッシュナカノさん、今日は昼からのゲストで来ていただいているんですね。いろんな食材も提供していただいています。一人一品提供してくださいといったら、いろんな食材をいただきまして、開催しました。

十日市場の湧水の利用をどうしてきたかというお話を地域の人に語っていただくという会です。

これは吉田でまちづくりをされているナノリウムというカフェの店主さんです。ギターを弾いていただきました。

4回目は盛里へいきます。このころになると、「次は私のところで開催してください」という声がかかって、そこへ出かけていって開催するようになってまいります。盛里では20年間、皆さんご存じかと思いますが、今泉先生の時代に森のぐるりが刈り取られて残った小さな神社にいるムササビの保護運動をずっと小学生がやっています。歌手のしらいみちよさんという方がいらっしゃるんですが、その方が散歩で通りかかったときに、バサッと親のムササビが死んだと。それからしらいさんは我が事のように思い始めまして、いまはトラスト運動されています。そのトラスト運動の起点になる会をしたいということで、開かせていただきました。

このときには、先ほどから何回も出ていますが、ムササビの観察会などもありました。最後は、しらいさんの演奏会がありました。

最後にやりましたのが宝カフェということで、宝には昔、鉱山があったということで、お住まいの方はご存じかと思うんですが、その鉱山で働いていた従業員だった方です

ね。その方々をお招きして、当時のいわゆる非常に楽しんで映画館もあったということで、非常に楽しかったという思い出、それから鉱山の中で大変だったという思い出とか、いわゆる鉱山の喜怒哀楽をテーマにして話をするという会が最終回でやりました。

この最後に、今日昼からの委員長をやってくれている一木というのがこんな感想文を書いていますね。

「当時鉱山で働いていた70歳から80代のおじいちゃんたちから聞く鉱山の話は会場内に当時の様子を生き生きと甦らせていった。たった50年間のことなのに、全然違う世界のお話のようで惹きつけられた。当日たくさんの小学生たちが参加してくれた。80代のおじいちゃんから平成生まれの子どもたちに宝鉱山の当時の様子を伝える。それはまさしく歴史を伝承していくという作業であったように思う。宝カフェが終わって二週間後、私は富山県イタイタイ病、神岡鉱山のスタディーツアーに参加していた。」

いわゆる鉱山の問題に興味をもって、公害の問題に興味をもって、そして彼、彼女の行動が変わってくるというきっかけになってくれたということです。

新聞などにも掲載していただきました。今後のカフェですが、もちろん学生がまだ続けていくという意志を持っている学生がいますので、細々ながらも続けていこうかと思っています。

それからもう一つは、「都留環境フォーラム」という地域のつなぎ手のNPOを外に立ち上げました。ついこの間、県の認可が下りました。またちょうど都留市のほうではエコハウスもこの4月にオープンしますので、そういう場所も使いながら、新しい人々の出会い、また学生と地域との出会いの場所をデザインしていけたらなと思っていますので、皆さんご支援のほどをよろしくお願いいたします。

司 会： ありがとうございます。手を挙げる練習ということで、ちなみにカフェに参加なされたことがあるという人、手を挙げていただけますか。……なるほど。3分の1ぐらいですね。どうもありがとうございました。

それでは最後の報告になりますが、大学院生の桜井明子さん、それから学部生の杉山由貴乃さんに「地域を歩いて自ら学び表現する喜び・『フィールド・ノート』」についてご報告いただきます。よろしくお願いいたします。

Ⅲ. つなぐ・はぐくむ：「地域を歩いて自ら学び表現する喜び・ 『フィールド・ノート』」

本学国文学科4年生・大学院1年生 杉山由貴乃・桜井 明子

杉 山： こんにちは。国文学科4年の杉山由貴乃と申します。まず『フィールド・ノート』について簡単にご説明したいと思います。『フィールド・ノート』は地域交流研究センターフィールド・ミュージアム部門の機関誌で、地域の自然と人との交流というテーマで学生が主体となって冊子をつくっています。年5回発行で、発行部数は500部。県内外に定期購読者がいます。この写真は編集部内の風景ですね。



現在は64号をつくっているところです。今年で発行8年目を迎えます。私は大学2年生のときに編集部に入りました。もともと編集に興味がありまして、当時編集部員だった友人に誘われたのがきっかけです。私はいま4年生なので、3年間冊子づくりにかかわってきたこととなります。

私は大学3年生のときに、「こちら、つる探偵局」という連載ページを始めました。これです。ちょっと見にくいかと思いますが、左のページが始まりでして、これは扉ページなんですけど、めくるとまた後ろに2ページ文章が続くんです。この「こちら、つる探偵局」というページは都留で見つけた謎スポットですね。これは何だろう、変だな、不思議だなあと思うような場所や物を、探偵になりきって説明していくというページです。

皆さんの中にはもうすでにこれを読んだことがあるという方もいらっしゃるかもしれませんが、このページは東桂にある？渡辺金物屋さんを取材したときのページです。ここは何が謎なのか少し説明したいと思います。

金物屋と書いてあるのが見えますでしょうか。ここは金物屋さんなのですが、いざ店に入ると、置いてある商品がまず文房具、あと駄菓子という子どもが喜びそうな商品ばかり置いてあるんですね。それで金物が何もないんです。ここは金物がない金物屋ということで、今回これを取材したんです。謎の答えはさて何なのかと言いますと、なんと太平洋戦争だったり、都留のかつての産業である織物等々のいろいろな要素がかかわりあって、びっくりするようなとんでもないドラマが展開されるんですけども、今回は時間が短いということなので、残念ですが、割愛することにします。もし続きが気になるという方がいましたら、『フィールド・ノート』61号をぜひお読みになっていただきたいと思います。

割愛してしまいましたが、こんなふうにあつた、これ、何だろうという小さな疑問がとても大きな発見やドラマにつながっていくということ、つる探偵局で扱う謎は本当にそういう楽しい出会いばかりで、取材に行ったあと、私は毎回、「ああ、今回もすごいことを聞いちゃった」と思って、すごくうれしくて、宝物を独り占めしているようなうれしさがいつもあって、帰り道はいつも顔がにやけちゃうんですね。顔がにやにや、に

ここにしながら帰り道を歩いていくので、たぶん周りからみたらすごく怪しい人なんだと思うんです。でもそれぐらいすごくうれしい経験です。

以前、つる探偵局で取材させていただいた方がこんなことを言うてくださったことがありました。「私たちにとっては、何でもない思い出、記憶でも、ほかの人から見たらすごく価値があることなんだね」、そして「自分では気づかないだけで本当はすごく大切なことなのかもしれない」と言うてくださったことがあって、そういう私たちのすぐ近くにある見過ごされがちな小さなことに注意して耳を傾けてみると、そこにはすごく大きな発見や楽しみがある。それを私はこのつる探偵局という連載で学びました。

よく見さえすれば、おもしろいことは本当にいろいろなところに、どこにも転がっているんです。でも、こういう視点は基本的なことですよ。でも、そういう基本的なこととか、当たり前のことを改めて気づかされてくれたのが、私にとってこの『フィールド・ノート』で、そういう点から見てもやはりフィールド・ノートってすごいなあと思います。

これからもそういう小さいことをよく見つめていくという視点を忘れずに一つ一つの出会いをよく見て楽しんで大切にしていきたいと思っています。以上です。(拍手)

桜井： 皆さん、こんにちは。大学院1年の桜井明子です。いきなり『フィールド・ノート』のずいぶん前の29号というのを出したんですけど、これが私と『フィールド・ノート』の出会いの最初の号です。私は大学に入学したとき、ちょうど5年前ですが、入学してその春、大学の図書館の雑誌のコーナーでこれを見かけたんです。見た瞬間、すごい楽しそうだなと思いました。写真に惹かれたのと、特集のタイトルが「よってけし都留」と書いてあっておもしろそうだなと思いました。どんな人がつくっているのかと思ったときに、ちょうど新入生向けの『フィールド・ノート』の説明会があって、それで北垣さんとお会いしました。

そのときに自分の足で歩いて、自分の目で見て、自分の耳で聞いたことを表現する場が『フィールド・ノート』だというお話を聞きました。私は編集のことは全然分らなかったんですけど、歩くのと、いろいろな人にお話を聞いてみたいというのがあって、それで編集部に入部しました。そのあとやはり歩いたこと、あとインタビューの記録などを、自分の思いを交えながら、これまでずっと書き続けてきました。

今年度は「働く人」というのをテーマに連載をしました。これがちょうど去年の春、6月に出した号で、「山で働く鈴木さんのこと」というタイトルで書いています。この方に出会ったのがちょうど2008年の4月で、記事になったのが2009年、去年の6月なので、この方との交流は1年以上にわたっています。基本的に私はインタビューする相手の方と出会って記事になるまでに1年とか2年ぐらいかかってしまいます。そういうふうにしなないと書けない。そういう交流を積み重ねて文章にしていくというプロセスを踏んでいます。

最近だと、63号というのがついこの間出たんですけど、この表紙が防空壕の絵と、あとは中から撮っているんですけど、ここに防空壕の入口があります。2007年の冬に、山に行こうと思って歩いていて偶然見かけた入口が気になって、その持ち主の方が現れていろいろお話を聞いたら防空壕だということが分かりました。それを2年ぶりに特集で「跡」というタイトルで組もうということになったので、ではもう一回あのお話をちゃんと聞いてみようと思って、確認をとりながら取材して文章を書き上げました。

これもすごくおもしろくて、いろいろお話を聞かせてくださったのは持ち主の小俣さんという方です。小俣さんちの59歳の奥さんと、80代のおばあちゃんです。二人にお話

を聞いてすごく印象に残っていることがあります。文章を最後の最後に書き上げて、原稿を持って自宅に伺ったんです。そのときに、文章を二人で読んでくださって、私は緊張しながらどんな反応が返ってくるかと思って待っていました。

そうしたら、二人、読み終わったあとしーんとなりました。どんな反応が返ってくるかなと思ってどきどきしていたんですけど、「良かったね」と一言言ってくださったあとに、その奥さんが「これ、お仏壇にお供えしなきゃ」と言ってくださって、それにすごくびっくりしました。文章の中に、戦争中に亡くなられて、戦争中にその穴を掘った人のことが書かれてるので、そのおじいちゃんに見せなきゃ、ということだと思っんです。

まだ冊子にもなっていない、ぺらぺらの紙なのに、「これをお仏壇にお供えしなきゃ」と言われたときに、うれしいというか、びっくりして、『フィールド・ノート』を続けるということはこういうことなんだなと思いました。そういう経験、うれしいとか、そういうことを積み重ねながら、つらいことも、文章がうまく書けなくて悩むこともあるんですけど、そうやってやっていく、それが『フィールド・ノート』なんだなと思って実感しています。

こういうふうにして私は5年間、『フィールド・ノート』を続けてこられました。こんな発表ですが、これで終わります。以上です。(拍手)

司 会： どうもありがとうございました。実は時間がかなり押してまして、このセッションの討論は特にとれないということになります。今までまったく会場からご意見をお聞きできなくて本当に申し訳なかったんですが、ようやく最後のセッションで12時半まで、これから総括的に話をするということで、全部で7本、とても盛りだくさんな発表がありました。いかがでしょうか。どなたからでもお願いしたいのですが、挙手をさせていただきます。

ム 口： ム口と言います。たんぼクラブですかね、そこのところに大学生の方が田んぼをしたことで感動の言葉が載っているんですけども、私は実家が百姓だったので、生まれたときからそれを見てきているわけですよ。ですから、正直言って、何を当たり前のことを、とってしまうわけですよ。

いま見ていると、小学生に田植えをさせて、あと稲刈りだけ。その間がないんですよ。中学生とか高校生がそういう体験をしたということはあまり新聞とかで見たことはないんですけども、先生ご自身は、そういった体験というものを、例えば小学生でも中学生も高校生でもいいんですけども、大人がやっているのを見せておくほうがいいのか、それとも形でもいいから田植えと稲刈りだけはさせたほうがいいのか。大学になってからそれを初めて分かったのではなくて、どの段階でそういうものを体験させればいいのかというお考えがありますでしょうか。

それと、これは全く余談ですみませんけれども、家の下のほうの住宅街の中に一軒だけ去年引っ越しして、そこの家が更地になったんですよ。そのあと草がぼうぼうになってしまったんです。そうしたら近所の方が、「まったくもう、草ぼうぼうでそこに動物が来たり、鳥が来たり、虫が来て、本当に迷惑だ」っておっしゃったんですけども、私自身は、ああ、生き物っていうのはこういう緑がないと生きていけないんだな、とつくづく思ったんです。

で、先生、いかがですか。どの段階でそういうものを教育の中に入れるなり、体験させるなり、どういうふうに思われますか。

西 本： とても難しい質問で、実は僕自身も小さいころに農業体験があったわけではなくて、本当に過去せいぜい10年とか、そういう中での関心の持ち方ですし、何か

提言できるということはあまりたくさんないと思っているんですね。

やはり小学生でやるという場合と、大学生がやるという場合はやはり違いはあるだろうと思うんです。小学生だと、今日の話で言うと、最初に話をされたような自然とのかかわりというところに重点をおいた活動を組み立てるということが、まずは筋かなと思うんですね。

僕はこの大学では社会科の教員をやっております、山の専門家に言わせると、僕自身は人間中心だと思うんですね。けれども、人間の営みというものが本来どういうものであったのかということ、どこかで知る必要があるだろうと思うんです。それは農業にしても、機械でやっている農業をいくらやっても、元々どういうものであったのか見えにくいと思うんです。

しかも、毎日ほんとうに生計を立てるために農業をやっている方ではなくて、どうしても部分的な、ほんの一部のかかわりになるわけですよね。そうであるかぎり、そこで機械を使ったのではもったいないというか、それでは得られるものも得られなくなると思うわけです。

今日の報告で触れませんでしたけれども、最後の三つ目の項目に、「自ら食を作り出す」ということを書いています。このことも非常に大事だと僕は思っています。自分で食べるものを自分で作ることができるという実感をおそらく今の子どもや青年たちはほとんど持っていないと思うんですね。

それで、このたんぼクラブはけっこうよく米ができていまして、だいたい学生が分けると平均して10キロぐらいはもらえるんですよ。10キロあると相当食べられますね。もちろん簡単なことではないとは思いますが、その経験を通して、10キロの米を手にして、自分で食べるものを自分でつくるということは簡単ではないけれども、不可能ではないんだと思えるのではないかと。

そういう人間の生活を成り立たせる営みということになんとかしてつないでいきたい。気づかせたい。それは僕は本源的な意味で生きる力につながると思っているんです。そういう活動はやはり小学生では難しい。中学生も分からないけれども、高校になればできると思います。高校で言うと、農業高校の取り組みも当然あるでしょうけれども、けっこういま高校で農業系の講座とか活動を普通科などでも組み込んでやっていこうというところがずいぶん増えていきますから、そういう例はたくさんすでにあると思います。答えになっていないと思いますが。

△ 口： どうもありがとうございました。実はそれを生かしたいと思っているところがありますので。ありがとうございました。

司 会： ありがとうございました。ほかにいかがですか。では、そちらに。

シミズ： 都留市のシミズと申します。「ベネッセと考えた森と子どもたちの正しい関係」ということについて、白戸先生に伺いたいんですけども。素晴らしい活動だと思うんです。私、都留に生まれ、都留に住んでいるんですけども、私たちの時代と違って本当に子どもたちがせつかくのこのすごい自然をほとんど知らない状況で育ってるんですね。

こういうかたちで活動なさったことは素晴らしいんですけども、おそらくこれはイベント的に一部の子どもたちしか体験できていない。これからこれを、できれば都留のすべての子どもたちが保育園・小学校時代に体験してくれるといいなと思うんです。今度これをどういうふうにつなげていってくださるのか。せつかくここが教員養成所ですので、そういう方で、先生たちが巣立って行って、そしてそういう学校教育の中に取り入れていくだけの力を持って皆さんが出ていくのか。とりあえずは都留の中でこれがどういうふうひろがっていくのかという

ことを、期待と同時に、どうなのかなと思っているんですけど、そのへんいかがでしょうか。

司 会： 白戸さん、高田先生ですか。ベネッセのプログラムを説明しなくてはいけないと思いますが。

高 田： いま全国的に見ますと、野外活動、自然体験活動が非常に低迷しています。ご承知のように昨年度の仕分けでもかなり事業が……。私、以前文科省に勤めていたことがあり、そういう施設におりましたので、わりあい情報が入ってくるのですが、非常に厳しい。

最初に切られ始めたのは都道府県の青少年の施設で、県立の施設、府立の施設、道立の施設がどんどん今はなくなっている状況です。なんとか残っておりまして、指定管理に残っている。この間も私の友人が電話をかけてきて泣き言を言いました。指定管理でお金が減らされてしまって、今年は自分の給料を3割カットしないと請け負えない。そうしないと、若い連中にお金が払えないような状況なんです。

そういう状況が全体にありまして、そういう中で例えば、都留の子どもたちでどうかたちでそういう自然体験活動を保障していくかというのは、本当に考えていけないといけないことですね。

先ほど農業体験の話がありましたけれども、いわゆる最初の自然とかかわる部分の原体験は、意外とこのように自然がいっぱいあるところの子どもたちのほうがかえって「ない」という調査の結果もあります。都会ではなく、せっかく自然があるわけですから、しっかり身につけるようなシステムをつくっていかないといけません。

まず一つは、いま考えているのは、先ほど白戸が最後に話したことです。彼女は森の幼稚園の研究をしているんですけども、いまは小学校ではなくて、幼稚園・保育所のほうでそういう動きがすごく盛んです。

最初の原体験としてそういうものがどうしても大事なんだということに気づかれました、そういうムーブメントが起こっているので、できるだけそれを今の既存の宝の施設などにお呼びしてやっていきたい。そしてそういうプログラムを全体的に広げていきたい。都留の子どもたちがまず幼児のときにそういう体験をできるんじゃないか。そういうシステムをできるだけうまく構築できたらなあと思っていますので、皆さんまたそのへんをお考えいただけたらと思います。

それから県の予算を少しいただきまして、鹿留のところに区有林がありまして、そこをお借りしています。いまちょうど来ていただいています小口先生、東桂小学校の先生といっしょにコラボレーションしまして、いま東桂小学校の子どもたちうちの大学生とでコラボレーションをして、そこへ東桂保育園が加わり、その三者で、三角形でいま森づくりをやっています。そこで新しい体験を補助金をいただきながらやっていくというプロジェクトも始めております。そういうものがもう少し一般化して広がっていくと、また違う面でまだ成長するのかと私は考えています。今後ともご支援ください。よろしく願いいたします。

司 会： ありがとうございます。よろしいですか。

下 澤： シオジ森の学校の下澤と申します。今の方のご質問に二つの点でお答えいたします。

まず、学校教育の中で高田先生のなさっているようなことを取り入れてやっていくことは非常に難しい時代になっています。具体的には時間がないから申し上げられませんが、今日はシオジ森の学校のスタッフが3人来ております。これが

終わった後、その点について関心がありましたら聞いてください。とにかく難しいということですね。

そして私たちシオジ森の学校を立ち上げたのは、学校教育の中では難しいからでした。森が90%近くあるこの地域の中で子どもたちにそういうところに育った喜び、誇りを育てたいということで今活動しています。スタッフは全部手弁当のボランティアです。

参加者からは、去年までは子どもはお金はいいただきませんでした。今年は助成金が大幅になくなりましたので、参加費等を若干いただくようなかたちでやっております。主な対象地域は大月市、上野原市ですけれども、都留の子どもさんたち、富士河口湖町の子どもさんたちも何人が参加しています。

地域は問いませんので、参加できるような状況がありましたら、ぜひ参加していただきたいと思います。小学校5年生以上は送迎の車も用意することができますので、大月の駅に集合していただければ、車で送り迎えをするという態勢をとっています。それ以下のお子さんは保護者同伴で参加していただく。年間20日以上運営しております。人が増えたり、ボランティアの方が増えればもっとできるんですけども、今のところそれが限度です。さまざまな内容については、きょう展示しておりますので、ご覧いただいたり、お話を聞いてもらえればよろしいかと思います。

メインは今年で5年目になりますけれども、家族で実際に森に木の苗木を植えて、そして5年間継続して手入れをしていくという活動をしています。今年5年目になりまして、まだ新たに参加したいという家族の方もいらっしゃいますので、今年はプレの年として、来年からまた新たな5年計画でやっていこうということで、今準備しているところです。時間が短いですから、詳しいご説明はできません。

坂田先生の教室の学生の皆さんにもたいへん応援していただいておりますし、このプログラムとも非常にリンクしておりますので、その点について、もし坂田先生のほうから何かありましたら、お話しいただければと思います。以上です。

坂田： 急なことなので。ほかのことでよろしいでしょうか。先ほど下澤さんが「学校教育の中では無理」とおっしゃっていたんですけど、それはたしかにそうだと私も思っています。ですが、地域の皆さんが周りにいるじゃないですか。特に都留とか大月は森林に恵まれていますし、地域の農業、実際、経営的にはやっていませんけれど、半農半X的だとか、生活の傍らでやってらっしゃる方がいっぱいいるわけで、そういう方たちと一っしょにやっていけばいいと思うんです。

そういう地域の方と、一っしょにできるようにするための仕組みづくりがないというところが一番大きな原因かなと。手弁当で土日にボランティアでやるのもとても大事なことです。手弁当でやりながらも、お互いが充実した気持ちでできることも大事です。そのためのバックアップの組織や資金的な援助がきちっとできるように組織体制を整えていくというのがすごく大事だと思っています。

地域の方で年をとってしまって、田んぼや畑があるので若い人に使ってもらえたらという人はたくさんいると思うんですね。森が荒れていて自分たちだけでは手入れできない、人手が必要だという人もたくさんいると思うんです。

そういう声を拾って、人をつないでいくということを今後考えていかないといけない。だれが考えるのかという話です。だれが考えるか。行政の方だけじゃだめだし、地域の方だけでもだめだし、やはり人と人がつながっていくというのが非常に大事なのかと思っています。

司 会： ありがとうございます。

東 浦： 東浦と言います。坂田有紀子先生に個人的な興味で質問を三つほどさせていただきたいと思ひます。まず一つ目に、川原を生育地とする在来植物はどれくらいあるのかということと、もう一つが、その一つとして絶滅のおそれがあるものとしてカワラナデシコが紹介されましたが、そのほかに川原で絶滅が危惧される植物というのはどれくらいあるのかということもお聞きしたいと思います。それからカワラナデシコに影響を与える外来植物はどれくらいあるのかということもお願いいたします。

坂 田： すいません、記憶力が非常に悪いので……。三つですね。まず最初、川原の特有の植物は何種類ぐらいいるのかということですが、はっきり申し上げてそれは私は知りません。でも、名前はたぶんいくつかあげられると思うんですけども、例えばカワラナデシコとか、カワラヨモギとか、カワラ……なんでしたっけ、最近絶滅危惧の……すみません。

会場の声： カワラニガナ。

坂 田： ああ、そうニガナもそうです。カワラ……、記憶力が悪いんです、すみませんね。学生さん。

学 生： カワラノギク。

坂 田： そうそう、カワラノギク。たくさんあるんですけども、お答えできるほど勉強していません。2点目はカワラナデシコのほかに絶滅危惧の植物がどれくらいあるかということでしたっけ。カワラノギクは非常に有名ですし、あと……ちょっと出てこないんです。申し訳ないですが、文献等は紹介して差し上げられますので、申し訳ないです。もう一点は何でしたっけ。

司 会： カワラナデシコに影響を与える外来生物、外来植物。

坂 田： オオボタクサだとか、キクイモ、最近ではピロードモウズイカなどの外来種がたくさんありますし、クズとかヨシとかも……（15秒空白）……おおってしまって、カワラナデシコの生育環境を悪化させているということは分かっています。すみませんが、よろしいでしょうか。

東 浦： ありがとうございます。

司 会： では、そちらの方。

小 口： 東桂小学校の小口と申します。いくつか聞きたいことがあったんですが、一番関連してさっきの話で、学校教育では無理という話がありました。実際大変なんですけれども、受け皿というのがないと厳しいなと感じます。実際、社会教育かという、最初の話に戻って、一部の子どもだけになってしまいます。特に高学年になると社会体育が盛んになってきまして、観察会をやっても、幼稚園や低学年に限られてしまうというのが現状です。

学校では、遠足とか、林間学校でそういうところに行く機会はあるわけです。じゃあ、ということで宝の山にも行くんですけども、佐藤さんもご存じのとおり、多忙で、これ以上仕事が増えたら、やっていけないというような状況にあると思ひます。

あと林間学校についても、いま上野原の桐原のほうに行ったりなどして行うというように、市内にももっといい受け皿を用意すればいいのですが、先ほどの話のように、行政とか地域の人とかが有機的につながらないと、なかなか難しいところがあるなというのは、とても実感として感じます。スライドの最後に紹介されたNPOあたりがこれからの可能性があるんじゃないかと思ったので言わせていただきました。ありがとうございます。

司 会： ありがとうございます。はい、どうぞ。

ノモト： ノモトと申します。いま小口先生たちが学校で自然活動やそういうのをやっているんですけど、私も仕事で都留のほうでも？興譲館学校だとか、そういうふうなかたちで、子どもにできるだけ自然体験をするような仕事をしています。手を挙げてくる子どもたちは受け入れられるけれど、手を挙げてこない人たちには今までの同じというふうなかたちなんです。

私の提案ですが、少し大きい話になるのかもしれませんが、今の6・3・3制の教育を4・4・4制の教育にするとか、いま少子高齢化で教室が余っている。余っている教室を地域の大人たちが1年から4年までの学生を放課後フォローする。いま都留でも？興譲館学校、放課後学校というのをやっています、4地区の小学校を中心にして、大人たちが自然体験とか農業とか、いろいろやっているふうなかたちなんです。

ですけど、活動の教室だとか、そのへんがないという問題もあります。昔の例を見ますと、公民館活動、公民館を中心にして青年団たちが農業とか農村の改善とか、いろいろ政治活動をしたようなんですけど、今度は高齢化になった大人たちが小学校に中へ入る。育成会も私、やったんですが、育成会の本来の仕事は地域の子どもの地域の人たちが育てるというものです。そんなかたちで小学校を活用して地域の子どもの育てるような仕組みづくりをこれからしたらいいんじゃないかと思えます。

あわせて、今オリンピックもやっていますよね。子どもも今の小学校5、6年生ぐらいから本格的なスポーツをしないとだめだというようなスポーツの記事を見たことがあるんですよ。そういうふうなことからいって、仕組みづくりを変えて、これからの日本の社会を教育のためにも4・4・4制なんかはいいじゃないかなあと、私は前々から思っていたので、この機会に発表させていただきました。

司 会： ありがとうございます。貴重なご意見として承りたいと思います。はい、どうぞ。

長谷川： 静岡から来ました本学の初教卒業生でいま静岡県の小学校の教員をしています。富士自然観察の会の長谷川と申します。学校の話が出てきたので、現場の人間としてのコメントです。いま自然体験の話が出てきています。結局、学校では難しい、カリキュラムの中で子どもたちに自然体験をさせていくというのはとても難しい。また新学習指導要領になって、5日間の中で本当にたくさんの授業数をこなさなければいけない。いま現場の先生たちは毎日6時間どうやって子どもたちの集中力を続けさせようかとやっている状況ですから、なかなか自然体験を学校のカリキュラムでやっていくのは難しいと私も思っています。

富士自然観察の会というボランティア団体で市内の小学校の、土日が中心になってしまうんですけども、自然観察会の講師とか、そういったものの運営をやっています。富士市の受け皿という話があったのですが、環境省のほうで子どもエコクラブというのをやっています。それを市の環境保全課が受けて、各小学校、全部の小学校ではないんですが、いま10校ぐらいに校内でエコクラブというのを作りまして、年度初めに会員を募集する。観察会の情報、こういうことをやっているよという自然体験を伝える手段としています。子どもたちには「毎回毎回来なくてもいいよ、1年に1回でもいいから来れるときに来てね」というスタンスでやっています。

そんな感じで一つは子どもたちに、こういうことをやっていると知らせるといって受け皿を作っていくことが大事かと思えます。学校の放課後などに自治体のバ

ックアップでつくっていくしかないかと思っています。

先ほどの高田先生のお話にもあったんですけど、本当に予算がつかない。私たち自然観察の会でも、市内に湿性植物を集めた公園を4月にオープンさせるんですが、その管理をやってくれと市のほうから頼まれました。けれど予算はつかない。どうしたものかなど。結局、そこにいる貴重な植物たちを説明できる人材というのは私たちしかいないような状況で、それをやってほしいというのだけれども、それでは非常勤で給料を払ってくれるかと言うと、一人70日間だけしか出せません、それ以上は無理、管理棟も建てたけれども、中にあるのはトイレと机だけ。初年度は何の設備も用意してくれないというところで、どうするかなという感じで、本当に僕たちがボランティアで観察会をやって、市民の人たちに広めて実績をつくらないことには、たぶん市も金を出さないのではないかと、そんな話をしているところです。

それから来るのは幼児、小学校低学年が多くなってしまいます。でもやはり小さい子は本当に素直にいろんなことを発見するし、いろんな見方をするし、大人の私たちがかかわっていても、ああ、こんな見方があるんだと気が付かせてくれる存在なので、染めてしまうわけじゃないですけども、幼児や小学校低学年の子たちに自然を体験する場を提供するというのがこれから大事なのかと思っています。

一番最初の話に戻って、米作りの話で少しだけ。時間もないので簡単なコメントです。私はまだ2校しか赴任していないのですが、それぞれの学校で校庭に田んぼを作りました。子どもたちが自分たちで田起こしして、代掻きして、植えて、夏休みも水を見張って、だいたい7割方教師がやるのですが、子どもたちがかかわっています。二つとも古い学校で、社会科の資料として千歯扱きだ、唐箕だというのがあるので、昔の人と同じように精米して食べている。そんな取り組みをしている学校もあるということだけお伝えしておきます。

司 会： そろそろ時間ですが、ぜひお話しなさいたいという方、いかがですか。よろしいですか。はい、どうぞ。

熊 谷： 東海大学の教養学部の熊谷という者です。坂田先生に質問があります。カジカとカワラナデシコのマップを作るとおっしゃっていたんですけど、マップを作るにあたって乱獲のおそれということが、もしかしたら考えられると思うんですが、そういったものに対して対策は考えられているのでしょうか。

坂 田： それはもちろん非常に大事な点でして、私も常々相反する、皆さん地域の人たちにここにこういう生き物が棲んでいますとお知らせしたいんですけども、その反面、そういうことを知らせると乱獲されるのではないかというので、今までずっとできていませんでした。ですけど、いろんな広報活動と言いますか、地域の方たちにこうしてお知らせしていくことで、地域全体として生き物を保全していくという雰囲気生まれてくると思うんですね。

もちろん乱獲する人もいるかもしれませんが、ほとんどの方たちは地域の自然を愛して地域の自然を守りたいと思っています。それはこの2年間活動してきて、本当に感じました。この地域の人たちが自分たちの地域を大切に考えているんだということがよく分かりました。乱獲はもちろん心配ですけども、そういう乱獲を許さない雰囲気を地域の中に作っていくことを少しずつ時間をかけてやっていくことを続けていきたいと考えています。答えになっていますでしょうか。

司 会： ありがとうございます。まだまだご意見、お話しになりたい方がいらっしゃ

ると思いますが、そろそろ時間ですので、これで締めたいと思います。文科省現代GPプロジェクトとして3年間やってきたのですが、今日はその締めということで4ページにあります、だいたい11のプログラムを動かしました。最後の意見はとても良かったと思うんですが、こういう環境教育プログラムをつくったわけで、かなり最後の意見では、それをどうやって小学校教育に生かすとか、そういうことをぜひやっていただきたいというようなご意見がかなり出て、たぶん代表の坂田も非常に喜んでいてと思います。

最後の総括で、社会の環境ではお金がつかない、厳しいということだとは思いますが、せっかくなつくたこういうプログラムを実現していきたいと思っています。本日はどうもありがとうございました。これでフォーラムを終了させていただきます。(拍手)

坂田： このあとの予定について説明させていただきます。12時半から2時まで昼休み兼展示交流の時間帯ということで、102教室、隣の教室で学生と地域の方によるフィールド・ミュージアム活動の展示を行っています。こちらにありますように、学生さんたち、シオジ森の学校の皆さん、あるいは市立図書館の方たちによる展示活動がございます。

お腹がすいてきたと思うんですけども、102教室のほうでは、天然酵母のパンをほしのさと工房さん——都留の東桂のお店、非常においしい天然酵母のパンをつくってらっしゃるところです——が販売に来てくださっていますので、そちらを召し上がってくださいしてもけっこうですし、フィールド・ミュージアム・カフェの学生さんが一晩徹夜をして作ってくださったという愛知名物の味噌煮込みとおにぎりの販売も……。

高田： それね、おにぎりのほうは保健所の許可が下りなかったので、ご飯になりました。ご飯の上にモツ煮をかけて食べる料理が岡崎にあって、もともとそれをしようということだったんです。保健所の指導で握ってませんので、よろしく願います。

坂田： あと午後2時から4時半まで、高田先生から午前中のセッションで紹介がありましたけれど、学生さんたちが企画をしたフィールド・ミュージアム・カフェが大学で体験できる非常に貴重な機会ですので、ぜひ皆さんご参加いただければと思います。

二つのセッションに分かれていまして、最初が亀工房さんという非常におもしろい名前のアーティストの方、お二人の方ですが、アイリッシュハープとアコースティックギターによる非常に美しい音色のデュオです。ぜひ聞いていただければと思います。

そのあと、「顔の見える社会の再構築を、今日もカフェで大家族」というテーマで、みんなでわいわいと、午前のセッションはちょっと堅苦しかったですけれども、午後はみんなでわいわいやりながら地域のことについて話していきたいと思っていますので、こちらもぜひご参加いただければと思います。

ではこれから展示、昼休みに入りますので、皆さんご自由に交流をしていただければと思います。長い間お疲れ様でした、ありがとうございました。(拍手)

終わりの挨拶

都留文科大学 社会学科教授 畑 潤

畑：お忙しい中、きょう都留文科大学地域交流研究フォーラムにご参加くださった皆さん、一日たいへんご苦労様でした。私は社会教育あるいは生涯学習論という分野を担当しておりますけれども、地域交流研究センターのメンバーとして、おしまいの挨拶をするようにということになりました。



第6回のこのフォーラムのテーマは「ようこそフィールド・ミュージアムへ」という呼びかけの副題が大事なのですが、「自然と人をつなぐ、人と人をつなぐ、生き生きとした新しい地域社会の創造に向けて」というものです。

自然と人間と、そして地域社会の本来のさまざまな関係を問い直し、甦らせていこうという趣旨を持っております。またこのフォーラムは平成19年度に採択されました3年間の事業であります現代GPのまとめにもなります。したがって、このフォーラムはたいへん総合的な内容を持つものになりました。閉会にあたり、簡単に振り返りまして私の感想を述べさせていただきます。

午前中は三つの報告のパートから成り立っていました。第1のパートは山で学ぶというイメージ、つまり自然そのものとかかわりということです。坂田さんは菅野川、鹿留川の環境保全の取り組みについてご報告してくださいました。

その取り組みの動機はナデシコとカジカに象徴されるわけですが、昔は川がピンクになるほどあったという住民の声に注目されるなど、地域住民との協働の実践運動であるということに格別に心を惹かれました。

泉さんの「荒廃したアカマツ林は甦るのか」は、現代の重要課題の一つであります山林そのものにかかわる分野のことでありまして、ネタイリ山を中心にした環境コミュニティ創造専攻の授業実践の報告をしてくださいました。地域交流研究センターの取り組みの基盤の広がりを告げてくださったと思います。

白戸さんの「ベネッセと考えた森と子どもたちの正しい関係」では、子どもたちとのGrow Wild Campという実践を、ご自身のみずみずしい経験を含めてご報告くださいまして、心に残るものでした。ヘンリー・デイビッド・ソローの思想を継承するもので、子どもの人間的な成長ということを焦点に改めて自然と人間形成とその関係について広く着想させられました。

第2のパートは「里・町で学ぶ」ですが、西本さんは農の原体験を求めて、「大学農園整備事業」ということで、学生教員たちとの農の実践経験に基づく報告をしてくださいました。都留での農は、大学関係者は市民の協力を得ながら、複数取り組んでいるわけですが、西本さんは報告で執念という言葉が使われましたが、手作業の農の実践そのものから徐々に自主的な大学農園構想というべきものが立ち上がってくるのが感じられました。

北垣さんの「私の小さな博物館」、副題は「ほんものと出会う旅のはじまり」ですが、

このご報告については、富士急沿線のフィールド・ミュージアムの歴史とともに、リスなどのすばらしい一瞬の映像を見せてくださいました。その背景には北垣さんご自身の自然に向かう思想的探究があるように思います。その深まりは、今日は直接には触れられませんでしたけれども、『フィールド・ノート』63号（最新号）の北垣さんの文章、「生き物との出会いは一編の歌を詠むよう」、そういう文章にも鮮やかに示されていると思います。ぜひ皆さん読んでみてください。

第3のパート、「つなぐ・はぐくむ」ですけれども、高田さんは『カフェ』交差する空間の意匠」ということで、この間、高田さんが黒子になって市内各地で会を重ねてきました。そして先ほどこのフォーラムで行われましたフィールド・ミュージアム・カフェ、副題が「顔の見える社会の再構築を—今日もカフェで大家族！—」という実践のご報告をくださいました。大家族という言葉が使われているわけですけれども、消えかけている地域社会の多彩なつながり、それを呼び起こす契機として、注目したいと思います。

杉山さんと桜井さんの「地域を歩いて自ら学び表現する喜び・『フィールド・ノート』」は市内を散歩しながら、学問分野にとらわれることなく、自分の目、耳、つまり自分のハート、自分の心に響いたさまざまな出会いを記していく実践です。だれもが伝えるというそれぞれの表現手段を持っていくということはフィールド・ミュージアムの方法論の発見なのだと思います。

4番目の総括の時間は6人の発問があったと思いますけれども、それぞれの三つのパートの諸実践の生かし方をめぐって意見交換がなされたと思います。

昼休みも今ではこのフォーラムの定番になってきたように思うのですけれども、大学生や地域の方による展示・交流ということで、リラックスしたかたちでの文字通りの交流が行われました。ここでは展示等のお名前をあげるだけにとどめますが、フィールド・ミュージアム活動、『フィールド・ノート』、都留市図書館の益子亮写真展、大学食堂における食育活動、シオジの森の学校、これには積み木広場も含まれていました。そういった展示・発表がありました。

また、フィールド・ミュージアム・カフェによる豚汁、ほしのさと工房の天然酵母パンの販売も行われました。午後の部はミニコンサート&フィールド・ミュージアム・カフェということで、亀工房さんによるミニコンサートとフィールド・ミュージアム・カフェが行われ、心楽しい時間を共有することができました。今日のフォーラムのテーマそのものにかかわることですけれども、ともに過ごす時間を持つ、そのことによってお互いが親しくなるということの大事さを感じさせてくれました。

このフォーラム全体を振り返ってということですが、フィールド・ミュージアムの実践の歴史、つまり歴史を持ち始めてきているということ、この分野も担い手もどんどん広がってきているということを確認することができたと思います。そして学生、教員などの参加者の心の変化、つまりそれぞれの内部に生じた感動とか発見が報告されていったわけですが、このことはさまざまような様相を帯びている現代社会において非常に貴重なことであると、そう確信いたします。

そのフィールド・ミュージアム実践のあるいは運動の普遍性にかかわりまして、今日最初に杉本センター長や坂田さんから発言があったわけですけれども、上野の国立科学博物館で開催されることになりました「大哺乳類展」、副題が「陸のなかまたち」となっています。3月13日から6月13日まで開催予定ということですが、このことについて、ひとこと触れておきたいと思います。

この企画展は協賛者として、花王、三井物産、凸版印刷とともに、この都留文科大学も名を連ねているわけです。そして都留文科大学フィールド・ミュージアムの展示コーナーも設定されることになりました。その「大哺乳類展」には、絵本の「14匹シリーズ」

で愛されている、いわむらかずお絵本の丘美術館からの展示もあるそうです。そういうことで私たちのフィールド・ミュージアムとの新たな交流もさらに広がり始めています。

それから都留文科大学元学長の大田堯先生が地元、埼玉県で見沼フィールド・ミュージアムの構想を前進させておられますけれども、埼玉大学を含め、見沼の方々との交流も進みつつあります。このように、今日のフォーラムは、私たちの日常の実践の規模は小さくても、その持つ意味の大事さというものを共有し、また課題をお互いに感知していく場になったと思います。

終わりに、お名前はいちいちあげませんが、登壇してご報告してくださった方々、展示をしてくださった方々、亀工房さん、フィールド・ミュージアムを開いてくださった方々、さらに、フォーラム開催に向けてたくさんの準備をし、運営を担ってくれた学生諸君に、御礼申し上げたいと思います。

そして、今日参加してくださった皆さんに心から、御礼申し上げたいと思います。今日のこのフォーラムが私たちの実践の共通のよりどころになっていくことを願いまして、私の終わりの挨拶にさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

活 動 報 告

2009年度

活動報告

2009（平成21年度）

Ⅰ. 2009年度の活動について〔概況〕

2009年度は、本センター開設から7年目となり、三部門活動がそれぞれに、これまで積み重ねてきた経験の中から着実に新しい一歩を踏み出したことが挙げられるであろう。

フィールド・ミュージアム部門では、現代GPの最終年度としての締めくくりの一年であったが、平成22年3月13日から6月13日まで国立科学博物館で開催された「大哺乳類展」への展示協力がきっかけとなり、都留文科大学の同展への協賛が実現されたこと。また、「フィールド・ミュージアム」構想提唱者である、大田克元学長がお住まいの、埼玉県の「見沼」地域で生まれた、「見沼フィールド・ミュージアム」構想による同地域との交流も新たな一歩であり、さらに「都留市環境副読本」を市内小学校環境教育の教材として発行する事業にも協力できたことである。

発達援助部門でも、特色GPの最終年度として、SAT事業での市内小中学校と大学教員の共同によるケースカンファレンスが具体化に近付いたことや、平成22年度入学生から適用となる、新たな必修教職科目「教職実践演習」のカリキュラムの主軸として運用されること。地域教育相談室においても、継続的に教育委員会主催の研修会や校内研の講師としてスタッフを派遣してきた結果、その研修会の参加者の情報によって相談室の活動が伝わり、その存在や役割がさらに認知されてきていること。地域情報教育においても全11校の内10校のホームページを、これまでのサイトから新システムへの移行や新規に立ち上げ、運用支援が開始されたこと、また、附属小と学生サークル「児童文化研究部」の協力による、影絵劇の上演

に向けての遠隔交流授業が実現したことなどがある。

暮らしと仕事部門では、引き続き、山梨県「魅力メッセンジャー」事業との提携による、「地元学」「地域交流研究Ⅲ」を開講し、また、昨年度から始まった、林業再生研修会や講演会を開催するようになったことなどである。

加えて、昨年、ボランティア活動を通して、学生と地域が交流できる場をという目的で都留市社会福祉協議会との話し合いで開かれた「文大ボランティアひろば」の本格的な活動が始まったことも、特筆すべきことである。

これまでの着実な取り組みや粘り強い働きかけが、ようやく形を成してきたという性格が強く、本センターが、各部門の活動を組織的にサポートし、継続的に動機付けていく機能を持つことの意義を改めて確認したい。

しかしながら、これまでも、センターにおける活動が拡充するにつれ、スタッフ・体制の拡充を求めてきたが、その実現にはこれまで以上に忍耐強い交渉が必要であると痛感する。フィールド・ミュージアム部門からは、急激に増加したニーズに対応するための専任スタッフおよび職員の配置が、発達援助部門のSAT事業および地域教育相談室からも、同様にスタッフの拡充もしくは体制の拡充が求められている。これらへの体制を整える第一歩として、来年度（2010年度）に向けては、フィールド・ミュージアム部門の、北垣憲仁氏が、非常勤講師から、特任准教授として、更に、教育相談室部門では、品田笑子氏が、非常勤講師から特任教授へと新たな任用が決定した。また、セン

ター事務局全体の業務運営担当者として、アルバイト職員1名が配備されることが決まった。

最後に、大学全体の中での、「地域交流研究センター」の位置づけである。特に、センター活動に関わる教員は、まだまだ一部

であると強く感じる。今後は、学内の他分野の教員に対しても参加を促していく必要もあるだろう。地域との交流は、幅広く、奥深く、そして、多くの可能性があると感じている。

(文責・杉本光司(地域交流研究センター長))

II. 各部門の活動

II-1. フィールド・ミュージアム部門

はじめに

2009年度は、フィールド・ミュージアムが地域交流研究センター（以下センターと記す）の一部門として位置づけられ活動を開始し7年目という節目であり、かつ現代GP（環境教育GP）の最終年度であった。この1年間は、これまで部門で展開してきた様々な活動が有機的につながり、本学のフィールド・ミュージアム活動の方向性と意義を再確認できた年であった。またこの間芽生えた新しい取組や交流は、本学のフィールド・ミュージアム活動が、学生教育や地域交流に果たす役割の大きさと可能性を予感させるものであった（例えば、国立科学博物館における展示、富士急行との連携エコツアー、観察会、生物保全活動、ムササビライブカメラ映像の発信など）。

また近年、地域の自然に関する問い合わせや活動の連携の依頼（例えば地域におけるピオトープづくりなど）が増えてきた。こうした依頼やフィールド・ミュージアム部門に寄せられる期待は、センターにとって地域交流を幅広くまた確かなものとしていく契機となると思われるが、現在のところそれらの依頼に十分に対応できる体制にはなっていない。なお、現代GPでは事務局員と研究員がそれぞれ1名おり、問い合わせへの対応や展示制作、観察会の実施など具体的な場面で効率的・効果的に部門の事業を進めることができていた。しかし、現代GP終了後の2010年度はセンター付きのアルバイト職員は配置されたものの、部門の人員体制は依然として貧弱であり、部門

の業務を実質的に担える高い専門性を持ったスタッフの増員が望まれる。フィールド・ミュージアム活動は教育活動であり短期的視点でのみ成果を求めるものではないし、現代GPの採択や国立科学博物館での展示も、これまでの7年間以上にわたる継続の上に成り立っている。大学と地域がフィールド・ミュージアムの思想の下に互いに発展してゆくためにも、部門の活動を長期的視野の下に積み重ねてゆく必要がある。そのためには、常勤のセンター専任スタッフおよびフィールド・ミュージアムに関する専門的スキルを有する職員の配置が必要であろう。

なお、以下の各プログラム名は、センター発足時に提出したフィールド・ミュージアム部門の中期構想にもとづき記した。

(1) 生きものとの親しみを深める森のキャンパスづくりのプログラム

キャンパス内を自然に親しむ入り口と位置づけ、学生教育、研究、市民との交流の場として整えようとするものである。

1) キャンパス内ピオトープ整備

おもに附属図書館ピオトープと一号館裏のピオトープの整備を学生とともに取り組んだ。双方のピオトープとも現代GPにより掲示板を設置できたため、ピオトープの植物や動物の紹介をすることができた。附属図書館ピオトープでは、「チョウやトンボ、鳥など身近な生きものとの親しむ」をテーマにチョウの好む吸蜜植物や食草も育ててい

る。ただ、山梨県産のメダカを育てている池では水漏れがあり、今後、原因を明らかにしながら補修などの処置が必要となってくる。

2) 1号館ビオトープの管理と授業への活用。

年間を通して定期的に草刈や剪定、植樹などを学生とともにこなした。

1号館ビオトープを教育へ活用するために、授業内で生物相の調査や自然観察、解説板や展示の作成をおこない、春・夏・秋・冬の4回にわたり、展示内容を入れ替えた。

3) 『フィールド・キャンパスだより』の発行。

キャンパス内の自然財産の記録と、キャンパス内の自然に親しむきっかけ作りの目的で、2003年から発行している。2006年からはカラー刷りの月刊となり、「教材コラム」「暮らしの知恵」のコーナーも新設し、学内で配布したり、授業で活用している。昨年度も12号発行し、キャンパス内および周辺の生きものの写真を202点、教材コラムを6種類掲載した。また、キャンパス内に設置した自動撮影カメラによる動物たちの写真を紹介する「カメラが写した動物たち」というコーナーを設け、キャンパス周辺に生息する動物たちの紹介もおこなっている。年度末には、これらの写真とコラムを編集し、『キャンパスいきもの図鑑』『先生の卵たちへ贈る教材集：自然を楽しむ40のヒント』として印刷・発行した。これらの教材は、学生たちがキャンパスの自然に親しみながら学習するための有効なツールとして今後も利用されるだろう。

4) 「ムササビの森」でのライブカメラ構想

現代GPによって整備が進み、2009年3月12日にカメラを設置した巣箱をかけ、2009年9月26日にムササビ2頭が入ったのを確認できた。このライブカメラ構想は、「観察者が森を育て、森が観察者を育てる」という考えのもと、まずは身近なムササビを映像で観察し、

記録を蓄積することにより自然への親しみを深めていこうというものである。2010年3月21日には2頭の子どもが産まれたのが確認できた。ただし現在は巣箱にムササビの親子はいない。原因として、ムササビは巣箱を移動することがあること、子どもが巣立つ時期でもあること、などが考えられるがはっきりしない。気になるのは周囲にカラスが非常に多いということである。カラスがムササビを襲うケースも報告されている。ムササビが暮らす森を育て見守るには、周囲のゴミの散乱などにも今後対処する必要があるだろう。

(2) 地域の知恵に学ぶ環境復活のプログラム

十日市場の中屋敷地区において荒廃した果樹園の手入れや田植え、麦作りなど学生が中心となって取り組んできた。地主の渡邊宗男氏の暮らしの知恵を学ぶことや里山の荒廃の問題、イノシシやシカなど大型獣との共存のあり方などフィールド作業を通して実際に学ぶことが目的である。

(3) 学内のほかの団体との交流プログラム

附属図書館展示コーナーにおける展示活動を展開してきた。とくに都留で20年にわたり観察会を開催してきた「うら山観察会」の活動報告の展示などを共同で実施した。またキャンパスや富士急行線沿線の自然や人の暮らしについてのパネルの展示替えをおこなった。

(4) 行政、企業、市民団体との連携プログラム

① 都留市立図書館との共催事業

(2009年10月27日～11月8日、市立図書館閲覧室にて開催)。

「記憶」と「記録」をテーマに、都留市立図書館との共同で開催する企画展も本年度で4回目となった。今回は、

益子亮氏（1915～1999）によって昭和20年代後半から40年代初期にかけて撮影された写真を展示した。これらの写真は益子氏のご家族から提供され、現在、「奥隆行写真コレクション」に続いてデータベースを作成中で「益子亮写真コレクション」として整理、保存する予定である。

②富士急行株式会社との連携事業。

都留文科大学前駅舎をフィールド・ミュージアムの情報発信の拠点とする活動を富士急行株式会社と連携して取り組んできた。2009年度は、駅舎内の展示替えを月に1度、本棚には自然に誘う絵本のほか『フィールド・ノート』、自然ガイドマップなどを置いた。駅職員の奈良氏により、改札にて希望者にガイドマップを配布していただいた。駅と大学をつなぐ試みとして、駅を起点とした市民対象の観察会も2回開催した（4月26日、7月26日）。さらに、富士急行株式会社と連携して「ムササビ観察会」を都留市今宮神社にて11月28日に開催した。

③高尾町通りのイタリアレストラン

「ブオーノ」におけるミニ展示。

9月1日の八朔祭りに合わせ地域の過去に撮影された写真展を開催した。この展示により益子亮氏の写真コレクションを見出すことができた。

④郷土研究会会員との「野外遊びの記憶を語る会」。

毎月1回、ミュージアム都留において郷土研究会会員と地域の記憶を記録する目的で開催している。2009年度は「奥隆行写真コレクション」の活用の一環として、同コレクションにある遊びに関する写真をもとに記憶の聞き取りをおこなった。

⑤見沼フィールド・ミュージアムとの交流。

本学元学長の大田堯氏が構想されている埼玉県浦和市を中心とした見沼フィールド・ミュージアムとの交流をおこなった。2009年5月13日、14日に

は大田堯氏が都留を訪問され本学のフィールド・ミュージアムをご案内した。さらに2010年3月4日には、大田堯氏宅にて、都留文科大学のフィールド・ミュージアムの取組や経緯について報告し、見沼フィールド・ミュージアム関係者との交流をした。

⑥「三の側ピオトープ」の整備。

都留市環境創造室と都留市環境保全市民会議とともに都留文科大学前駅に隣接する土地にピオトープを整備した。このピオトープは自然と親しむ入り口と位置づけ、本学附属図書館ピオトープとネットワークをつくる目的で植物の世話や草刈りなどの作業を継続した。

⑦「シオジ森の学校」との連携事業。

昨年同様、プログラム作成委員と学生ボランティアスタッフとして教員と学生が参加した。森を歩こう、森を育てよう、森の生活を楽しもう、つみき広場、オープンキャンパス等などの講座に延べ21人の学生が参加した。その中でも、森の生活を楽しもう（キャンプ）は本学が主体となっておこなっているもので、今年度で3回目の実施となった。これは、子どもたちとの1泊2日のキャンプを学生が企画・準備・実施するもので、都留市鹿留川大沢で8月8・9日におこなわれた。キャンプの内容は、草木染、川遊び、ムササビや野ネズミの観察など。参加者は学生13人、小学生19人、森の学校スタッフ4人、大学教員2人。学生にとっては大変苦勞の多い活動であったが、地域の自然や地域住民、子どもたちとふれ合いながら、自然と人間との関係について自ら考える貴重な経験になっている。

(5) 資料の整理と保存、公開のプログラム

「オープンアーカイブス」。この事業は現代GPのプロジェクトの一環としても取り組み、昨年度『奥隆行写真コレクション』の

デジタル化およびデータベースの作業を終えた。本年度はあらたに益子亮氏のご家族から提供していただいた写真コレクションのデータベース化作業に取り組んだ。また都留市東桂小学校教員の小口尚良氏とも連携して市内の小中学校の理科教材として活用できる資料のデータベース化作業にも取り組んだ。これらの作業には市内の教員や市民の協力が欠かせない。今後の課題として、こうした協力者との連携がさらに効果的に進むよう地域交流研究センターの施設を共同で使用できる「研究員」などの制度も検討する必要があると思われる。

(6) 学生・教員・市民の参加のプログラム

①機関誌『フィールド・ノート』の発行。

現代GPの取組の一環として位置づけられたことにより、冊子を印刷所で発行できる体制が整い、年5回、各号500部発行することができた(60号～64号)。定期購読を希望する読者も増え2009年度で120名となった。またこの編集作業には学科、学年の枠をこえた幅広い参加があり、編集に参加する学生は2009年度、18名であった。本誌はインターネットでも閲覧できる。市内にも市立図書館や喫茶店、富士急行都留文科大学前駅にも置かれ、読者からの励ましや感想も寄せられている。本年度は発行7年目となり、学生と市民とのささやかな交流が冊子編集を通して生まれているのも特徴であろう。また本学のフィールド・ミュージアム活動に学生が参加する受け皿としても機能している。地域の生きた資料を記録することを目的に生まれた冊子は、学生が主体的に取り組むことによりフィールド・ミュージアムの共感の輪をゆるやかに広げる役割も果たしている。

②菅野川・鹿留川の保全活動。

2008年度より、全国的にも絶滅が危惧されているカジカとカワラナデシコの保全のための活動を学生とともにこなっている2008年度の調査の結果、

都留市内における両種の生育地は昔の分布域に比べ大幅に減少していること、個体数減少の要因としては湧水の減少や河原の攪乱頻度の減少などによる生息条件の悪化が挙げられた。2009年度の調査では、湧水に着目して、湧水のどんな特性がカジカの生息に関係しているのかを明らかにすることを目的に、主に水温・水質と、カジカの個体数・成長との関係について研究をおこなった。その結果、カジカの生存・成長のどちらも、湧水のもたらす温度環境と深い関係があることがわかり、湧水の保全と河岸環境の保全の両方がカジカの生息に大切であることがわかってきた。カワラナデシコに関しては、都留市内で唯一河原に存続している個体群である鹿留川自生地を調査地とし、カワラナデシコの生活史と生態について基本情報を得るための研究をおこなった。その結果、鹿留川の自生地には約700個体のカワラナデシコが存在し、種子も127個/m²と十分な量が生産されているものの、散布された種子の99.4%が発芽～定着の過程で死亡していることが明らかになった。死亡率が最も高いのが、実生の定着段階で、一度定着すると死亡率は低いことも明らかになった。鹿留川個体群では種子が十分に生産されているが、生産された種子のほとんどが、個体群の個体数の増加に寄与していないことから、自然状態では死亡するはずの種子を一部回収・人工栽培し、ある程度成長してから近隣の草地に移植することで、生息地を拡大させることも本種の保全には有効であることが示唆された。

また、2008～2009年にかけて、鹿留川川づくり検討会へ本学教員がアドバイザーとして参加し、カワラナデシコの保全のための河川管理手法や、住民との協働のための方策の提言、自然に親しむ川づくりのための具体案の提言をおこなった。上記川づくり検討会での提言を受けて、現所在地元小学校と

の共同事業が検討されている。具体的には、カワラナデシコの種子を小学校に提供し、子供たちにカワラナデシコの里親になってもらい、ある程度大きくなったところで、河原に移植する。この里親制度の中で、子供たちに川の生態系や、生物多様性について学んでもらう機会を提供する、というものである。実施は来年度以降になるが、教員志望の本学の学生にとって、小学校現場で先生方や子供たちとともに生きものの保全について実践的に学べる環境教育の場として多いに期待できるだろう。

(7) カリキュラムとの連携

「地域交流研究VI」の授業を担当。『フィールド・ノート』での編集の経験を授業で活かし、インタビューを中心とした記事を冊子として編集、発行した。この授業では、地域のかたがたへのインタビューを自ら記事にし、冊子として発行する編集作業が地域交流にどのような役割を果たしているかを考察することを目的として取り組んだ。本年度の受講者数は22名で毎年、学科、学年の枠をこえた授業への参加がある。

(8) その他

第6回地域交流研究フォーラムの開催

2010年2月20日(土)に開催された第6回地域交流研究フォーラムの企画・運営をおこなった。2009年度は、現代GP(環境教育GP)の活動報告とその担い手たちと市民との交流を目的に、「人と自然をつなぐ、人と人をつなぐ 生きいきとした新しい地域社会の創造に向けて」というテーマで開催した。

2010年度に取り組む予定の事業についてはおおむね2009年度に取り組んだ事業を継続するが、以下に1) 2009年度より変更する事業内容、2) 新たに取り組む予定の事業などを記す。なおこれらの事業をおこなうにあたり、担当者の負担にならないよう

関係者と協議のうえ慎重に進めていきたい。

1) 2009年度より変更する事業

①「ムササビの森ライブカメラ事業」。

情報センターとの連携により運営する。またムササビの様子に応じて観察会などを開催する。

②機関誌『フィールド・ノート』の発行。

本年度は年4回、65号から68号を発行する。発行部数は各号400部とする。

③駅を起点とした観察会。

去年は4月および7月と2度開催したが、本年度は国立科学博物館関連の事業があるため10月に開催する予定である。

2) 新たに取り組む予定の事業

①公民館との交流。

7月2日、青少年育成会夏期研修会に参加

②富士急行株式会社運営のホームページへの情報提供

③谷村第一小学校と『フィールド・ノート』編集に参加する学生との交流

④国立科学博物館におけるギャラリートークおよび学生参加による来館者との交流

⑤国立科学博物館に出展した資料を用いた移動博物館の開催

⑥「リスをキャンパスに呼ぶ会」の活動を始める

(キャンパスにクルミの木の苗を植え、やがてその実をリスが食べに来るようにし、キャンパス内でリスとの出会いを楽しめるようにしていく。そして、学生、教員、職員、市民など広く関心をもって見守ることとする)

⑦「ムリネモとの出会いの場づくり」

(「ムリネモ」とはムササビ、リス、ネズミ、モグラの頭文字をとって表記したもので本物との出会いを大切にするフィールド・ミュージアムを象徴する哺乳類である。すでにムササビはキャンパス内に生息が確認され、リスに

については出会いの場づくりに取りかかっている。ほかに野ネズミ、モグラ類との出会いの場を整備することで、広く自然に心を向ける契機とし、共感の

輪を広げたい)
(文責：坂田有紀子／畑 潤／今泉吉晴／北垣憲仁)

II-2. 発達援助部門

II-2-1. 学生アシスタント・ティチャー (SAT) 配置事業

1. 地域に根づいたSAT

平成19年度から3年間行ってきた特色GP「地域を基盤とする教師養成教育プログラムの開発」は最終年度を迎えています。この取り組みは、都留市教育委員会の協力の下、市内小中学校に対して学生アシスタント・ティチャー (SAT) を派遣し、学習支援、「学力不振」「不登校傾向」「障害」等による困難をもつ子どもへの個別的な支援を学生に体験させることによって、重層的な「子ども体験」にもとづく実践的指導力を持つ教員養成の深化・発展を図ることを目的とするものです。

これらの運営にあたっては都留市SAT運営委員会を設けて、都留市教育委員会・大学・小中学校の三者が協力して行なってきましたが、このような学校間連携・ネットワークの構築も地域を基盤とする新たな教師養成教育の柱として位置づけてきました。

以上の取り組みで、SATが市内全域に広く認知され、教育関係者だけでなく、保護者・住民などにも高い評価を受けるようになってきましたし、地域のなかで大学と学生への親しみを強める効果をもたらせたように思います。さらにその波及効果として、富士東部地域や南都留郡および県内全域でのSATの認知と同様な試みの模索も始まってきました。

2. SATの拡充

プログラム開始当初、市内各小中学校でのSATの活動は、小中学校の放課後および長期休業中における小グループでの学習支援を行うもの (Aタイプ) と、学力不振、不

登校傾向、多動、障害等による困難を持つ子どもを対象に個別的な支援や当該児童生徒のいる学級での補助的な活動を行う (現在のCタイプ) の二つのタイプのものを想定していました。

さらに、昨年からは、授業中を含めた子どもへの学習支援をおこないつつ、学習指導の力量向上をめざすBタイプの設置を行っています。このことにより、今後重視されることが予想されるティーム・ティーチングによる教師間連携の実習を行うとともに、Cタイプの活動をより本来的な目的に近づけることができました。

3. 実践と理論の往還をめざして

この3年間で、とりわけ重視してきたのは、学生の「子ども体験」の深化をはかるために、ポートフォリオとしての「活動の記録」の蓄積をおこなってきたことです。またこれらの記録を素材としながら、大学での授業の「学校参加」「臨床教育学フィールドワーク」を展開してきました。SAT活動と並行して行ってきた大学での授業は、A/Bタイプに対応する「学校参加」、Cタイプに対応する「臨床教育学フィールドワーク」が行われています。このことを通じて学生が自らの「子ども体験」「学校の現実」を反省的に理解する機会を保障できているように思います。

すでに述べたように、この活動の特色は、教育実習とは異なる観点での実地体験にあり、フォーマルな関わり方ではなく、また授業研究中心というよりは、日常の子どもの姿に触れるという意味での別な角度からの「子ども体験」ができているように思わ

れます。

また、授業のなかでは、自らの体験を理論的に検討することを意識しており、活動を通しての「困り感」「うまくいかない」「学校の難しさ、忙しさ」などが出され、すぐには解決できないが、考えてみることの重要性を学生が理解し始めています。また、学校ごとの違いの交流が行われ、先進的な事例を自分の担当している子どもとの関係のなかで実現できるかどうかの検討も行われるようになってきたことも重要なことだと考えています。

4. 学校でのSATの活動のようす

次に実際の活動場面である学校のなかで、学生たちがSATの活動を通してどのようなことを感じ、また学んできたのか、また、その活動を通して学校にどのような影響をもたらしているのかについて、毎年行っている都留市SAT運営委員会での研究資料「2008年度の成果と課題」よりいくつかの学校の報告を抜き出しておきます（2009年度分については現時点で未確定のため）。

たとえば都留文科大学附属小学校では、SATの学生たちについて、次のように評価してくれています。

「前期は主に、授業のT2として児童の中に入って個別支援の必要な児童に指導に入ってもらった。そのことでつまづきをすぐに解消できて学習活動がスムーズにできるようになった子もいた。着席しての学習が苦手な児童にとっては1対1の対応が可能になり、実態に合った指導ができた場面も数多く見られた。若くて親しみやすいお姉さん先生・お兄さん先生といった感覚で関係が作られ、和やかな雰囲気の中で学習が進められた陽に思える。さらに後期には、クラスを二つのグループに分けて、担任とSAT学生が別の授業を展開する形態をとった。少人数になったことやすぐに評価してもらえ、教材が興味を引く物であったことなどから楽しんで授業に参加する児童の

姿が見られた。いずれもSAT学生の時間が許す限り、学校にいてくれ、休み時間には一緒に遊んだり掃除も共に作業してくれたり、新鮮な空気が学校に入り込み児童の意欲を引き立ててくれたように感じられた」。

一方、宝小学校でSATを体験した学生からは

「1学期からSATでお世話になり、授業中の子どもたちの様子から、本当にたくさんのお話を教えてもらいました。週1回ではありましたが、子どもたちのいろいろな面を見ることができたと思います。授業中だけでなく、休み時間や給食、掃除等、本当に一日中子どもたちの様子を見て指導されている先生方の姿から、現場でしか学べないことをたくさん教えていただきました。大学での勉強も勿論大事ですが、実際に子どもたちとふれあわなければ分からないことがたくさんありました。まだまだ勉強不足ですが、SATを通して少しは成長できたと思います」。「縦割り班活動や運動会の応援・支援、行間の活動等、教育実習では経験できない、学校の年中行事ともいえる様々な活動に参加できた。そこに関わる先生方の指導や子どもたちの様子を知るだけでなく、一年間を通して同じ子どもたちに関わったので、関係も深まり、コミュニケーションをはかることができた」。などの感想も寄せられています。

いずれにしても、ただ活動をするだけでなく、そこでの体験をどのように理論的な問題と結びあわせ、自分なりの教師像を描いていけるのが、今後の課題となっています。

（文責：佐藤 隆）

II-2-2. 地域教育相談室

(1) 活動の概要

地域教育相談室の活動は本年度で7年目、現在の担当者になってからは3年目である。公開講座の開催はもちろんであるが、この間継続的に教育委員会主催の研修会や校内研の講師としてスタッフを派遣してきた結果、その研修会の参加者の情報によって相談室の活動が伝わり、その存在や役割がさらに認知されてきている。本年度行った活動は、大きく分けて以下の通りである。

- ①来室、訪問、電話・ファックス・電子メール等による相談活動
- ②育委員会等が主催する教職員研修への講師派遣やサポート
- ③校内研究等への講師派遣及びサポート

④公開教育講座等の研修会の実施

- ⑤その他（地域の教育関連団体からの依頼への対応）

(2) 相談、研修依頼件数と種別

平成21年度に、地域教育相談室で受けた相談、講師依頼の概要については以下の通りである。①の「その他の事務的対応」とは、講師派遣や研修会のサポート活動に必要な事務的な対応である。②は研修会の内容や進め方についてのアドバイスと事務処理を分けてカウントすることが難しいため、その両方をあわせて集計した。①～④の相談件数をさらに集計した総数を⑤にまとめた

①電話&FAXによる相談活動の概要（担当者が携帯電話で行った対応は除く）

相談内容	地域別相談件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
児童生徒の問題行動についての対応	0		0	0	0
校内研究・調査・研究の進め方や内容についてのコンサルテーション	2		23	3	33
その他の事務的対応	22	2	85	46	181
合計	24	3	108	49	214

②メールによる相談活動及び事務処理の概要（応答を1回とカウント）

相談内容	地域別相談件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
研修会の進め方及び事務処理	8	41	164	178	391
学年経営の相談	0	0	38	0	38
合計	8	41	202	178	429

③来室による相談活動の概要

相談内容	地域別相談件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
研修会及び会議の進め方・その他	1	0	0	0	1
合計	1	0	0	0	1

④訪問による相談活動（研修会講師）の概要

相談内容	地域別訪問件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
Q-Uによる学級集団の理解と対応のポイント	3	2	15	14	34
Q-Uの結果に基づく学級コンサルテーション	0	8	5	26	39
学級集団育成の具体的な方法についての理論と体験	3	1	18	11	33
その他	0	2	8	0	10
合計	6	13	46	51	116

⑤形態別による相談活動の概要

形態	地域別相談件数				合計
	北麓・東部	県内	県外関東圏	県外その他	
電話&FAX	24	33	108	49	214
メール	8	41	202	178	429
来室	1	0	0	0	1
訪問	6	13	46	51	116
合計	39	87	356	278	760

(3) 教育関連講座・研修会の実施

地域教育相談室の公開教育講座として、今年度は以下の3講座を開催した。

1) 第1回公開講座

①日時と内容：2009年6月15日（土）

I部 10：30～12：30

「Q-Uを活用した学級集団の理解と対応」

講師：品田笑子（都留文科大学地域交流研究センター非常勤講師）

II部 13：30～16：00

「Q-Uの結果をもとにした学級経営の検討の仕方～K-13法の演習～」

講師：武蔵由佳（都留文科大学非常勤講師）

浅川早苗（都留市立禾生第一小学校教諭）

②場所：都留文科大学1号館 1301教室・1302教室

③概要：I部では、「楽しい学校生活を送るためのアンケート：Q-U」について、実施の仕方、留意点、結果の解釈と対

応のポイントについての講義を行った。II部では、実際のQ-Uアンケートの結果をもとにグループで学級の状態を分析し、問題点や級状態の改善のための具体的な対応策について検討する「K-13法」の手順を、体験を通して学んだ。

④参加者：山梨県内外の小中学校、高等学校、教員志望の学生など、32名が参加した。チラシよりインターネットや友人・知人からの情報がきっかけで参加した人が多かった。

また、インターネットから情報を得た人の中には遠く三重県から参加した人が2名いた。

⑤参加者の感想から：まず、Q-Uをとっても、その結果をどのように読み取るか、具体的な教育実践にどう結びつけるか分からなかった人にとってこの講座が役に立ったと思われる。また、学生にとっては、現職の先生との交流を通して、教師の仕事や学級や児童生徒について知る機会になったようである。

＜参考＞ 参加者の感想（抜粋）

- ・何度受講してもよい学びとなります。私も早く先生方といっしょに事例検討ができるようにならなければと思います。（スクールカウンセラー）
- ・Q-Uの結果表の見方がよく分からない状態での参加でしたが、午前中の講座でとても分かりやすく教えていただいたので、見方がずいぶん変わりました。（高等学校教諭）
- ・Q-Uは以前にも河村先生や品田先生の講演を聞きましたが、アセスメントまでは経験したことがなかったのでとても勉強になりました。何よりもK-13法を知ることができてよかったです。
- ・一日参加させていただきました。大変わかりやすく勉強になりました。夏の校内研究で同僚に還元していきたいと思います。（中学校教諭）
- ・非常にわかりやすくとても理解することができました。本を読むだけではどこか足りないことを吸収できたようです。具体的な事例をもとにその具体的な解決方法についてたくさん聞くことができ大変うれしく思います。（小学校教諭）
- ・何度かお話を聞かせていただいています。改めて自分の学級を振り返ることができ、今後の参考になりました。Q-Uをとってもその後どうしていいか分からず生かし切れないことが多いので、子どものためにも具体的に何か手を打っていかねばならないなと思いました。（小学校教諭）
- ・初めてQ-Uについて学びました。まだ、すべてを知ったわけではありませんが、担任の先生にとっては学級が客観的に分かる点がありがたいと思います。午後からは事例研究でしたが、多くの現職の先生方と話ができて学ぶことが多かったです。学級に対する見方が人によって違うところが刺激となりました。また、Q-Uだけに頼らず、様々な視点で学級を見ていくことが大切だと思いました。（都留文科大学学生）

2) 第2回公開講座

①日時と内容：2009年11月5日（木）

I部 18：15～18：45

「学級づくりに活用するショートエクササイズ」

講師：品田笑子（都留文科大学地域交流研究センター非常勤講師）

武蔵由佳（都留文科大学非常勤講師）

II部 19：00～20：30

「現代の子ども達の実態と非行問題」

講師：河村茂雄（早稲田大学教育・総合科学学術院教授）

②場所：都留文科大学2号館 2102教室 参加者：50名

③概要：I部では、学級づくりに使えるショートエクササイズについて体験を通して学んだ。II部では、社会の変化に伴う子どもたちの変化と非行の変化、現代の子ども達の健全育成のためには学校教育ではどんな対応が求められているか、を中心にお話を聞いた。

④参加者：この公開講座では、山梨県内外の小中学校、高等学校、養護学校、教員志望の学生などを中心に計50名が参加した。長野県から参加した3名は定期的に本学のホームページをチェックし毎回参加している。同様にホームページの情報から参加したOBもいた。残念だったのは、新型インフルエンザの流行と重なり、学級閉鎖、学校閉鎖、外出自粛などの措置で近隣からの参加者が少なかったことである。当日、参加をキャンセルした人もいた。

⑤参加者の感想から：II部の内容は、現職の教師にとっては非行への具体的な対応を考えるための参考になったという感想が多かった。また、参加した学生にとっては教師として実際に子どもに接する前の心の準備として役に立ったように思う。I部の内容は、実際に子どもたちに即実施できるものでありがたかったという感想とともに、自分たち自身が楽しめてよかったという感想が多かった。

＜参考＞ 参加者の感想（抜粋）

- ・非行問題、子どもへの対応は、自分自身でもどうしたらよいか毎日悩んでいることなので、河村先生のお話はとても興味深かったです。時間がなくて残念でした。もっと具体的に対応について聞きたかったです。可能であれば、この次は続きを聞きたいです。(40代教員)
- ・90分間聞き入ってしまいました。怒っても聞かないのには理由があるということが分かりました。先生のお話を参考に対応を考えていきたいと思います。(30代教員)
- ・ある児童を思い浮かべながら講演を聴かせて頂きました。対応に頭を悩ませていたので、この講演は本当にはっとさせられるものでした。明日からの対応に役立てたいと思います。(20代教員)
- ・久しぶりに河村先生のお話を聞いて、しっかりしたデータや理論があるからこそ技術が生きてくるのだと改めて感じました。学校で子どもを目の前にしていると、その場の対応ばかりに目がいてしまい、先に続くような対応がなかなかできません。しっかり理論に立ち戻り、アセスメントの重要性を感じました。今日はありがとうございました。(20代教員)
- ・I部のエクササイズはとても楽しかったです。いつも最初にグループワークがあり心が和みうれしいです。(20代教員)
- ・大変に参考になりました。時間が短かったです。早くこの講座のあることを知りたかったです。どのようなところをみれば情報が得られるのか知りたいと思います。(50代教育関係者)
- ・学級づくりに活用するショートエクササイズは本当に楽しく、あっという間に時間が経ってしまいました。ぜひ、学校の現場で活用したい。II部の河村先生のお話は私の抱えている不安を取り除いてくれるものだった。まだ実際の現場というものがどういふものなのか分からないけれど、自分なりにきちんと現状や実態を見極める力を身に付け、それに応じた対応ができるように多くの経験を積んでいけたらと思う。(都留文科大学学生)
- ・あまり知らない言葉ばかりで言葉の説明を友達にってもらうような状態でしたが、就職する前に知れて良かったと思うことがたくさんありました。ショートエクササイズは大人の私たちが試してみても面白いものだったので、子どもは本当に喜ぶのではないかと思います。II部は難しい話をできるだけ分かりやすく話してもらいありがたかったです。(都留文科大学学生)
- ・来年から教員としてがんばっていこうと思っています。まだ一度も長期にわたって子どもたちと関わっていない分不安も多かったのですが、この講座を聴いて経験は少ないけれど非行に走る子どもたちをこちらに取り戻せるよう努力していきたいと思いました。来年もう一度試験を受け、本採用となったときに、新卒の先生よりそういったところがキラリと光ることができるように、そのヒントをもらった90分でした。(都留文科大学学生)

3) 第3回公開講座

①日時と内容：2010年3月4日（木）

18：15～19：45

「学級開きに活用するエンカウンター講座～教師と子ども、子ども同士の絆を育てる～」

講師：品田笑子（都留文科大学地域交流研究センター非常勤講師）

武蔵由佳（都留文科大学非常勤講師）

箭本佳己（都留文科大学学生相談室カウンセラー）

②場所：都留文科大学1号館 1215教室

③概要：学級開きで使える構成的グループエンカウターのエクササイズを中心に体験を通して学んだ。

④参加者：教師を目指す都留文科大学学生・大学院生16名、現職教員4名、ジョブカフェスタッフ1名の計21名が参加した。現職教員の中には本学昭和58年度卒業生がホームページで講座を知り京都から参加した方が含まれている。学生の参加が昨年度より少なかったのは時期的に遅かったことが原因と考えられる。

⑤参加者の感想から：新学期から教壇に立つ学生は、学級開きに不安を抱えていることが多く、その解消にこの講座が役に立ったのではないかと考える。特に自分が子どもになったつもりで実際にエクササイズを体験したことが効果的であったように思う。

<参考> 参加者の感想（抜粋）

- ・実践的な内容でよく理解できました。ひきこもり、ニートの若者に対する関係構築の第一歩にどのエクササイズが有効か十分検討しながら導入していきたいと思います。（60代キャリアカウンセラー）
- ・体験が多く取り入れられていてとても分かりやすい内容でした。また、品田先生が発達段階に応じた指導内容を細かく教えてくれたので、即実践可能な内容だと思いました。とても楽しい時間を過ごせました。（20代教員）
- ・短時間で多くの活動ができてとても有益でした。勤務が高校なので工夫しながら活用したいと思います。（30代教員）
- ・4月から教員になりますが、スタートにすごく不安を感じていました。今回、学級開きに活用できるエンカウンターを少しですが体験でき、良かったと思います。（都留文科大学生）
- ・4月から教壇に立つので（特に学級開きについて）不安だったのですが、今日の講座を受けてたくさんのヒントを得ることができました。自分なりに学級の様子を見て、これからいろいろなエクササイズ等を学級活動や授業の中に取り入れていきたいです。（都留文科大学生）
- ・4月から広島で教員になります。今から最初の3日間でどのような活動をしていくのか、どうやって子どもたちと交流を深めていくのかを不安に思っていました。今回の講座に参加し、たくさんのヒントを得ることができました。また、実際に子どもたちにやらせたらどのような反応を示すのか見たいと思いました。（都留文科大学生）
- ・エンカウンターについての講座は今回で2回目だったのですが、あっと言う間に時間が経っていたので、子どもたちにもうまくできたらきっと人間関係がうまくいくようになり、教師と子どもの関係もよくなるだろうと確信しました。4月から千葉市の小学校で勤務することになっているので、自分の不安を取り除いて、信頼関係を築いていけるように、この経験を生かしたいと思います。本当に楽しく、興味がわき、不安が少しなくなりました。（都留文科大学生）
- ・参加して、自分自身が体験することによって、子どもの立場に立てて良かったです。楽しく活動することができました。アイデアがたくさんあって、「こんなことをしたら子どもたち喜ぶだろうな。」と思うものばかりでした。4月から小学校の先生と言うことで不安なことばかりですが、品田先生のアイデアを取り入れさせて頂き、楽しい学級経営を目指します。

（4）山梨県内の教育委員会及びその他の教育関係団体との連携

て研修、ソーシャルスキル教育の研修を担当した。

1) 南都留教育相談ネットワーク会議

地域の教育、福祉関係の担当者が年3回集まり、連携を目標に情報交換をしたり、活動を紹介し合ったりしている。3回目の会議では、地域教育相談室の活動やQ-Uの結果をもとにした学級コンサルテーションの事例を紹介した。

2) 富士吉田市教育委員会

「富士吉田市問題を抱える子ども等の自立支援事業」の運営協議会の代表として協力し、年2回の会議では座長を務めた。また、富士吉田市教育研修所の依頼を受け、Q-Uの基礎講座と事例研究の仕方につい

3) 南アルプス市教育委員会

5月にQ-Uの基礎講座の一斉研修の講師を10月～11月にかけては研究指定校5校のQ-Uの結果をもとにした授業研究の助言者を務めた。

4) 山梨県総合教育センター

夏季休業中のQ-U基礎講座とK-13法による事例研究の仕方についての講座、構成的グループエンカウンター講座を担当した。

(5) 講師派遣先 ※午前と午後で内容が異なる場合は午前の内容で整理した。

1) Q-Uによる学級集団の理解と対応の基礎講座及び事例研究の仕方の研修会

*はQ-Uの各クラスの結果についての解説も含む

山梨県内

南アルプス市教育委員会、富士吉田市教育委員会（2回）、笛吹市立八千代小学校、山梨県総合教育センター（午前：基礎講座、午後：事例研究の仕方）、甲府市教育委員会（2回）

山梨県外

郡山市教育センター、日立市教育委員会、*厚木市立依知南小学校、*杉並区立西田小学校、那須塩原市教育委員会（3回）、鳥取県教育センター（午前：基礎講座、午後：事例研究の仕方）、高知市教育委員会、長野県教育センター（午前：基礎講座、午後：事例研究の仕方）、茨城県教育相談研修会（2回）、綾瀬市教育研究所（午前：基礎講座、午後：事例研の仕方）、大和市教育研究所（午前・午後：事例研究）、練馬区教育センター、*千葉県市教育センター（午前・午後：事例研究）、真岡市教育委員会、*厚木市立愛甲小学校、岡山県教育センター（午前：基礎講座、午後：事例研究の仕方）、*厚木市立依知小学校、*杉並区立阿佐ヶ谷中学校、川崎市立生田小学校、足柄上郡中井町立井ノ口小学校、*鈴鹿市立鈴峰中学校、練馬区立春日小学校、国立東京工業高等専門学校

2) Q-Uの結果に基づく学級コンサルテーション及びスーパーバイズ

山梨県内

南アルプス市立白根御勅使中学校（1学級）

山梨県外

横浜市立峯小学校（年5回：12学級×2）、郡山市教育センター（年2回：15学級×2）、那須塩原市立厚崎中学校（3学級）、尾鷲市立尾鷲中学校（年3回：15学級×3）、伊勢市立五十鈴中学校：15学級×1）、那須塩原市教育委員会（4学級×2、1年間のまとめ）、いなべ市立員弁西小学校（1学級）、伊勢市立神社小学校（年2回：4学級×2）、聖籠町立山倉小学校（12学級）、名張市立名張中学校（6学級）、横浜市立並木第一小学校（12学級）、いなべ市立山郷小学校（2学級）、荻田町教育委員会（年2回：4学級×2）、荒川区立第七中学校（1学級）

3) Q-Uの結果に基づいた授業研究の助言者

山梨県内

南アルプス市立若草中学校、南アルプス市立白根飯野小学校、南アルプス市立八田中学校（2回）、南アルプス市立豊小学校、南アルプス市立若草小学校、上野原市立西中学校

山梨県外

聖籠町立聖籠中学校、那須塩原市教育委員会（3回）、いなべ市教育委員会（4回）

4) 特別支援教育を推進する学級経営

山梨県内 なし

山梨県外

練馬区立石神井南中学校、練馬区立南が丘中学校、練馬区立練馬小学校、練馬区立豊玉小学校、矢板市立豊田小学校

5) 構成的グループエンカウンター及びソーシャルスキル教育

山梨県内

山梨県総合教育センター（1日）、忍野村立忍野小学校、富士吉田市教育委員会、山梨県立上野原高等学校、山梨県立甲府城西高等学校

山梨県外

葛飾区総合教育センター（4回）、練馬区立大泉北中学校（2回）、渋谷区教育センター（1日）、都立荻窪高等学校、鎌倉市立御成小学校、いなべ市教育委員会（2回）、那須塩原市教育委員会（2回）、目黒区教育センター、小浜市教育委員会、金沢市教育委員会、東京都教育相談研修会、高知県心の教育センター（2日）、足立区立梅島第二小学校、足立区立弥生小学校、聖籠町立聖籠中学校、足立区教育相談部、江戸川区立宇喜多小学校、岡山市立岡北中学校、伊丹市教育委員会、東京学校保健研究会、安中市立松井田東中学校、練馬区立春日小学校、世田谷区立千歳中学校

6) その他

都立荻窪高等学校（学校適応プログラム検討）
いなべ市教育委員会（校長会）

(6) 活動のまとめと今後の課題

昨年度に引き続き、相談室への依頼が増加し、その役割や存在が広く認識されて来ていることが窺える。本年度も相談室の活動の中心となったのは研修会などへの講師派遣である。単発の研修会ではなく、シリーズ化した数回の研修会の依頼も増えた。

また、高等学校から不適應の生徒の援助方法として構成的グループエンカウンターを導入したいのでその研修や講演をしてほしいという依頼があり、今後の展開に期待している。

校内研修終了後に学級経営の個別相談を受けることが多かった。来室による相談が減ったことから多忙な教師が相談しにくくなっている状況が伺える。また、OBからのサポート依頼も少しずつ増えてきている。

授業研究とQ-Uの結果を関連させた取り組みが昨年度は南アルプス市だけであったが本年度は上野原市、那須塩原市などに広がった。卒業生に対するQ-U結果の分析とアドバイスは継続して行っている。

今年度の結果からも、電話、FAX、メールによる相談は事務的な内容や研修会の内容や進め方、校内研究の方向性に対するアドバイスなどに限定される傾向が強まっている。事例研究や学級経営コンサルテーションなどはほとんどが訪問しての対応であった。

公開講座では、新型インフルエンザ流行の影響を受けた講座もあったが、全体的には情報が行き渡らず参加者が少なかった。北麓・東部地域には学校に直接ダイレクトメールを送ったが、そこからの参加者は多くなかった。ニーズの把握、情報の提供の

仕方はもちろん、年2回の公開講演会による地域貢献のあり方を検討していく必要性を感じている。

<H22年度の活動計画>

1. 研修会の企画・運営

- ・教師カススキルアップ講座をシリーズ化し、参加者の希望を聞きながらテーマを設定し、年4～5回実施する。

2. 講演・実技研修会などによる学校教育サポート

- ・山梨県総合教育センター、南アルプス市教育委員会、富士吉田市教育委員会主催の研修会への講師派遣
- ・校内研修会への講師派遣

3. 地域の活動への協力

- ・南都留教育相談ネットワーク会議への参加
- ・富士吉田市「問題を抱える子ども等の自立支援事業」連絡協議会への参加

4. 相談活動

- ・教師の学級経営のコンサルテーション及びスーパーバイズ
- ・教師・教育関係者個人の臨床的問題への対応
- ・卒業生の学級経営サポート
- ・SCの活動へのスーパーバイズ

5. その他

- ・都立荻窪高等学校との学校適応援助プログラムの共同研究
- ・横浜市スクールスーパーバイザー
- ・那須塩原市教育委員会との連携
- ・三重県教育委員会との連携
- ・郡山市教育委員会との連携

(文責：品田 笑子)

II-2-3. 地域情報教育

1. 活動指針

2007年度(平成19年度)から地域交流研究センターにおける活動の柱の一つである「発達援助部門」の中に、新しい分野として「地域情報教育」に対する取り組みが取り込ま

れたことにより、私たちの活動において大きな礎を築くことができた。

この取り組みは、本学情報センターの開設以来、地域の小中学校への情報教育支援を目標に、平成10年にインターネット接続のアクセスポイントとして開放した事を機に

今日に至っている。今年度は地域交流研究センター予算より、遠隔授業用の機器や印刷製本に対しての支援を受け、新たに都留文科大学附属小学校への機器設置をすることができ、既に設置済みである、都留第二中学校、東桂小学校、宝小学校も含め、遠隔授業実施可能校として4拠点を設けることができた。

私たちが目指す「地域情報教育」における活動の指針として、次の三つを掲げる。これらの活動に対しては、情報センタースタッフ、「情報メディア演習Ⅰ」・「情報メディア演習Ⅱ」の受講生との協同事業として取り組んでいる。

- (1) 小中学校への情報リテラシー・ネットワーク・セキュリティ教育支援
 - ・都留市情報教育研究委員会（教育委員会、全小中学校情報教育担当者）への参加
 - ・ICTを利用した学校業務に関する研修会の開催
 - ・それぞれの学校の情報教育への支援
- (2) 遠隔授業の実施と支援
 - ・大学と小中学校間での遠隔授業の実施
 - ・小中学校間の交流プログラムの支援
 - ・e-learningへの取組み
- (3) ホームページ作成と運用における支援
 - ・小中学校の公式ホームページの作成支援
 - ・定期的な更新に関わる運用支援
 - ・小中学校ホームページ作成担当者への研修支援

2. 平成21年度の活動

- ☆平成21年5月26日（火）
都留市教育センター会議にて『“Plone”によるWebページの作成について』説明
- ☆平成21年7月14日
ホームページ作成についての個別説明
旭小学校（宮下先生）
- ☆平成21年7月28日
ホームページ作成についての個別説明
東桂小学校（校長先生、村松先生）

- ☆平成21年10月13日（火）
小中学校ホームページ作成ソフト“Plone”
第1回講習会を担当学生向けに開催
- ☆平成21年10月14日
ホームページ作成についての個別説明
谷村第一小学校（佐藤先生）
- ☆平成21年11月5日
ホームページ作成についての個別説明
谷村第二小学校（小林先生）
- ☆平成21年11月5日
ホームページ作成についての個別説明
禾生第一小学校（前田先生）
- ☆平成21年11月
ホームページ作成についての個別説明
都留第一中学校（教頭先生、佐藤先生）
- ☆平成21年12月1日（火）
小中学校ホームページ作成ソフト“Plone”
第2回講習会を担当学生向けに開催
- ☆平成21年12月
ホームページ作成についての個別説明
禾生第二小学校（飯室先生）
ホームページ作成についての個別説明
都留第二中学校（元木先生）
- ☆平成22年1月19日
ホームページ作成についての個別説明
附属小学校（渡邊先生）
- ☆平成22年2月9日（火）
小中学校公式ホームページ現状についての打ち合わせ
教育委員会
- ☆平成22年2月10日（水）
13：50～14：35
附属小学校との遠隔授業（1回目）
場 所：都留文科大学4号館2階会議室
⇨附属小学校2階多目的ホール
参加者：附属小学校6年生、大学児童文化研究部員、大学情報センター職員
内 容：遠隔授業システムを利用して、附属小学校6年生に対して、児童文化研究部の学生たちによる影絵劇の上演、仕組み、色の組み合わせ方、演出法、BGMの使用法等についての学習会の実施
- ☆平成22年2月19日（金）

15:00~15:45

附属小学校との遠隔授業（2回目）【都留市情報教育研究会での研究授業として開講】

場 所：都留文科大学4号館2階会議室

⇨附属小学校2階多目的ホール

参加者：附属小学校6年生、大学児童文化研究部員、大学情報センター職員

内 容：1回目の学習会をもとに、子どもたちが作った道具を使っての影絵劇『やまなし』の上演準備

を行ってきた中で起きた疑問・質問についての学習会の実施

☆平成22年2月15日（月）～2月26日（金）

宝小学校では、日々更新作業を続けているが、新年度より新しい形式で運用することを目標にするため、現行ホームページを新しい形式に移行するためのコンテンツの整理と移植作業を実施した。

参加学生：7名（山崎拓也、都丸寛文、中村美咲、今泉麻弥、落安成美、日野淳、杉野純一）

現行のホームページ



新しいホームページ



☆平成22年2月19日（金）

16:00~17:15

都留市情報教育研究委員会への出席

- ・遠隔授業の手法について
- ・遠隔授業の来年度以後の計画について
- ・各小中学校のホームページの立ち上げ状況についての報告について説明を行った。

☆平成22年3月3日（水）

情報メディア演習Ⅰ・Ⅱの受講学生による小中学校のホームページについての作成・運用プログラムについては、以前より「山梨日日新聞」から取材申し込みが寄せられていたため、21年10月の後期授業から取材を受けることにしました。担当記者からは3回にわたり、学内での授業だけでなく、附属小学校での遠隔授業

現場での記事作成状況まで丁寧な取材を受け、平成22年3月3日付本紙の大学生活動紹介面『ときめきゾーン・キャンパス』



に大きく取り上げられた。

3. 平成22年度における活動予定

- ①遠隔授業用機器の設置（設置校については都留市情報教育研究委員会にて討議）

- ②遠隔授業・交流プログラムの実施
 ③小中学校教員の情報教育研修会の実施
 ④学生による小中学校の公式ホームページの作成と運用に対する支援

（文責：杉本光司）

II-3. 暮らしと仕事部門

1. 2009年度活動報告

- (1) 山梨県観光部「魅力メッセンジャー」事業との提携による「地元学」「地域交流研究Ⅲ」の開講

①授業の目的及び概要

「山梨」を知り、歩くことをテーマとする。授業の目的は、山梨県「魅力メッセンジャー」事業とタイアップしながら、県内の産業・仕事・文化的資源に触れ、そこに携わる人々の言動に学びつつ「地域の歩き

方」を習得することである。

授業は講義を中心とした「座学」と見学を中心とした「フィールドワーク」の2つから構成される。フィールドワークは通常の授業時間外や土曜日を活用して実施した。地域の第一線で活躍する、様々な活動の実践者（地域づくり、仕事創造、自然との共生等）による講義から、学生自身の地域づくりに活かすことのできる多くのヒントをつかむことをめざす。

②授業の内容（以下表を参照）

2009年度 講師 一 覧				
日 程	テ ー マ	講 師 (敬称略)	備 考	
4月14日	オリエンテーション	田中 夏子		
4月21日	地域学とは何か①	田中 夏子		
4月28日	都留の自然と生きもの	北垣 憲仁	都留文科大学	県関係者挨拶
5月12日	山梨の歴史（近現代）	小畑 茂雄	山梨県立博物館	
5月19日	山梨の民俗（甲州選挙）	杉本 仁	山梨の郷土史研究者	
5月26日	地域学とは何か②	田中 夏子		
6月 2日	視察にむけた事前学習	田中 夏子		
6月 9日	山梨のフルーツと農業	堀内 圓	県観光果実振興協議会元会長	
6月16日	環境保全型農業	田中 進	農業生産法人サラダボウル社長	
6月23日	郡内の伝統産業	前田 一郎	(株)前田源商店	
6月30日	甲州印伝	上原 勇七	株式会社、印傳屋	
7月 7日	富士北麓の振興	小佐野常夫	元富士河口湖町長（観光カリスマ）	
7月14日	地域学とは何か③	田中 夏子		
7月21日	上流文化の発信	鞍内 大輔	上流文化研究所主任研究員（早川町）	

現 地 視 察		
日 程	方 面	視 察 先
6月13日	富士北麓	環境科学研究所→富士吉田市歴史民俗資料館→富士山青木ヶ原樹海ネイチャーツアー→根場（災害復興）
8月2日	甲府方面	山梨県立博物館(甲州財閥によるインフラ整備/水害・自然災害/地方病との闘い等のレクチャー)→金桜園(観光農園の運営と山梨のフルーツ農業の現状)→地場産業センターかいてらす(山梨の和紙産業 一伝統・高級和紙の現代的な文化への応用等)

③それぞれの講義から得たメッセージ・キーワードから

- ◆北垣憲仁氏（動物生態研究）「川ネズミ、一年待って二秒の出会い」／尾瀬で同行した猟師さんの、経験から出てくる言葉の重み／「じっくり見る、何度も見る」「自分の生活を変えないと動物とは出会えない」／「毎日2～3秒の出会いの中から見えきたことの豊かさ」→地元学はそれぞれの人が作っていく方法論
- ◆小畑茂雄氏（山梨県立博物館）「水害の怖さを絵から読み解く」瞬間の怖さと、長期的な被害／産業用木材需要の急増+官民有区分で入会の消失/災害に弱い大地/水害を日常としていた時代の人々の暮らし→厳しい歴史的体験とそこから生まれた生活文化
- ◆杉本仁氏（郷土史家）「葬儀から見えてくる地域社会関係」「香典：あげすぎ、もらいすぎを回避し、負担を平準化する合理的な仕組み」→地方政治にまでそれが適用される風土。「甲州選挙」という、地域にとって厳しいテーマを調べ上げることの重たさ
- ◆堀内 圓氏（金桜園）／「育てる喜び、新種を開拓、試行錯誤する醍醐味」「説明することの大切さ」→生産者・消費者という関係に収まりきらない、新しい関係の構築
- ◆田中 進氏（サラダボウル）／「脱落していった人たちが農業に残れるようにするには？」→野菜を作る仕事がきちんとできること、「しかし本当はその先の風景が大事」「笑顔のある食卓が見えてくれば農業は充実する」「作り手も食べる側も、生活の質を地道に高めていく」→「自給率」アップは目標ではない。豊かに生きることの結果として「自給率」が高まっていく。
- ◆上原勇七氏（印傳屋/甲府市商工会議所）「洋服に合う新しい印傳の製品開発。当初は抵抗を感じた職人たちも、新しいものをつくる際、自分が何をやらなければならないか、考えるようになった」

「継続する伝統は、現在の人に愛されて使われること」「骨董品であってはいけない」「不易と流行のバランス取りは、消費者を裏切らず、働く人を尊重する企業経営という方針の中で行われる」

- ◆小佐野常夫氏（観光カリスマ）「事業は行政が抱え込まず、行政は先鞭をつけ、民間が後に続くよう誘発する」「職員その他、文化事業を支えるボランティアの学びの重視」「佛教経済学（シューマッハー^{*1}：等身大の経済）」
- ◆鞍内大輔氏（上流文化研究所）「町の良さを守りながら暮らし続ける」「結い返しは、長いタイムスパンの中で、帳尻を合わせるという形で地域に暮らす責任を果たしていくこと」「山の資源を薄く広く利用する」「畑、曲げ物、狩猟」の複合的な生業により、生活のリスクを分散。「山では、万能丸でない」と生きていけない」

以上、地域の暮らし、仕事、共同作業における連帯・協働と同時に、地域社会の困難な確執についても触れていただき、抽象的な地域概念の、具体的・多面的様相が把握できた。

④魅力メッセンジャーの認定

以下の内容で、「魅力メッセンジャー」事業との提携による科目を開講し、一定条件を満たした学生67名に対し、山梨県観光部から「山梨県魅力メッセンジャー」を認定していただいた。

(2) 地域再生研修会の開催

2008年度林業再生研修事業としてスタートした学習会を、農林業再生研修事業として引継、以下の学習会を実施した。

①国際社会の動向と地域の暮らし

国際社会の動向に対する関心は、「地域交

*1 「スモール・イズ・ビューティフル」講談社学術文庫にみる「仏教経済学」の理念 ①中間技術・中間組織/②極度の省力化技術を排し、手仕事の尊重/③財は私的所有から、共有と自治的管理/④地球規模の格差の是正。

流研究」にとって重要な要素であるとの位置づけで、社会学科設置授業「現代世界と平和」(佐伯奈津子先生)とのタイアップにより、イラク戦争の現場で取材を続けてこられたジャーナリスト安田純平氏を招いて、「戦争と地域」をめぐる講演会「戦争民営化と出稼ぎ労働者の実情；イラク戦争の現場から」を開催した(6月26日)。講演概要等については、『地域交流研究センター通信』16号、22頁参照。同授業では、貧困問題が深刻なネパールの山岳地帯で農業を営む人々が、戦場へと「出稼ぎ」に行く仕組みについて明らかにされた。特に、冷戦集結による軍縮が、軍事ビジネスを誘発し、そこで多くの民間労働者が働いていること、その労働者が貧困にあえぐアジア地域から広範囲にわたって招集されている等のお話は、地域社会の暮らしや仕事の安寧の探求には、地域を超えたマクロの視点や思考が必要なことなど、本部門がこれまであまり意識してこなかった重要な視点を提供してくれた。

②市民に学ぶ、農のある生活

学生たちが市内各地で農業に取り組む動きが活発化している。これを受けて、地元で農業の取り組む人々が、どのような「想い」と「技」をお持ちなのか、お話をうかがう学習会「市民に学ぶ畑づくり」を二回シリーズで開催した。なお学習会は、農業に取り組む学生サークル「ソーシャル菜園's」が中心となって講師開拓と交渉にあたり、学生主体の企画/運営で行われた。その結果、2009年度は、大月市在住の藤本兼三氏から、第一回目は「畑の哲学」(7月23日)について、第二回目は「畑の技」(10月19日)について講じていただいた。学生の感想等、詳細については、『地域交流研究センター通信』16号(23頁)、17号(32~33頁)参照。

③講演会「世界の森林の歴史と現状」の開催

昨年度から林業についての学習会を実施しており、本年度は、泉桂子先生のコーディネートで、石弘之氏(前東京大学大学院

教授)をお招きし、「世界の森林の歴史と現状」について講演いただいた(2010年2月2日)。紛争、戦争、開発や先進国での木材・エネルギー需要への対応で乱伐された第三世界の森林の状況が具体的に紹介され、木材輸出国側の貧困、災害(津波)、山火事等の頻出をもたらす、輸入国側の国際的な責務とは何等の議論にも及んだ。自らの地域の森林資源を保全と、第三世界の暮らしに対する、先進国側の責任とを結びつけた議論は、学生の興味をいっそう引きつけるものであった。詳細については、『地域交流研究センター通信』17号(29頁)参照。

2. 2010年度活動予定

(1) 山梨県観光部「魅力メッセンジャー」事業との提携による「地元学」「地域交流研究Ⅲ」の開講

2010年度は、泉桂子先生が担当され、後期に実施する。

(2) 地域再生研修会

①国際社会から地域を考える

昨年に引き続き、「社会学科設置授業」 「現代世界と平和」(佐伯奈津子先生)とのタイアップにより、講演会を実施する(既に5月14日実施済み。講師は、弁護士でビルマ情報ネットワーク代表 秋元由紀氏)。なお、運営にあたっては、地域社会学会の役員メンバーの協力を得た。

②市民に学ぶ、農のある生活

第一回目5月30日(日) 午前9時~

小形山の佐藤ファームにて圃場見学と佐藤秀次氏によるレクチャー。菜園'sはじめ、学生の農系サークルがネットワークを作って共催。

第二回目 6月 「畑を森に」をテーマとして、鳴沢村で有機・無農薬野菜づくりに取り組み、かつ同村で農業者ネットワークを組織しながら、耕作放棄地問題に取り組む萱場氏を現地に訪ねて、圃場見学とレクチャー。

(2) 地域における「社会的排除との闘い」 —障害を持った人の仕事起こしと就労 支援

2009年度まではプロジェクト研究として実施していたものを、部門の事業に位置づけて継続。

6月 住吉就労・生活支援センター 政木氏と懇談

→富士吉田の事業所における障害者就労サポートと大学の連携の可能性をさぐりたいとのこと。

(文責：田中夏子)

Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動

Ⅲ-1. 第5回地域交流研究フォーラムの開催

2月20日(土)に第6回地域交流研究フォーラム「ようこそフィールド・ミュージアムへ! 人と自然をつなぐ、人と人をつなぐ 生きいきとした新しい地域社会の創造に向けて」が、地域交流研究センターと現代GP(環境教育GP)の共催で開催された。以下にその概要を報告する。

午前中は、「山・里・町をつなぐフィールド・ミュージアム」と題し、GPの成果報告がおこなわれた。センター長の杉本光司氏の挨拶の後、GP取組責任者の坂田有紀子がGPの目的と概要を説明した後、各事業担当教員からそれぞれの教育活動の内容と、学生たちの成長の様子、地域連携の中で得たもの等についての報告があった。実際にGPの教育活動に参加した学生による発表もあり、学生ならではの新鮮な視点からの発表には会場から大きな拍手が沸き起こった。

今回の活動報告では、それぞれの発表者は、「GPでどんな教育活動をおこなったか」ということだけでなく、「その活動から何を学んだのか、何を学んだのか」という点を意識して話していた。そこには幾つかのキーワードが見られたように思う。それらは、『地域の隠れた魅力』、『魅力的な人との出会い』、『新たな視点・発見、視点の広がり』、『人とつながり』、『教え合い分かち合う』、『共有、共感、喜び』、『生き方を考えるきっかけ』、というものであった。これらの根底に通じているもの、それは「地域の魅力的な自然・文化・人を知る発見の喜び」、「人とつながり地域を創る共感の喜び」ではないだろうか。人は自然なくしては生きられ

ない、そして人は独りでは生きてゆけない。自然とのつながりの中で、人とのつながりの中で、地域を舞台に、世代を超えて違いを越えて、教え合い学び合うことによって、豊かな人間性が涵養される。そこにフィールド・ミュージアム活動の意義があるのではないかと感じた。午前中の報告内容は以下の通りである。

I. 山で学ぶ

「ナデシコとカジカがいる川を子どもたちに残すために」

坂田有紀子(初等教育学科教員)

「荒廃したアカマツ林はよみがえるのか?」

泉桂子(社会学科教員)

「ベネッセと考えた森と子どもたちの正しい関係」

白戸溪子(都留文科大学大学院学生)

II. 里・町で学ぶ

「農の原体験を求めて—大学農園整備事業—」

西本勝美(初等教育学科教員)

「私たちの小さな博物館—ほんものと出会う旅のはじまり—」

北垣憲仁(地域交流研究センター教員)

III. つなぐ・はくぐむ

「『カフェ』交差する空間の意匠

高田研(社会学科教員)

「地域を歩いて自ら学び表現する喜び・『フィールド・ノート』」

杉山由貴乃・桜井明子(都留文科大学学生・大学院生)

昼休みには1時間半の時間をあてて、軽食を取りながら大学生や地域の方々による展示を見学し・交流を広げ深めるというカフェ形式の交流会がおこなわれた。フィールド・ミュージアム、フィールド・ノート、カジカとカワラナデシコの保全活動、大地の生い立ち学習プログラム、大学食堂における食育プロジェクト、ソローの小屋建設プロジェクト、市立図書館による展示、シオジ森の学校による「つみ木広場」、ほしのさと工房の天然酵母パンの販売、フィールドミュージアムカフェによる「どて煮」の販売など、10団体から个性的かつ楽しく美味しい展示が展覧され、来場者との活発な意見交換がおこなわれた。いずれも地域に根ざし、地域との交流を育みながら続けている意義のある取組で、本学の多様な地域貢献の在り方を提示するものとなった。

午後は学生たちの企画による「フィールドミュージアムカフェ」が開催された。前半は環境音楽系ミュージシャン「亀工房」による

ミニコンサート。美しく透明で繊細な音色、躍動感あふれる力強い音色は、都留の自然や暮らしを想起させるすばらしいものであった。後半は学生の司会進行によるカフェ「顔の見える社会の再構築を—今日もカフェで大家族！—」が開かれた。地域の方々と本学理事長をゲストに迎え、大学生と地域の方々ととの交流の今昔、地域で人がつながるにはどうすればよいのか、人がつながることの意味・意義について楽しくアットホームな雰囲気の中、活発な意見交換がなされた。

都留市民、NPOスタッフ、他大学や本学の学生、本学OB、本学職員、市職員、県職員など多様な参加者が一同に集うこのフォーラムは何か新しい時代の予兆を感じさせるものであった。「人と自然をつなぐ、人と人をつなぐ」ことが「生きいきとした地域社会を創る」ことにつながる。フィールド・ミュージアム活動の意味と意義を再確認したフォーラムであった。

(文責：坂田有紀子)

III-2. 各種講座の開催

(1) 都留文科大学現職教員教育講座

平成21年度都留文科大学現職教員教育講座について、例年通り、以下の要領で現職教員講座を行った。

テーマ：教師の子ども理解と学習指導

日 時：平成21年7月29日（水）～

7月31日（金）

場 所：都留文科大学2号館2101教室

講座の趣旨

夏季集中講座を、例年の通り標記のように『教師の子ども理解と学習指導』というテーマで開催いたします。

現在、日本の子どもたちの学力をめぐってはさまざまな角度から「問題」とされており、とりわけ、子どもの読解力をどうつけるのか、そして子どもの算数・数学嫌いをどのように克服していったらよいのか、をめぐっては議論の中心になっているといつてよいと思います。しかし、残念な

ことに、これらのテーマを十分に研究・検討する前に「学力向上」対策がそれぞれの学校や教師に求められているのが現状だといわざるを得ません。また、近年もう一つのテーマとして浮上してきたのが、「ネットいじめ」やインターネットを媒介にして発生する事件・事故の増加から子どもをどう守っていくのかということです。さまざまな情報の交換を世界的規模で行う上でインターネットが欠かせない知識情報化社会の中で情報をどのように手に入れ、整理し、活用・発信するかといったいわば情報リテラシーの獲得はいまやすべての人に求められているといつても過言ではありません。今回は以上のようなことからテーマに講座を行いたいと思います

同時に、以上のことを考える上でも、一人ひとりの子どもの理解をベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり

方を探ることが決定的に重要であるということが次第に明らかになってきています。したがって、教師には、授業の場面だけでなく、地域や家庭での生活も視野に入れ、子どもの現実をトータルにとらえながら、

学習の意味や学習指導のあり方を深めていくことが求められています。

今回の講座では以上の内容を含む企画を準備しておりますので、ぜひふるってご参加下さい。

日程と内容

【第一日目】7月29日（水）

会 場：本学2号館101教室

午前 9：30～午前 9：45	受 講 受 付（本学2号館）
午前 9：45～午前10：00	『講座の趣旨について』 説明：杉本光司（地域交流研究センター長）
午前10：00～午前12：00	『子ども理解と学習指導Ⅰ』 講師：筒井潤子（本学准教授）
午前12：00～午後 1：00	休 憩（昼 食）
午後 1：00～午後 3：00	『子ども理解と学習指導Ⅱ』 講師：佐藤 隆（本学教授）

【第二日目】7月30日（木）

会 場：本学2号館101教室

午前10：00～午前12：00	『子ども理解と国語科学習指導』 －子どもたちと本の世界へ－ 講師：藤本 恵（本学准教授）
午前12：00～午後 1：00	休 憩（昼 食）
午後 1：00～午後 3：00	『子ども理解と算数科学習指導』 －子どもの目線に立った論理的思考力の育成－ 講師：植村憲治（本学教授）

【第三日目】7月31日（金）

会 場：本学2号館101教室

午前10：00～午前12：00	『今求められる情報教育リテラシーⅠ』 講師：杉本光司（本学教授）
午前12：00～午後 1：00	休 憩（昼 食）
午後 1：00～午後 3：00	『今求められる情報教育リテラシーⅡ』 講師：杉本光司（本学教授）

以上の内容で、現職教員講座を開催した。また、内容的にも参加者の反応から見て、おおむね満足できるものであった。ただ例年に比べて参加者が少なく、平均すると50名から70名という人数であったが、免許更新講座との関わりもあり、今後その影響の分析をする必要が出てくることも考えられる。ただ、これは例年、山梨県の10年次研修の講座にも指定されており、それなりの需要もあり、学生・院生が聴講するなど学内からも一定の支持を受けている。今年も例年通り実施する予定である。以下に今年

度の概容を示す。

講座の趣旨

夏季集中講座を、例年の通り標記のように『教師の子ども理解と学習指導』というテーマで開催いたします。

現在、日本の子どもたちの学力をめぐってはさまざまな角度から「問題」とされており。しかし、残念なことに、これらのテーマを十分に研究・検討する前に「学力向上」対策がそれぞれの学校や教師に求められているのが現状だといわざるを得ま

せん。こうした現状をどう乗り越えていくのか、また、学力とは何かという本質に迫るためにはどのような発想が求められるのかということについて参加者のみなさまとともに考えていきたいと思ひます。同時に、以上のことを考える上でも、一人ひとりの子どもの理解をベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探ることが決定的に重要であるということが次第に明らかになってきています。教師には、授業の場面だけでなく、地域や家庭での生活も視野に入れ、子どもの現実をトータルにとらえながら、学習の意味や学習指導のあり方を深めていくことが求められてもいます。

また、子どもの算数・数学嫌いをどのように克服していったらよいのかということも、具体的な課題としては重要です。単に学力を上げるというのではなく、算数・数学的な思考の重要性や子どもが楽しみながら学ぶためにはどのような工夫があり得るのかを検討したいと思ひます。

さらに今年も、どうしても「好きな子・得意な子」と「そうではない子・苦手な子」がはっきりしやすい教科である音楽の授業づくりを基礎から学ぶ講座も用意しました。「学びの身体性」という観点からも興味深いものとなることが期待されます。今回の講座では以上の内容を含む企画を準備しておりますので、ぜひふるってご参加下さい。

日程と内容

【第一日目】7月28日(水)

会 場：本学2号館101教室

午前 9:30～午前 9:45	受 講 受 付 (本学2号館)
午前 9:45～午前10:00	『講座の趣旨について』 説明：杉本光司 (地域交流研究センター長)
午前10:00～午前12:00	『学力とは何か』(仮称) 講師：田中昌弥 (本学教授)
午前12:00～午後 1:00	休 憩 (昼 食)
午後 1:00～午後 3:00	『子ども理解と学習指導』(仮称) 講師：山崎隆夫 (本学非常勤講師)

【第二日目】7月29日(木)

会 場：本学2号館101教室

午前10:00～午前12:00	『教科に関する研究講座Ⅰ』 －子どもがわかる授業を作る・音楽－ 講師：清水雅彦 (本学教授)
午前12:00～午後 1:00	休 憩 (昼 食)
午後 1:00～午後 3:00	『教科に関する研究講座Ⅱ』 －子どもがわかる授業を作る・算数－ 講師：滝井 章 (国学院大学教授)

(文責：佐藤 隆)

(2) 市民公開講座

平成21年度の市民公開講座として8月1～2日に「夏休み親子で楽しい自然・科学教室」を開催しました。都留市内の小学校を通じて「自分だけの小さな博物館を作ろう」「スライムの実験」「天体観測」「遊んで学ぼう

物理」「葉脈しおり作り」の5つの講座への参加者を募ったところ、子ども40人、保護者34人の参加がありました。初等教育学科教員6名のほか、初等教育学科の学生23名も、内容の選定・準備・当日の案内や指導

などを担当しました。内容が天候に左右される場合の対応などの課題点が浮かびましたが、参加した保護者の方から「このような機会をもっと設けてほしい」という嬉しい声をいただきました。

化学ゼミで担当した「スライムの実験」では、子どもたちにはもちろんのこと、保護者の方にも楽しんでもらえることを目標に、4年生4人には準備を重ねてもらいました。単にスライムを作って遊ぶだけでなく、物質についての興味を喚起できればと、高分子ゲルの性質を垣間見るための実験も取り入れました。小学校教員を目指す学生たちにとって、意義ある体験になったと実感しています。

以下にプログラムと参加した学生の声を記します。

平成21年度都留文科大学市民公開講座

「夏休み親子で楽しい自然・科学教室」

主催：地域交流研究センター、初等教育学科理科教室・生活科学教室

協力：富士急行株式会社

日程：平成21年8月1日（土）、2日（日）

会場：都留文科大学自然科学棟（ただし講座①の集合場所は富士急行都留文科大学前駅）

対象：小学校3～6年生とその保護者

- ①「小さな博物館を作ろう！」参加者：8名
日時：8月1日（土）9：30（富士急行都留文科大学前駅集合）～12：00
担当：坂田有紀子（本学初等教育学科准教授）、
北垣 憲仁（本学特別非常勤講師）
概要：セミの抜け殻、鳥の羽、植物のたね、キラキラ光る小石、身近な自然には不思議やきれいがいっぱい！お気に入りの自然を集めて自分だけの小さな博物館を作ろう！

- ②「スライムの実験」参加者：14名
日時：8月1日（土）13：30～15：30
担当：山森美穂（本学初等教育学科准教

授）

概要：ふしぎな手ざわりのスライムを作ってみよう！作った「スライム」で遊ぶだけでなく、実験もしてみよう！

- ③「天体観測」参加者：25名
日時：8月1日（土）19：00～21：00
担当：中井 均（本学初等教育学科教授）
概要：「七夕の星、織姫星（織女・ベガ）と彦星（牽牛・アルタイル）を探そう」「望遠鏡で月や木星・土星を見よう」
※曇天または雨天の場合は、お話とビデオ鑑賞、望遠鏡の見学

- ④「遊んで学ぼう物理」参加者：18名
日時：8月2日（日）10：00～12：00
担当：山本安夫（本学初等教育学科教授）
概要：子供は物理が好きです。「物理は嫌い」な大人がそれをつぶしてはいけません。まずは一緒に物理で遊びましょう。子供は風船が好き、それは物理の宝庫。子供はロケットが大好き、豪快に打ち上げましょう。電気を手作り、電気の不思議を体で感じましょう。

- ⑤「葉脈しおり作り」参加者：8名
日時：8月2日（日）13：30～15：30
担当：吉住典子（本学初等教育学科准教授）
概要：校内にある「ぎんもくせい」と「つばき」の葉っぱの葉肉を溶かして葉脈だけにして、染色します。色は赤、緑、青を用意しています。とてもきれいなしおりができていきます。

学生の声

スライムの実験で学んだこと

（興畑幸徳 よばた ゆきのり 本学初等教育学科4年）

スライム作りは、私が小学生の頃にもやったことがあるので、とても楽しむことが

できました。色や大きさなど自由に作ることができるのも楽しみのうちの一つです。今の小学生にとっても興味に沿う素材であり、当日も小学生はもちろん親御さんにも楽しんでいただきました。また、私が小学生の頃思いつかなかった蛍光粉末や鉄粉を入れた磁石にくっつくスライムなども好評でした。

いま小学生の理科離れが叫ばれています。指導する側が興味に沿った実験をしつ

かりと準備することができ、かつ楽しめる要素を織り込むことができれば、理科離れも解消していけるのではないかという光明が見えました。こういうことを教育現場で活かしていくことができればいいと思います。楽しい実験をして子どもたちの心をしっかりと掴んでいける教育が大切だと思います。

(文責：山森美穂)

(3) 県民コミュニティカレッジ講座 (開催案内パンフレットより)

昭和から平成の時代に作られた文学の名作(村上春樹『レキシントンの幽霊』、大佛次郎『天皇の世紀』、松本清張『砂の器』、中原中也『山羊の歌』『在りし日の歌』)を読むことを通して、現代日本の精神的危機(心の闇、歴史感覚の喪失、日本語の貧困化、コミュニケーション能力の欠如といった現代の日本がかかえる問題)を考察し、我々が取り組むべき諸課題をそれぞれの講師が専門分野の学問を使って提起する。

会場：都留文科大学 附属図書館

4階学習室

時間：午後7時～ 午後9時

内容

第1回：10月6日(火) 参加者：32名

テーマ：現代人の心の闇について —村上春樹『レキシントンの幽霊』—

講師：田中実(本学国文学科教授)

第2回：10月13日(火) 参加者：9名
テーマ：歴史意識の大切さについて —大佛次郎『天皇の世紀』—

講師：新保祐司(本学国文学科教授)

第3回：10月20日(火) 参加者：12名
テーマ：日本の方言分布のかかえる問題点について —松本清張『砂の器』—

講師：樋渡登(本学国文学科教授)

第4回：10月27日(火) 参加者：14名
テーマ：心と言葉の伝え方について —中原中也『山羊の歌』『在りし日の歌』—

講師：阿毛 久芳(本学国文学科教授)
(文責：杉本 光司)

III-3. 『地域交流センター通信』の発行

1. 本年度の発行について

年2回の発行、発行時期、発行部数、配布先など、ホームページ公開、原稿料の制度化、編集会議と編集小委員会の役割など、発行の基本体制が定まってきた。そういう基本条件のもとに本年度もほぼ計画どおり発行することができた。

本年度は、副編集長として田中夏子氏に就任していただいた。

2. 発行日とページ数

第16号は、2009年12月16日に発行した。36ページである。

第17号は、2010年3月19日に発行した。40ページであり、これまでで最大である。

3. 各号の編集内容と反響について

[第16号]

本号は、大田堯元学長との「交流」を焦点にした内容を組んだ。まず巻頭文として、大田先生のインタビュー「見沼・フィールドミュージアムを呼びかける」の前編を掲載した。また特集「フィールド・ミュージアムと暮らし・教育の思想」は、「大田堯元先生とともにする都留フィールド・ミュージアム」(特集サブタイトル)という視点を軸に編集した。

その特集の中の大田著「わたくしの『都留自然博物館』」からの抜粋記事に見られるように、都留フィールド・ミュージアムは、1983年には明瞭に意識され、その思想が語られていたことになる。そして約20年を経て「都留文科大学地域交流研究センター」が設立されたわけであるが(2003年)、この地域交流の実践の展開過程で改めて大田先生と都留文科大学との継続的な交流が膨らんでいった。巻頭文に見られる大田先生の「見沼フィールド・ミュージアム」の構想は、大田先生ご自身が、今日新たに挑戦しようとしてされている構想であり実践である。

都留文科大学フィールド・ミュージアムは、その立地環境という点からみれば“農村部”の取組みである。それに対して見沼フィールド・ミュージアムは、大東京に接する、自然や畑が保存された広大なエリアであり、“都市部”の取組みということになる。つまり、これまで、都留文科大学フィールド・ミュージアムは、それ自体として、自身で自身を認識するほかない仕方です手探りしながら進めてきていたわけだが、新たに比較・交流する関係をもつことになったのである。このことは、都留文科大学フィールド・ミュージアムにとって非常に大きな意味をもつ。

事実、特集「大田先生とともにする都留文科大学フィールド・ミュージアム」(特集サブタイトル)は、2009年5月に大田先生が都留文科大学フィールド・ミュージアムを三日間にわたって訪問された事実を軸にするものであるが、その訪問において私たちは改めて自分たちのフィールド・ミュージアムを見つめ直すことになったのである。これからも、都留文科大学フィールド・ミ

ュージアムを「紹介し」「伝える」という行為は、私たち自身の実践と探究の意識化を活発にさせていくことになるだろう。逆にまた、大田先生のご訪問は、巻頭文に見られるように、大田先生ご自身の探究・実践の意欲をふくらませる契機の一つになっていると判断してよいのである。

そしてこの特集記事によって、見沼にかかわる人びとと都留フィールド・ミュージアムとの実際の交流がはじまっていることも知ることができる。

トピックスは、「哲学する暮らし」と「子どもたちとともに」の二つの“小特集”風なものとして、複数の実践報告を掲載した。一つひとつの実践のいずれもが、貴重なものである。

なお本号は、『月刊社会教育』(国土社、2010年4月号)の「資料棚」コーナーで、一段にわたり詳しく紹介された。

[第17号]

巻頭文は臨床教育学の田中孝彦氏にお願いした。その「子ども理解のカリキュラムを創る試み—A. クライマン『病いの語り』から得た示唆」は、医学(医療人類学)から示唆を得た事情が書かれている。このことは、地域交流研究センターの本質や課題を考える上で、たいへん象徴的である。多くの学問分野によってなりたっている大学は、専門分化していく傾向を本性としてもつが(アカデミーとしての性質)、しかし大学の研究・教育は、同時に総合化(諸関連の見出し:ジャーナルとしての性質)への内的動機が機能していなければならない。けれども大学では、現実には、各教員の専門性の方向へのベクトル(帰属する「学会」への志向)がつよく働く。このように、容易に諸専門の「合算」に陥る可能性がある大学において、地域交流研究センターは、「地域交流」という実践分野をもつことにより、諸分野の実践・探究の内的交流を経験し、意識し、またそのような交流を可能にしていく資質を形成してもいく、共同の機関としての役割をもつ。巻頭文の「子ども理解」は、(臨床教育学という)専門に拠

りながら、他の諸専門との会話を促していくものとして、執筆をお願いした。

特集1は「地域の学校にかかわり教育と研究を問い直す—その実践と思想—」ということで、「地域の学校」とのかかわりに焦点をあてた。掲載した、特色GPのまとめとしてのSAT（学生アシスタント・ティーチャー）の取組み（佐藤隆氏）、「臨床教育学フィールド・ワーク」の実践経過報告（筒井潤子氏）、遠隔交流授業の報告（杉本光司氏）、のいずれも、年月とともに深まりを見せていることが伝わってくる。都留市教育委員会、環境保全市民会議、都留文科大学の協力によって成った『都留市環境教育副読本 第1部 都留の自然』も、画期的というべきだろう（坂田有紀子氏）。大田堯著「大学の一般教育について—ミルの大学論とファールルの学問観にかかわって—」からの抜粋掲載は、私たちの実践・探究を思想的側面から深めていくことをねらった。

特集2は、「あらたな交流を生む シートン生誕150周年記念『大哺乳類展』—国立科学博物館（東京・上野）」とした。「大哺乳類展」には、都留文科大学が協賛し、展示企画にも参加することになったが、こうしたチャンスは、言うまでもなく今泉吉晴名誉教授がもたらしてくださったわけである。その今泉氏に、シートンによる絵の写真を多数提供していただき、特集はヴィジュアルな見開きからスタートさせた。そして冒頭の記事として、今泉氏に「大哺乳類展」におけるシートンの意味について、簡潔に書いて頂いた（シートンを焦点とする画期的なお仕事は、その著訳書を写真で紹介することとした）。続いて、展示（第6室）の趣旨・概要とともに（坂田有紀子氏）、展示内容の根拠となっている日常のフィールド・ミュージアムの諸活動もあわせて紹介した（伊東麻里子氏、石井謙一氏）。また第6室の展示資料の提供を行なった北垣憲仁氏には、インタビューという方法で、ご自身の世界を語っていただいた。「いわむらかずお絵本の丘美術館」の岩村康一朗氏、朝日新聞の田村慎氏、本学広報委員長の菊池信輝氏にも執筆していただいた。この特集

の一環として、大田堯先生のインタビューの後編を掲載した。

今泉氏（地域交流研究センターの初代センター長）の監修によって「大哺乳類展」が開催されたということは「歴史的」というべきであり、この企画展（とくにシートンの「再発見」）が国内外に与える思想的影響については、通信編集部としても今後注意深く見守っていきたい。またこの企画展の一部として、都留文科大学フィールド・ミュージアムの展示がセットされたが（第6室）、この第6室が「大哺乳類展」で本質的位置を占めていることは間違いない。この第6室は、限られた準備の日時のなかで、学内の少なくない関係者がよく奮闘して実現にまでいたったのであるが、この、国立科学博物館での都留文科大学フィールド・ミュージアムの展示の実現ということも「画期的」というべきである。本特集は、こうした重要な価値の諸相を、なんとか表現しようと試みたものである。

またトピックスとして掲載した記事一つひとつも、魅力ある大切な実践である。本号では、二つの特集とともに、それぞれに年月をかけて到達してきた諸実践の結実と若々しい取り組みとを総合的に編集することができた。そういう意味で、本号は編集内容としても「画期的」なものになった。

本号も（前号とともに）、「この特集にあるような取り組みは、ぜひ自分の大学でも取り入れたいと思いました」（九州の国立大学教授）など、広く反響が寄せられている。

4. 2010年度に向けて（課題）

- ・年2回の発行ということで、第18号を11月末～12月初旬に、第19号を3月に発行する予定である。
- ・編集会議が地域交流研究センター内部の大事な交流の機会となるので、その充実を大切にしていく必要がある。
- ・市民の方を含む「感想を語り合う会」など、外部の方の声を生かす方法を研究する必要がある。
- ・「通信」を学内の授業の資料として使う

といった経験についても、情報交換していきたい。

- ・第16号に編集ミスがあり、執筆者および読者にご迷惑をおかけすることになった(第17号の37ページに〔お詫び・訂正〕文を掲載した)。今後、より慎重に編集作

業をすすめていく必要がある。

- ・地域交流研究センターに専属のアルバイトが配置されることになったが、「通信」編集実務において妥当な協力を得ていくことも、本年度の課題である。

(文責：畑 潤)

IV. 地域貢献活動

IV-1. 山梨県地域教育フォーラム南都留集会

本学は「南都留地域教育推進連絡協議会」の構成員であり、毎年晩秋に開催される「山梨県地域教育フォーラム南都留集会」では、各分科会の助言者として本学教員が参加・協力してきている。本センター設置以後は、センターが人選・依頼・派遣を担当する形をとっている。

本年度(平成21年度)は1月29日(木)、富士吉田市立下吉田第二小学校を会場に第12回目の集会が開催された。日程については、4年前から、本学教員が参加しやすい桂川祭期間中の開催を配慮していただいている。

今回の第12回集会は、第1分科会：幼保小部会、第2分科会：小中部会、第3分科会：中高部会、第4分科会：小中高児童生徒部会、第5分科会：行政・地域団体・学校部会、第6分科会：特別支援教育部会、第7分科会：PTA部会、の7つの常設分科会が設置され、それぞれ2本程度の実践レポートをめぐって検討・討議がおこなわれた。本学からは、助言者として、第1分科会に高田理孝(初等教育学科)、第2分科会に吉住典子(初等教育学科)、第3分科会に佐藤隆(初等教育学科)、第4分科会に田中夏子(社会学科)、第5分科会に西本勝美(初等教育学科)、第6分科会に森博俊、第7分科会に杉本光司(情報センター)と、7つの全ての分科会に本学教員を充てることができた。

本集会は、構成員・構成団体が官民含めてきわめて多岐に渡り、「地域教育」(地域の子どもは地域で育てる)をトータルに推進していくうえで大きな可能性を有している。したがって、本集会への協力は、本学が都留市のみならず、南都留というより広

域の諸学校・諸機関との連携を実施していくうえで貴重なネットワークづくりの一環となり得る。ただし、毎年の集会の設定では、レポートの依頼や各分科会のテーマ・柱立てなど十分に手が回らない状況のようである。ここ数年、本学教員が特定の分科会に継続的に関わり、テーマ設定やレポートの発掘の段階から協力し、それぞれの分科会が経年的に研究を蓄積できるような体制をつくれなかと事務局と意見交換もしているが、実現は難しいようである。

この点で、4年前から、集会に先立つ10月中旬に、分科会毎にレポーターおよび役員と、本学からの助言者が事前打ち合わせをおこなう機会を設定していただいたのであるが、主催者側、本学教員側の双方から好評であり、連携が一步進められたと言えよう。また、分科会によっては継続的に関わりを持つ教員も出てきている。

事後に事務局がまとめたアンケートによると、各分科会参加者の満足度はきわめて高く、とりわけ助言者の発言や役割を高く評価する回答が目立った。このような形での本学教員の「地域教育」への貢献が切実に求められており、実際に、本学教員が果たせる役割が大きいことを再認識させる結果であった。引き続き、事務局(富士・東部教育事務所地域教育支援担当)との連携を密にしながら、より発展的な協同のあり方を追求したい。

なお、平成20年・21年度の2年間の活動をまとめた「南都留の地域連携・地域交流 Vol.4」が平成22年3月に発行されている。

(文責：杉本光司)

IV-2. 都留市子ども教室事業

1. 「子ども教室」事業について

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」(平成16年度)および「地域教育力再生プラン」(平成17・18年度)を発展的に引き継ぎ、都留市子ども協育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会社会教育課生涯学習担当が事務局を担って実施している6年目の事業である。「学校の体育館やグラウンド、図書室等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、小中学生を対象とした放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの様々な活動を行う」もの。本学の学生には学生指導員としての協力・活動が期待されており、平成16年度から20年度までの5年間は、本学教員の西本勝美(初等教育学科)が、昨年21年度からは杉本光司(情報センター)が大学側のコーディネーターを担当してきた。なお、平成19年度より、市町村が費用の3分の1を負担することとなり、県下の多くの類似事業が廃止となるなかで、都留市がいち早く事業の継続と費用負担を決定したことは特筆に値し、本年度はこの運営形態での3年目となる。

学生指導員の活動の中心は「遊び」と「読書と学習支援」であるが、4地区の住民の協力体制が整ってきたこともあって、当初に比べて学生指導員の要請が回数、人数ともに若干減少する傾向にある。また、各小

学校が体育館やグラウンドを開放できる日時が、本学学生が参加しやすい日時と一致しない場合も多く、学生が多数参加できる日時の設定となるよう、事務局にはたびたび意見を出している。

そうした日時の制約にもかかわらず、今年度は活動に参加した学生が大幅に増えたことは、リピーター学生が少なくない状況からも学生たちに高い評価を得ている結果としてとらえることができる。また、市側のコーディネーターからも、学生の活動への高い評価をいただいている。学生にとってはささやかな取り組みではあるが、3年次以降の教育実習やSATとはひと味違った、より気軽に子どもたちと接する機会が持てる2年次推奨の活動として定着しつつある。都留市内の小中学校と本学とのつながりを太く、豊かなものにしていくうえで、本事業の継続と発展は重要な一環を占めることになる。

2. 今年度の活動状況

前年度に引き続き、東桂、宝、谷村第二、旭の4小学校区において、各地域協働のまちづくり推進会などの協力を得て子ども教室が実施された。小学校のグラウンドや体育館、公民館などの小学校周辺の公共施設、野外などにおいて、遊び、自然・農業体験活動、料理、文化的活動、ものづくり活動、その他特別活動や交流活動が実施された。

教室名(開始年度)	実施回数	延べ参加者数 (登録者数)	延べ指導員数 (指導員数)	主な活動内容
桂子ども教室 (H16~)	43回	758人 (162人)	148人 (69人)	・遊び(スポーツ、昔の遊び、ゲートボールなど)
宝っ子クラブ七里 (H18~)	44回	416人 (48人)	142人 (36人)	・自然体験(野菜作り、山歩き、釣りなど) ・ものづくり(手芸、陶芸、竹馬作りなど)
三吉子ども体験教室 (H18~)	42回	541人 (64人)	151人 (60人)	・料理(収穫した野菜でお菓子作り、もちつき、小正月の団子など)
旭子ども教室 (H19)	39回	302人 (18人)	89人 (30人)	・その他(絵画、将棋、囲碁、書道、学習支援、座禅、ボランティア活動など)

本年度（平成21年度）は、東桂小、谷二小、宝小、旭小の4拠点校から、年間で計66回・132名の学生指導員派遣の要請があったのに対し、学生の参加者が非常に多くなり、計54回（前年度34回）、延べ90名（前年度52名）の学生を派遣することができた。

3. 放課後児童健全育成事業（学童保育）との連携について

桂、宝、三吉の各教室では、学童保育の子どもたちにも「子ども教室」への参加を積極的に呼び掛け、学童保育を実施していない日（日曜日など）にも、一緒に活動できる居場所として「子ども教室」を開催し、連携を図った。（旭小学校は平成22年度から学童保育実施）

4. 参加者・保護者・指導員のアンケートから（抜粋）

・児童のほとんどが、子ども教室の活動は

楽しかったと回答しており、活動に満足していることがわかった。また、一番楽しかった活動には、「遊び」「自然体験」「料理」「ものづくり」などが挙げられた。また、8割以上の児童が子ども教室を通して、異学年の友だちや地域の大人の知り合いが増えたと回答した。

- ・保護者からは、子ども教室の活動に参加してから親子の会話が増えたり、進んで家の手伝いをしてくれるようになったなど、良い影響が挙げられた。また、多くの保護者が来年も自分の子どもを「子ども教室」に参加させたいと回答していた。
- ・指導者からは、子ども教室の活動を通して、子どもたちと地域の大人たちの間に交流が生まれるとともに、大人同士の横のつながりも広がっているとの意見があった。

（文責：杉本光司）

IV-3. 文大ボランティアひろば

1. 「文大ボランティアひろば」とは

本事業は、一昨年、平成20年度に開始された取り組みである。平成20年5月に、都留市社会福祉協議会の森嶋美子氏と、西本勝美地域交流研究センター長（当時）とで相談・打ち合わせをおこない、「地域のボランティアニーズと本学学生を引き合わせるシステム」の構築を目指すこととなった。ただし、福祉系の学部・学科を持たない本学では、授業とタイアップした取り組みは難しく、「大学ボランティアセンター」の設置はさらに難しい。そこで、学内にある学生ボランティアサークルを土台として、緩やかな「連絡協議会」的な会合を持つところから始めることになった。相談過程で重視し、両者で共有した「原則」は、①ボランティアはあくまで自発的なものでなければならず、大学やセンターが押し付けるも

のではない、②それぞれのサークルの個性や独自性を最大限に尊重し、新たな負担をかけない、③活動の蓄積のある既存サークルこそが新しい取り組みの中核である、といった事項であった。本事業の発展的継続にあたっては、常にこれらの「原則」に立ち戻りつつ、取り組みを見直していくことが肝要であろう。

こうして、社会福祉協議会（森嶋氏）からの呼びかけと日程調整を経て、平成20年6月から会合をスタートさせることができた。主軸となるサークルは「つくしの会」、「Σソサエティ」「つる子どもまつり事務局」の3団体である。平成21年度からは、学内の「Work-Waku都留」も主軸サークルの一つとして参加した。会合の内容は、前回の会合以降の各団体からの活動報告、社会福祉協議会からのボランティアニーズの情報提供、各団体からの協力呼びかけや新事

業の提案、地域のボランティア・コーディネーターからの意見などが中心である。社会福祉協議会にとっては、とりわけ大学生対象のボランティアニーズを持ち込む「窓口」ができたことが大きく、サークル各団体にとっては、近場のボランティアニーズを周知できること、相互の活動に触れて刺激を受け合えること、これらを通じて各団体の活動が活性化されることが大きい。また、会合の名称については学生たちの発案に委ね、最終的に「文大ボランティアひろば～だれでもどうぞ～」(略称：ぼらひろ)と命名された。この名称は、各サークルには所属していない個人としての学生や、一般の住民の参加も歓迎するという意味合いも持っている。

さて、「ぼらひろ」は発足以来、基本的には第4水曜日の午後6時15分から本学の教室にて開催されることとなったが、回数を重ねるにつれて、各サークルの活動を越えて、参加サークルや個人が協働しておこなう活動への期待も高まり、先ず「ペットボトルのキャップを集めて世界の子どもたちにワクチンを届ける」活動に取り組むことから始まった。学内の5カ所に回収ボックスを設置し、各サークルが当番で回収している。さらに、ボランティアひろばでは、新しい取組みを始める際には、その都度、新しいプロジェクトチームを立ち上げて対応することにした。こうした中から、今年度(平成21年)には「障がいのある方々の余暇活動支援」について新たな取組みが開始され、同時に、ここに参加する学生もこれまでのような部活動やサークル活動に属しない個人参加学生も迎え、定例会には毎回20名を越す学生・社会人が参加するようになり、徐々にではあるが、学生たちの間に着実に浸透しつつあることを実感できるようになった。学生と社会人とをつなぐ調整役として地域交流研究センター長の杉本光司も出席している。

2. 「いこいのひろば」の誕生

ボランティアひろばでは、社会福祉協議

会や市内の組織・団体を通して募集される、学生ボランティアの要請に対して、積極的に多種多様な活動に参加してきたが、以前からそのボランティア活動に参加している、市内の授産園「みとおし」で働く人たちとの交流の中から、日常的に、障がいのある方々への支援が、何かできないだろうかという声により、2009年6月に「ここに集うメンバーで、とにかく何か一緒に始めてみよう！」という新たな目標が掲げられた。そして、当初から中心メンバーの一人として参加している、「授産園みとおし」の佐藤保成さんから提案されていた、「障がいのある方々への余暇活動支援」の実現のための取組みを行うことにした。「文大ボランティアひろば」の交流から派生したプロジェクトとして位置付けることにより、関心のある人たちが気軽に参加できる場として、その名称も『いこいのひろば』と名付けた。「障がいの有無に関係なく、地域に住む人たちがみんなが楽しく充実して過ごせる地域」を目指し、学生だけではなく、地域に住む方々と共に、1ヶ月に1度イベントや企画を定期的に行えることを目的としたプロジェクトである。そこで、障がいのある人たちとその身近にいる人たちの声をじっくり聞こうということで、この新しい活動が2009年7月1日に始まったばかりである。

1) 「おしゃべり交流会」の開催

日時：2009年10月4日午後0時30分～3時30分

場所：いきいきプラザ都留会議室

参加者：6名+親2名 ボランティアスタッフ：10名 大学教員：2名
合計20名

プログラム：プレゼンテーション、自己紹介、アイスブレイキング、ティーブレイク+話し合い

【参加学生の感想】

これは、実際にハンディキャップを抱えている当事者の方々から、意見や思いを聞いて、これからの指針を定めていこうと計画したものです。和やかなムードの中、ゲームをしたり、お茶とお菓子を楽しんだり、

そして様々なことについて話をしたりと、とても有意義な時間となりました。

当初の目的である、地域の方々のニーズを知ることも大事ですが、まずは会そのものが楽しいものでなくてはなりません。そういった意味では、まず楽しかったという感想が大勢の方から聞いたことはとてもうれしかったと思います。

もちろんそれだけではなく、話の中で学ぶこと、働くことへの強い意欲や、将来に対する真剣な思いを聞くことができ、私達のこれまで接し方だけでは分からなかったことを知ることができました。これまで何度もボランティアの中で接してきても、まだまだお互いの心の中は知らないことだらけでした

2) 「えびす青年教室」での研修参加

2009年11月22日

【内容】

いこいのひろばのメンバーが、東京都渋谷区恵比寿にある「えびす青年教室」へメンバー5名が、見学&参加を兼ねて研修してきた。

知的障害者恵比寿教室「えびす青年教室」とは、渋谷区教育委員会が、主に知的障がいのある方々の社会教育活動の支援並びに、社会的ハンディキャップを背負った社会参加の一環を助成するため、障がい者ボランティアが一緒になって活動できる場・プログラムを提供することにより、障がい者とボランティアの人的成長、相互理解・信頼関係の構築等を図ることを目的として、原則として毎月一回支援プログラムを開催し、積極的に活動している場所である。

いこいのひろばでは、この「えびす青年教室」を活動の参考にして、自分たちの事業を展開していくことを目標に掲げ、研修させてもらうことに決めた。5つあるクラブ活動の中から、いこいのひろばのメンバーは「お食事処クラブ」「スポーツクラブ」の二つに分かれて参加した。

3) 「第二回おしゃべり交流会」の開催

日 時：2009年12月19日 午後1時～

4時

場 所：都留文科大学3号館エントランスホール

参加者：16名+親5名 ボランティアスタッフ：24名 大学教員：2名
合計47名

【参加学生の感想】

今回はクリスマスバージョンで、飾りつけはもちろん、サンタさん登場、プレゼントありと盛りだくさんの内容でした。参加人数は21人、スタッフもあわせると47人と、前回よりもかなり大規模な会となりました。スタッフも驚くほどの賑やかさに、会場もヒートアップしました。

今回も様々な意見や思いを聞くことができました。それは、仕事を含めた将来に関しての不安の解消と、人間関係をより充実、円滑にしたいという二つの願いが特に感じられたと思います。特に、休みの日にやることがない、つまらない、今日の会みたいな集まる場所が欲しいという意見が多かったため、「いこいのひろば」では今後もこのような活動を展開していきたいと思いました。

このように、今年度にスタートしたばかりのプロジェクトチームである。今後はこうしたプログラムを定例化し、毎月1回の開催を目標にし、一人でも多くの学生や市民の方たちに参加を呼び掛けていき、この「いこいのひろば」が定着できるように研修や実践活動を続けている。なお、以前から障がいのある人たちへの就労活動を支援している「暮らしと仕事」部門の担当である田中夏子がアドバイザーとして、また調整役として地域交流研究センター長の杉本光司も参加している。

3. その他の活動

「あなたも一日文大生」

日 時：平成21年9月24日

参加者：35名

谷村地域協働のまちづくり推進会では、主に高齢の方を中心に、『夢実現ひろば』という生涯学習を目的とした活動が行われて

いる。その夢実現ひろばの方々から、都留市に住んでいながら都留文学大学のことを、よく知らないという声をいただき、そこから交流企画の案が生まれた。

夏休み期間中の一日を使って、その名の通り、一日、「文大生」気分を味わっていたくというものであり、参加者からは、若い人たちとの交流の楽しさを知ったし、大学を近くに感じる事が出来たという声が寄せられ、また、これからも毎年開いて欲しいとの強い希望が寄せられました。

(プログラム内容)

- 1・オープンキャンパス
- 2・交通安全協会による交通安全教室
- 3・模擬授業（品田笑子先生による「エンカウンターについて」）
- 4・ジェスチャーゲーム・方言ゲーム
- 5・アカバラサークル「☆☆☆（みつぼし）」によるライブ
- 6・都留市民歌「今生きてます」の合唱

4. ホームページの開設

大学の公式ホームページ内に「文大ボラ

ンティアひろば」のサイトを立ち上げました。このサイトの運用には、学生だけでなく、市民の方も関わり、それぞれが記事や写真の投稿を行い、責任者に任せるのではなく、みんなで作り上げるホームページの運用を目標にしています。

内容は、「ボランティアひろばって?」、「今後のイベント」、「参加している人たち」、「次回の打ち合わせ」、「エコキャップ回収状況」、「会議録」、「記事の投稿やひろばに参加する方法」等を掲載しています。

(文責：杉本光司)



V. 地域交流研究教育プロジェクト

V-1. 障害のある人びとの、地域での就労にむけた支援のあり方について

プロジェクトメンバー

- ・田中夏子（代表・本学社会学科）
- ・森 博俊（本学初等教育学科）
- ・平林祐子（本学社会学科）

1. プロジェクトの目的と経過

本プロジェクトは、障害者就労支援の実践的な研究と、地域の人々との学びあいを目的として、主として以下の二つの課題を探究するものとした。

第一に、障害を持つ当事者及びその家族、支援者、さらに事業者を含むネットワークの形成によって、立場の異なる関係者が意思疎通を深め、狭義の福祉的就労にとどま

らない働き方をめざした、地域社会としての条件を考えると、第二にそのプロセスに学生の参加を促すことによって、理論的にも、経験的にも「共生」に対する学生たちの理解を深め、市民としての、共生的な生き方を考える機会を設けること。

プロジェクトの遂行にあたっては、外部協力者として、「親の会」の皆さん、知的障害者通所授産施設 東部授産園関係者、都留市社会福祉協議会のボランティアコーディネーター、東部圏域地域療育事業関係者より、協力、アドバイスをいただいていた。また、2005年以降、上記協力者と大学関係者として、「地域で、障害を持つ人たちの働く場を創るためのネットワーク」を構成し、

その後、「障害の有無」を問わない、「人間が大切にされる暮らしと仕事」を探求する、という目的で、2008年以降は「暮らしと仕事ネット」という呼称に変更した。

2. 2009年度の活動課題

上記のネットの性格を反映すべく、当面、以下の三つを計画・実施することとなった。

- ①学習会の開催：昨年は、地域での「研修的就労の場」の拡大をはかったが、成果が見られなかったため、その前提として、まず、市民協力者の開拓が必要であると結論に達した。その一環として、市民を対象とした学習会を開催する。
- ②就労開拓の可能性の探求：先進地域のスタディーツアーを行い、都留での応用可能性を考える。
- ③月例の情報交換、学習会の開催：学内関係者、「親の会」、知的障害者通所授産施設 東部授産園関係者、都留市社会福祉協議会のボランティアコーディネーター、東部圏域地域療育事業関係者による定例会を、原則として毎月第三木曜日に開催する。
- ④学生の関わり促進：授産施設で毎月実施しているレクリエーション活動「土曜活動」へのボランティアな参加を初め、学習会等に学生の参加を呼びかけていく。

3. 2009年度活動概要とその成果

(1) 学習会の企画・実施

発達障害に対する地域社会の理解促進が必要との意見が出され、以下の学習会を企画した。

- ①講演タイトル 「トータルケアシステムの構築を目指して」
- ②講演者 高見澤馨(たかみざわかおる)さん 社会福祉法人「ひとふさの葡萄(ぶどう)」理事長

(2) 講演会の意図

- ①情報の共有—すぐれた実践例と、考え方の整理

「ひとふさの葡萄」は、自閉症や軽度発達障害児・者の通所授産施設、デイサービス、療育相談機関に加え、地域に暮らす子どもたちの学童保育などが併設された複合型福祉施設である。山梨県内でも希な、こうした複合的な施設を設立し、運営されている高見澤氏に、地域社会における、障害を持った人も持たない人も、大切にされながら育ち、暮らし、働くことにできる仕組みを、どのように私たち自身が作っていくことができるのか、実践的なお話を多く織り込んでいただいた。

②都留市及び周辺地域でのネットワークづくりのきっかけ

同時に、郡内地域で、様々な障害とともに生きる当事者、支援者、関係者が、活動上の課題を出しあう場としてもいきたいとの意図もあった。したがって、学習会の構成は二部制とし、前半の講演会を受け、後半はグループワークを設けた。

(3) 実施

- ①日時 2009年10月24日 土曜日
13時～16時 25WS
- ②参加者 15名 富士東部教育事務所、親の会メンバー、中学校スクールカウンセラー

(4) 参加者の感想

学校関係者からは、「発達障害者の自立にむけたトータルケアの議論は、きわめて有意義で新鮮」「障害を持つ人、持たない人が共に取り組む活動、場を発展させていく必要」「事業を堅実の計画、実行している点に感銘をうけた」「教育事務所として協力できる点を探りたい」等の感想が、「親の会」からは、「実体験に基づいたお話して説得的」「こうした学習会は参加人数が少ないものの、確実にニーズがあるので、継続的に行ってほしい」「先が見えない中で、こうした話は今後の指針になる」等が寄せられた。

(2) 就労開拓の可能性の探求

昨年は近隣地域のスタディーツアーを行ったが、これらは施設関係者、親の会のメンバーにとっては既知のものも多いため、本年度は、田中が二カ所について訪問し、その就労の様子や、当該自治体の先進的な制度について、月例会で資料提供、報告を行った。

①大阪豊能障害者就労センター

(大阪府箕面市) 7月11日～12日

大阪府箕面市に障害を持った人たちの仕事起こしは1980年代から取り組まれてきた。約30年前、「障害のあるひともないひとも運営をにない」、地域に「事業をひろげ」、そこで得られた収益を「みんなでわけあう」といったスタイルで運営してきた。事業分野はアート、レストラン、リサイクルショップと多岐にわたる。なお、箕面市には、障害を持った人を雇用する事業所に対し、職業的重度障害者の雇用の場を広げる目的で、最低賃金を補償した雇用助成金制度が設けられており、「福祉的就労」とは一線を画す。また、こうした制度を可能とした地域の障害者運動のあり方も、きわめて特徴的である(例えば障害者とそうでない者との、対等の経営参加や成果配分、地域社会への貢献等)。

②べてるの家(北海道浦河町)

浦河町「べてるの家」は、既に三十年の実践があり、町起こしの一環としての昆布販売事業や、「当事者研究」の名で知られる先駆的な精神保健活動の取り組みをめぐって多くの出版物が出されている。また、「べてる」の取り組みは、浦河の町全体にわたって発信拠点を持っており、カフェ等6箇所の事業所や9箇所の生活拠点で、「地域社会とともに暮らし、働く」姿が具体化されている。

(3) 月例の情報交換・学習会の開催

研修の打ち合わせ、制度に関わる情報交換、先進地見学の報告会等を6回にわたっ

て開催した。また、山梨県ジョブコーチ養成講座に引き続き参加をし、県内関係者との意見交換をはかった。

(4) 学生の関わりの促進

- ①障害を持った人たちが、学校卒業後に置かれている状況について、社会参加や仕事世界への参加に社会的障壁が存在すること、その障壁を除去するための取り組みが、地元都留はじめ、各地で展開していることを知ってもらう。
- ②上記の情報提供に際しては、学生たちが、座学のみならず、活動に参加してみようとするきっかけを作れるよう、実践的立場にある講師の方々にお話しをいただいた。
- ③具体的には、昨年度に引き続き、社会科学の基礎科目「現代社会と市民参加」の授業で、障害を持つ人々の就労実態や、就労支援・開拓の取り組みを、実践者からお話しいただいた。

チャレンジドリーム 志村裕一氏

都留市内でのリサイクル事業を軸にした就労支援の実践→学内でリサイクルボックスの設置箇所が増えた。

けやき園 渡辺典子氏

東桂における授産施設での取り組みを始め、そもそも障害者をめぐる社会状況を歴史的な経過も含めてお話しいただいた。

神奈川ワーカーズ・コレクティブ協会

岡田百合子氏

生協という身近な活動に端を発して、障害者とともに働く仕事場づくりに、関係者が意欲的に取り組み、障害を持つ人も持たない人も含めて「働き方」が豊かになっていった経過をお話しいただいた。

(5) 学生へのあらたなアプローチ

「仕事と暮らしネット」月例会の中で、参加者から以下の提案があり、この提案を「ボランティア広場」につなぐこととなった。

- ①障害を持った人は、余暇の場が少ないと感じており、授産施設「みとおし」のメンバーからもそうした意見が聞か

れる。余暇活動としては、「土曜活動」としてレクリエーションを実施しているが、これは「みとおし」側が企画し、学生は当日加わるというスタイルで、「みとおし」の中で完結したものとなりがちだ。学生との交流はメンバーにとって大変重要な機会だが、それのみではなく、メンバーからは「みとおし」から外に出て、地域の人たちとの交流を広げたいという思いがあり、メンバーによる施設内「自治会」でもそうした要望が出されている。

- ②昨年から地域交流研究センター、都留市ボランティアコーディネーターで始まった月一回の懇談会では、学生ボランティア団体、市民の方々との意見交換、情報交換の場を持つことができ、とても有益と感じている。こうした情報交換、意見交換の段階を経て、実際に具体的なアクション（定期的なイベントの企画・運営、学習会等）を共にできるネットワークを作りたい。
- ③ネットワークの構成員は、障害を持っている人が地域で暮らすために何が必要か、関心を持ってくれる学生、市民、施設関係者、親の会、当事者、市内の事業者、学校関係者など、いろいろな人が想定される。イベント一つをやるにしても、考え方の違いを出し合い、アイデアを豊かなものにしていくことができ、関わる自分たちも成長できると考える。
- ④こうした活動のモデルとして、自分が想定しているのは、前職、「パレット」（社会的企業の一つでレストラン等を運営する組織）での経験である。パレットが立地する渋谷区では、社会教育の一環として「えびす青年教室」が開催されている。障害を持った人たちが、社会参加するきっかけを作ろうと月一回、イベントの企画を行っており、「みとおし」職員もボランティアとしてそこに関わっていた。例えば「ダンスを学ぼう」等の企画では、当初出された企画を喧々囂々（けんけんごうごう）

の議論の中で練り直し、プロの指導者に協力をあおぎながら、人と身体を触れあわせる時のルールづくりや、そのルールを守ることの重要性等を自分たちも障害を持った人たちも共に学んだ。

- ⑤具体的には以下のような形で、「いこいの広場」の活動が始動した。
 - ・5月27日 大学ボランティア懇談会で上記のようなネットワークづくりを提案。懇談会出席者から、協力者を募る。
 - ・6月17日を候補日として、第一回目のネットワーク準備会を開催する。
 - ・ネットワーク準備会は白紙の状態なので、話題提供として、「地域に広げた取り組み」のイメージづくりを行う。その一つとして、「えびす青年教室」についてリサーチし、現地で関係者に話を聞く。しかしえびす方式を全面的に踏襲する必要はなく、飽くまで都留でのやり方を考える題材として扱う。
 - ・以上受けて、2009年7月以降、障害のあるとなしとに関わらず、地域での暮らしを豊かにすることを目的とした「いこいの広場」が結成され、プロジェクト研究からは別立ての形で、ボランティア広場の有志メンバーを中心に動き始めている。

4. まとめ

2009年度でプロジェクトは終了となった。当初、目的とした「就労支援」「就労開拓」に関わる実践を具体化することはできなかったが、以下の点で成果と反省点である。

(1) 成果

- ①市内・市外の、障害者関係の団体、キーパーソンとの恒常的な話し合いの場が生まれ、情報交換の回路ができたこと。
- ②これまでは、学生によるボランティアも単発になりがちで、継続的に当事者たちの関係を形成するという形になり

にくかったが、支援・被支援関係ではない、「地域での顔馴染み」関係といった要素が生まれてきたこと。

(2) 反省点

- ①当初は、学校を卒業した後の、人生の描き方に不安をもつ「親の会」、働く機会の拡充が必須と考える授産施設関係者の思いから出発したプロジェクトであり、「就労」をめぐる地域社会のあり

方について、具体的な提案につなげることを目的としていたが、その点での成果は乏しかった。

- ②各地の先進的な実践は、結果の部分だけ見てそれを導入することは難しく、そこにいたるプロセスもまた地域固有の要因が大きいいため、参考としながらも、都留独自の方法、道筋を見つめることが重要であることを再確認させられた。

V-2. 「地域の自然と地域の人々から学ぶ実践的環境教育『シオジ森の学校』との連携」

プロジェクトメンバー

坂田有紀子（本学初等教育学科教員）
一柳 英隆（本学非常勤講師、財団法人
自然環境研究センター）、
協力：シオジ森の学校

本事業の目的と概要

小学校における環境教育の重点の一つとして、自然体験を積極的に取り入れ、豊かな感受性を育成することが挙げられている（文部省 環境教育指導資料）。一方、小学校における環境教育の問題点として、専門的知識・技能を持った教員が少ないこと（H13年度 神奈川県体験的環境学習推進事業報告書）が挙げられている。これは現場の教員、元をたどれば教師の卵である学生の自然環境に関する知識や自然体験が圧倒的に少ないことが原因の一つであると思われる。そこで、本事業では、教員の卵である本学初等教育学科の学生が、「シオジ森の学校」に大学生スタッフとして参加し、自然環境教育についての実践的な経験を得ることを目的とする。

※「シオジ森の学校」は、北都留周辺の豊かな森林環境や森と共存した地域社会の在り方を後世に伝承してゆくことを目的に、大月を中心として森林環境教育を展開しているNPO。

活動内容とその成果

本プロジェクトは平成19年度に採択され21年度が最終年度であったことから、本報告ではプロジェクトの総括的な報告をおこなわない。シオジ森の学校には本プロジェクト採択以前の平成17年度から本学教員の坂田有紀子がプログラム作成委員兼講師として、本学学生が現地ボランティアスタッフとして参加してきた。シオジ森の学校で開講される講座は若干入れ替わりがあるものの、概ね表1のような講座を一般市民や地域の子供たちに向けて毎年開講している。H21年度は、5つの講座が開講され、述べ21人の学生が参加した（表1）。ちなみに平成19年度は延べ41名、20年度は35名の学生の参加があった。

シオジ森の学校への参加はH17年度から始まったものであるが、最初の2年間は、学生は補助スタッフとして講座当日のみ参加し、企画・運営には携わってこなかった。当初、森の学校が学生スタッフに期待したのは、高い専門性、つまり、“自然観察の指導や補助”であったが、実際は指導というより、“子どもの話し相手、講師のアシスタント”が主な役割となっていた。学生たちは子供たちに積極的に話しかけ、子どもたちと上手にコミュニケーションを取っていたという点では、一般参加者やスタッフの都留文科大生に対する評価は非常に高かつ

表1 シオジ森の学校 平成21年度講座一覧

講座名	講座対象者と内容	期日	講師
A シオジの森を歩こう	①シオジの森を歩こう ②シオジの森の花を楽しもう ③シオジの森の紅葉を楽しもう	6月6日 7月18日 10月24日	安富 芳森 (森林インストラクター)
B 森で楽しもう	①シオジの苗木植樹 ②下草刈り、キャンプ ③巣箱をかけよう	5月23日 8月3日・4日 10月31日	天野 立実 (大月森林組合参事) 下澤 直幸 (大月市教育相談センター) 中橋 正明 (建具作家)
C 役立つものをつくろう	間伐材で椅子とテーブル作り	5月30日	伊藤 仁 (画家) 坂田有紀子 (都留文科大学) 一柳 英隆 (ダム水源地環境整備センター)
D1 森の生活を楽しもう	都留市鹿留における動物観察や川遊び	8月9日・10日	
D2 森の生活を楽しもう	上野原市西原での手作りテント生活や間伐体験	8月30日・31日	森のココベリ 中田 無双 (北都留森林組合)
オープンキャンパス	森のコンサート・ つみ木の王国・木工教室	3月6日	下澤 直幸 (大月市教育相談センター)

表2. キャンプ「森の生活を楽しもう」のプログラム (平成21年度)

時刻	8月8日(土)	時刻	8月9日(日)
9:00	集合(都留文科大学前駅)・出発	4:00	ムササビ帰巢観察
10:00	開校式と説明 (キャンプの趣旨、日程の説明、自己紹介等)	6:00	朝食の支度
11:00	テントの設置	7:00	朝食(オープンサンドとスープ)
12:00	昼食(弁当持参)	8:00	草木染め
13:00	ドラム缶風呂準備	10:00	後片付け
14:00	川遊び&川の生きもの観察、 ドラム缶風呂	12:00	閉会式 (参加者の感想、記念撮影、アンケート)
16:00	夕食の支度(カレー、サラダ、飯盒炊飯)		
17:30	夕食		
19:00	動物の観察&ナイトウォーク (ムササビ、野ネズミ、昆虫トラップ)		
21:00	就寝		

た。しかし、当初期待されていた専門性を活かした指導という点では不十分な点が多かった。

そのため本プロジェクトが採択されたH19年度からは、学生の自然観察や野外活動における指導技術の向上を目的として、学生の企画・運営によるキャンプ「森の生活を楽しもう」を都留市鹿留川の支流大沢のほとりで毎夏おこなった。H19年度に参加し

た学生は17人、H20年度は17人、H21年度は13人でその多くは初等教育学科の学生であったが、英文学科、国文学科からの参加もあった。地域の子供たちの参加は、H19年度7人、H20年度16人、H21年度19人で中には毎年楽しみにして参加してくれるリピーターもいた。この他にも一般参加者として地域の大人たちやシオジ森の学校のスタッフの参加も毎年7~10人程度あった。

表2にキャンプのプログラムの概要を挙げたが、このキャンプでは、「森の生きものたちとの出会い」をテーマに、ムササビや野ネズミ、水生昆虫の観察、草木染や森の生きものビンゴラリーなど、子どもたちと一緒に楽しむためのプログラムを学生が主体となって企画する。キャンプの計画、活動内容の検討や教材研究、準備や段取り等々、全てを大学生だけでおこなうことを目標に取り組んでいるが、参加する学生の多くはテントを張ったこともなければ、火を起こした事もないという学生ばかりである。そのため、毎年4月から打合せを何度もおこない、下見や教材研究、テント張や火起こしの練習、必要物品の準備・救急法の実習など、様々なケースやトラブルを想定しての入念な準備を重ねた。

急な雷雨によりプログラムの変更等を迫られる年もあったが、入念な下準備のおかげで毎年臨機応変に対応でき、全てのプログラムを楽しく安全に成し遂げることができた。学生たちにとっては大きな負担と試練を課す活動であったが、本番で子ども達と笑顔で接している姿はとても頼もしく、キャンプをやり遂げた後の彼らの表情からは、彼ら自身がこのキャンプを通して大きく成長した様子が毎年伺えた。テントを張ったこともなければ、火を起こした事もない、動物観察も川遊びも初めてという彼らが、3か月の試行錯誤と苦勞の末に、キャンプを成し遂げ大きく成長する姿は、傍で見守る我々教員にとっても、毎年感動的な体験である。このキャンプや森の学校への参加を通して、学生たちは地域の自然や人々、子どもたち、そして仲間たちから、自然のすばらしさや奥深さ、自然との付き合い方、野外活動の際の注意点、企画力や実行力、コミュニケーション力など、大学の講義だけでは学ぶことのできない、様々な知識や経験を得、成長していったように思う。地域から学ぶこと、それは大学で学ぶ理論に輝きをもたらすととても有効な機会になっていることを実感した取り組みであった。以下にごく一部ではあるが、参加した子供たちと学生の感想を記しておく。

子供たちと保護者の方の感想

- ・お姉さん、お兄さんがやさしく声をかけてくれてうれしかったです。また来たいです。
- ・ネズミとかいろんな虫を見つれたり川に入ったりして楽しかった。
- ・夕立があつてすこしがっかりしたけど、みんなでおいしいカレーが作れてよかった。
- ・スタッフの皆さんはじめ学生の方々にいろいろお世話になりました。子どもたちにはやさしく丁寧に指導していただき、子ども達も十分満足していました。プログラムも自然を満喫できるように工夫されていて、子ども達の顔が生きいきとしていました（森の動物、川の生きものにふれ合えて満足でした）。楽しい2日間をありがとうございました。

学生たちの感想

○火起こしで学んだこと

初等教育学科 山口紗絵子

このキャンプを通して私は、当日までの準備を含め、多くのことを学びました。今回のキャンプでは薪と炭で火を起こしてご飯とドラム缶風呂を用意することになっていました。私は、飯盒炊飯もドラム缶風呂も初めてで、火を起こすこと自体、その方法や必要な燃料など、わからないことだらけでした。市販の着火材を用いなくて火を起こすにはどうすればよいのか、いろいろ調べていくうちに自然の中に燃えやすい樹木（アブラチャンやスギ、マツ、シラカバなど）があり、それらを利用すればよいことがわかりました。事前の準備と練習も入念におこない、実際にそれらを燃やしてみてもパチパチと火が勢よくついた時は感激しました。キャンプ当日は他のメンバーや地域の方の協力もあって、ドラム缶風呂・食事ともに順調に進められ、ホッとしました。

食事ではカレーやオープンサンドをメニューに取り入れましたが、子どもたちも積極的に楽しみながら調理に取り組んでくれ、とてもスムーズに進めることができました。ドラム缶風呂も子どもたちが「気持ちいい」ととても喜んでくれて、頑張ってきてよか

ったなあ実感しました。このキャンプを通して私は、たくさんの子どもの笑顔に出会い、自然にふれあうことの楽しさや喜び、自然を大切にすることが必要だということを確認できました。大変なことも多かったけれど、このキャンプに参加して本当によかったと思います。

○キャンプを終えて

初等教育学科 堀 綾乃

「あっ、顔出した!」「わー、飛んだ飛んだ!」子ども達の歓声やキラキラした瞳でムササビを見つめる姿を見て、この係の担当になって本当に良かったと思いました。私は今回のキャンプで動物観察の担当を選びました。理由は動物が好きだからという

実に単純なものだったのですが、一柳先生の指導のもと始まったその準備は、想像以上に大変なものでした。動物相手なので「必ず」という言葉はありません。常に「もしも」「まさか」の事態を想定しながら何パターンもの観察の準備を現地に何度も訪れてました。「大変な係を選んでしまった。」そう思ったことも何回もあります。しかし、準備の際にムササビや野ネズミを見て感動し、「同じ思いを子ども達にもしてほしい!」という気持ちが生まれ、体を奮い立たせることができました。今回のキャンプでメインと言われた動物観察となったのかはわかりませんが、子どもの生き生きとした生き物への眼差しを見ることができてとても嬉しかったです。

V-3. 「食育に関する研究—血圧と塩との相互作用について」

プロジェクト責任者

吉住典子（本学初等教育学科教授）

始めに

2005年に食育基本法が制定され、それを受けて2006年には都留市でも「つる食育推進プラン策定委員会」が設置され、そのプランを策定した。委員会の議長を引き受けて会議を重ねていたが、会議資料から都留市の問題点が浮かび上がってきた。問題点の一つに生活習慣病があり、その中で病院受診者数調査での「高血圧患者」がダントツに多いことが判明した。当時、高血圧の原因は多量の食塩摂取であるといわれていたので、お茶請けに漬け物を食べる都留市民の習慣から考えてそのことは当然と思い、高血圧関連の研究を思い立った。安価な尿中塩分量の測定機器（朝一回の測定で前日一日分の塩分が推定できる：2万円/個）が販売されていることも実現可能性の高さを確認するものであった。専門書を読むと、1970年代までは高血圧の原因は遺伝子にあり、多量の食塩摂取が高血圧を生み出すということが確認された。その後の詳細研

究において、0.5g/日の減塩食を7日間摂取し、次いで14.6g/日の高塩食を7日間摂取したときの平均血圧の上昇が10%以上上昇する場合を食塩感受性群といい、血圧上昇がこれに満たない群を食塩非感受性群としている。しかし、食塩感受性高血圧は危険因子を伴いやすい病態であるので、的確に診断し、臓器保護を念頭においた治療を行う必要があり、日常生活での実験には適さないという問題点を抱えている。しかも、その後の1988年の大規模疫学調査のインターソルト・スタディで高血圧との関係が弱いことが判明している。しかし、日本では、高血圧と食塩摂取の関係を重視する専門書も少なくない。

一方、摂取食塩量は腎Na（ナトリウム）排泄機能＝尿中塩分量と密接に関連していることが知られている。それは、血液中のナトリウム濃度は腎臓の働きによりほぼ一定の142mEq/l（約3g Na量）に維持されているためである。しかし、腎臓のナトリウム排泄能が弱いと排泄能以上の食塩を摂取した場合に血液中にナトリウム貯留が起こり、ナトリウム濃度を一定にするために、水分量が多くなり血液量が増えて心臓に対

する負担が増加する。その結果、血圧が上昇する。これが高血圧症の原因が明確な腎性高血圧症であり、食塩摂取量を控えれば血圧が下がるという理論である。

目的

日常生活の中で健康を維持していくためには、食生活管理が大切であるということは分かっているがその管理方法は個人にまかされている。しかし、その管理方法は目に見える形で成果が現れないため、実施がむづかしい。本研究では、尿中塩分量と血圧に関する研究を食育に関する研究の中心課題として取り上げ、そこから、食生活全体の管理に広げることを視野に入れることを目的とした。

実験

予備調査として、2007年度に大学職員5名、市役所職員5名の健康者である被験者を得て、7日間一定カロリー（約1600Kcal/日）で一定減塩（6g/日）の食事を提供し、その次の日の朝に尿中塩分量、および血圧測定の記事をお願いした。結果として、7/10名が提供食事の一定塩分摂取で一定量の尿中塩分であることが得られた。逆算すれば、尿中塩分量を測定することで、カロリーを算出できるということにもなる。

この一定カロリー食については、メニュー、調理、衛生管理の面から専門的に食材を扱っている会社「タイヘイ」の冷凍食事を採用することにした。この一定カロリー・一定減塩食事は一人分の費用が3000円/日かかる高価な実験である。2007年度の予備調査で食材だけで、21万円の消耗品費を使用した。そこで2008年度と2009年度は地域交流センターに補助金を申請し、本実験を実施することにした。

さらに、この実験には、減塩モニタ（尿中塩分量測定器）および血圧計（2万円/台）の機器も使用する。2008年度には、市役所職員15名、大学教職員・学生15名に実施を依頼した。依頼者には、健康者だけで

はなく生活習慣病である、高血圧者、高血糖（糖尿病）者にも参加を依頼した。実験は、全3週間をかけて実施した。最初の1週間は通常食事で、尿中塩分量測定に馴れてもらおう。2週目は提供食事摂取による実験、3週目は提供食事を学習してもらって自分の食事を改善した実験である。2週目の提供食を食べるだけでなく、毎日尿中塩分量と血圧（朝晩）測定し、記録し、万歩計も加えるという非常にきつい実験となり、学生実験参加者はデータを記録することもできない者もいた。その結果、ほとんどの被験者において、提供食の一定塩分量摂取の場合での尿中塩分量が摂取塩分量よりも少し少ない一定量を示す場合が多かったが、中には摂取した量よりも排出量が多い場合や非常に少ない場合のものもいた。しかも、測定が大変で学習がほとんどできないという結果となった。そこで、確認作業を行う必要を感じ、2009年には再度同様の実験を5日間の提供食と5日間の通常食で同様の実験を行った。

結果

提供食において尿中塩分量は摂取した食事の塩分量に比例している被験者が多く、そのような人は尿中塩分量を測定することにより摂取カロリーを逆算することができる可能性が高い。しかしながら、提供食での尿中塩分量が一定でない場合には、通常食での食事の摂取カロリーを逆算することができない。その場合をどのように考えたら良いか、分析をしている。しかしながら、血圧においては、減塩食事の提供で変化する被験者はまったく見られなかった。2010年度は、実験を学生あるいは大学職員の健康者に限定して、提供食に塩分量測定済みの漬け物を加えた実験を試み、基本的な食生活管理システムを考案する予定である。

また、2008年度～2009年度の実験調査については紀要にまとめる予定である。

(付) 2009 (H21) 年度地域交流研究センター担当教員

杉本 光司	情報センター教授	地域交流研究センター長
佐藤 隆	初等教育学科教授	地域交流研究センター次長 発達援助部門担当
畑 潤	社会科学教授	地域交流センター通信編集長
坂田有紀子	初等教育学科准教授	フィールド・ミュージアム部門担当
筒井 潤子	初等教育学科教授	地域教育相談室担当
田中 夏子	社会科学教授	暮らしと仕事部門担当
今泉 吉晴	本学名誉教授・ センター特別非常勤講師	フィールド・ミュージアム部門担当
北垣 憲仁	センター特別非常勤講師	フィールド・ミュージアム部門担当
品田 笑子	センター特別非常勤講師	地域教育相談室担当

2009 (H21) 年度地域交流研究センター運営委員

福田 誠 治	副学長	渡 辺 豊 博	社会学科
菊 池 信 輝	広報委員長	伊 香 俊 哉	比較文化学科
西 本 勝 美	初等教育学科	重 原 達 也	学生課長
楠 本 六 男	国文学科	深 澤 祥 邦	企画広報担当
鷺 直 仁	英文学科	田 中 一 利	市民代表

2010年7月22日 発行

編集者 都留文科大学地域交流研究センター

発行者 都留文科大学
〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1
電話 0554-43-4341

印刷所 有限会社 印刷エトリ
〒402-0052 山梨県都留市中央2-7-24
電話 0554-43-3451
